

# 旭・小島古墳群

— 杉ノ根・屋敷内・三空山・森西・森ノ下地区 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書VI

2008

本庄市教育委員会

# 旭・小島古墳群

一 杉ノ根・屋敷内・三空山・森西・森ノ下地区 一

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書VI

2008

本 庄 市 教 育 委 員 会

## 序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そうした豊かな歴史的背景と文化的風土をもつ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書に報告する旭・小島古墳群も、4世紀の小型方形墳の形成にはじまり、7世紀の群集墳の築造に至るまで、300年以上にわたり、継続的に造営された県内有数規模の古墳群として知られています。本庄市教育委員会では、この古墳群の重要性を考慮し、昭和63年度から始まった小島西土地区画整理事業においても、逐次発掘調査を実施し、遺跡の記録保存につとめてまいりました。その間に蓄積された調査成果は、学術的にも貴重なものが多く、今回の報告の中にも、三奈山8号墳出土の「甲冑を着用した武人」をはじめとする人物埴輪群や「飾り馬」の埴輪など、古墳時代の風俗を解明する上で重要な資料収録することができました。

貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた地元小島地区の皆様、小島西土地区画整理事業関係の各位、さらには直接発掘調査の労にあたられた皆様に心よりの御礼を申し上げます。

平成20年3月

本庄市教育委員会  
教育長 茂木孝彦

## 例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島2丁目、3丁目、小島、下野堂ほかに所在する旭・小島古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄市小島西土地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当者は、それぞれ各節の冒頭に記したとおりである。
4. 整理調査期間は以下のとおりである。  
自 平成19年4月1日  
至 平成20年2月5日
5. 整理調査および本書の編集担当者は以下のとおりである。  
本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之
6. 本書の執筆担当者は以下のとおりである。  
本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之
7. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行った。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
9. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元 陽光 新井 端 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上 裕一  
小野澤雪絵 内山敏行 江原昌俊 大谷 徹 賀来孝代 加部 二生  
車崎正彦 小林 修 坂本和俊 島田孝雄 志村 哲 杉山晋作  
滝沢 誠 鳥羽政之 長井正欣 中里正憲 中沢良一 日高 慎  
深澤敦仁 山崎 武 外尾常人 金子彰男 田村 誠 丸山 修



10、本報告の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に関係する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 坂本敬信(平成元・2年度)

塩原 暁(平成3～10年度)

福島 巖(平成11～17年度・平成18年2月17日まで)

茂木孝彦(平成17～19年度・平成18年2月18日から)

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 荒井 茂(平成元年度)

金井善一(平成2～5年度)

荒井正夫(平成6～8年度)

中村 勝(平成9年度)

渡辺正彦(平成10・11年度)

倉林 進(平成12・13年度)

掛斐龍一(平成14～17年度)

丸山 茂(平成18・19年度)

参 事 宮本 清(平成2年度)

社会教育課長 荒井正夫(平成元年度)

坂上英夫(平成2～5年度)

中島正和(平成6～9年度)

恩田高治(平成10年度)

阿部 均(平成11・12年度)

田中靖夫(平成13・14年度)

吉田敬一(平成15～17年度)

同課長補佐 中島正和(平成元年度)

吉田敬一(平成2～6年度)

小暮浩一(平成7・8年度)

中村文男(平成9～11年度)

福島保雄(平成12～14年度)

桜場幸男(平成15～17年度)

上野良一(平成16・17年度)

文化財保護係長 中島正和(平成元年度)

長谷川勇(平成2～6年度)

増田一裕(平成7～14年度)

吉田 稔(平成15～17年度)

文化財保護係 長谷川勇(平成元年度)

増田一裕(平成元～6年度)

太田博之(平成元～17年度)

赤尾直行(平成元～3年度)

佐藤好司(平成3～9年度)

遠藤優子(平成4～6年度)

塩原 浩(平成7・8年度)

関根君江(平成9・10年度)

我妻浩子(平成11～15年度)

斉藤みゆき(平成16・17年度)

松本 完(平成12～17年度)

町田奈緒子(平成13～15年度)

逆井洋美(平成16年度)

的野善行(平成17～19年度)

文化財保護課長 前川由雄(平成17・18年度)

儘田英夫(平成19年度)

同課長補佐 増田一裕(平成17・18年度)

鈴木徳雄(平成17～19年度)

埋蔵文化財係長 鈴木徳雄(平成17・18年度)

係 長 太田博之(平成19年度)

埋蔵文化財係 太田博之(平成17・18年度)

恋河内昭彦(平成17～19年度)

松澤浩一(平成17～19年度)

松本 完(平成17～19年度)

的野善行(平成17～19年度)

大熊季広(平成19年度)

調査担当者 長谷川勇(平成元～3年度)

佐藤好司(平成3～9年度)

増田一裕(平成10～14年度)

太田博之(平成12～18年度)

松本 完(平成12～19年度)

町田奈緒子(平成13～15年度)

的野善行(平成17～19年度)

大熊季広(平成19年度)

## 凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。
2. 各遺構における方位針は座標北を示す。
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

### [遺 構 図]

遺構平面図…1/160 ・ 1/200

土層・遺構断面図…1/40 ・ 1/80

### [遺物実測図・拓影図]

埴 輪…1/4

須 恵 器…1/4

土 師 器…1/4

その他のものについては、個別にスケールを示した。

4. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段…とした。
5. 円筒埴輪観察表の「底部・巻き」の「左・右」は、基部を成形する粘土板の巻き合わせの方向を示し、製作者側（上）からみて左端を上重ねたものを「右」、右端を上重ねたものを「左」とした。
6. 円筒埴輪観察表の「底部・瓦痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
7. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
8. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示し、アミは埴丘盛土層を示す。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行数値地図1/50,000「高崎」に加筆したものをを用いた。
11. 本書で使用した位置図は、本庄市発行「本庄市都市計画図（デジタル版・1/2,500対応）」に加筆したものをを用いた。
12. 本書で用いた古墳時代の区分は前方後円墳集成畿内編年（広瀬1992）に拠った。文中での表記は単に「集成〇期」として略記した。
13. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の成果	
1 杉ノ根1号墳	10
2 杉ノ根2号墳	14
3 杉ノ根3号墳	16
4 杉ノ根4号墳	18
5 杉ノ根5号墳	20
6 杉ノ根6号墳	22
7 杉ノ根7号墳	25
8 杉ノ根8号墳	28
9 杉ノ根9号墳	31
10 杉ノ根10号墳	32
11 屋敷内1号墳	35
12 屋敷内2号墳	37
13 屋敷内3号墳	38
14 三ヶ山8号墳	41
15 三ヶ山9号墳	64
16 三ヶ山14号墳	88
17 森西1号墳	91
18 森西2号墳	102
19 森ノ下1号墳	108
IV 結 語	111
引用・参考文献	
写真	

## 插图目次

图1 周辺の遺跡……………3	图40 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(6)……48
图2 旭・小島古墳分布図……………8	图41 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(1)……………50
图3 調査区位置図……………9	图42 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(2)……………51
图4 杉ノ根1号墳……………11・12	图43 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(3)……………52
图5 杉ノ根1号墳断面図……………13	图44 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(4)……………53
图6 杉ノ根2号墳土層断面図……………14	图45 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(5)……………54
图7 杉ノ根2号墳……………15	图46 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(6)……………56
图8 杉ノ根2号墳出土土器実測図……………16	图47 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(7)……………57
图9 杉ノ根3号墳……………17	图48 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(8)……………58
图10 杉ノ根3号墳土層断面図……………18	图49 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(9)……………59
图11 杉ノ根4号墳断面図……………18	图50 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(10)……………60
图12 杉ノ根4号墳……………19	图51 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(11)……………61
图13 杉ノ根5号墳土層断面図……………20	图52 三奈山8号墳出土土形埴輪実測図(12)……………62
图14 杉ノ根5号墳……………21	图53 三奈山9号墳土層断面図……………64
图15 杉ノ根5号墳出土土器実測図……………22	图54 三奈山9号墳……………65・66
图16 杉ノ根6号墳土層断面図……………22	图55 三奈山9号墳出土土器実測図……………68
图17 杉ノ根6号墳……………23・24	图56 三奈山9号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(1)……70
图18 杉ノ根7号墳断面図……………25	图57 三奈山9号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(2)……71
图19 杉ノ根7号墳……………26	图58 三奈山9号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(3)……72
图20 杉ノ根7号墳出土土器実測図……………27	图59 三奈山9号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(4)……73
图21 杉ノ根7号墳出土朝顔形埴輪実測図……………27	图60 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(1)……………74
图22 杉ノ根8号墳土層断面図……………28	图61 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(2)……………75
图23 杉ノ根8号墳……………29・30	图62 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(3)……………76
图24 杉ノ根9号墳……………31	图63 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(4)……………78
图25 杉ノ根10号墳土層断面図……………32	图64 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(5)……………79
图26 杉ノ根10号墳……………33・34	图65 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(6)……………80
图27 屋敷内1号墳土層断面図……………35	图66 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(7)……………82
图28 屋敷内1号墳……………36	图67 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(8)……………83
图29 屋敷内2号墳……………37	图68 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(9)……………84
图30 屋敷内2号墳土層断面図……………38	图69 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(10)……………86
图31 屋敷内3号墳……………39	图70 三奈山9号墳出土土形埴輪実測図(11)……………87
图32 屋敷内3号墳土層断面図……………40	图71 三奈山14号墳土層断面図……………88
图33 三奈山8号墳土層断面図……………41	图72 三奈山14号墳……………89・90
图34 三奈山8号墳……………42	图73 三奈山14号墳出土土門筒埴輪実測図……………91
图35 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(1)……43	图74 森西1号墳土層断面図……………92
图36 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(2)……44	图75 森西1号墳……………93・94
图37 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(3)……45	图76 森西1号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(1)……95
图38 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(4)……46	图77 森西1号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(2)……96
图39 三奈山8号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(5)……47	图78 森西1号墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(3)……97

図79	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(4)……98	図85	森西2号墳……………103・104
図80	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(5)……99	図86	森西2号墳土層断面図……………105
図81	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(6)……100	図87	森西2号墳出土土器実測図……………106
図82	森西1号墳出土形象埴輪実測図(1)……………100	図88	森ノ下1号墳土層断面図……………108
図83	森西1号墳出土形象埴輪実測図(2)……………101	図89	森ノ下1号墳……………109・110
図84	森西1号墳出土金輪実測図……………102		

## 写真目次

写真1	杉ノ根2号墳A地点・杉ノ根3号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]		
	杉ノ根4号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]		
	杉ノ根5号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]		
	杉ノ根5号墳B地点 周堀検出状況 [北東から]		
	杉ノ根6号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]		
	杉ノ根7号墳A地点 周堀検出状況 [東から]		
	杉ノ根8号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]		
	杉ノ根9号墳A地点 石室根石検出状況 [南から]		
写真2	屋敷内1号墳A地点 調査区全景 [南西から]		
	屋敷内2号墳A地点 周堀検出状況 [北から]		
	屋敷内3号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]		
	三笠山9号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]		
	三笠山14号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]		
	森西1号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]		
	森西2号墳B地点 周堀検出状況 [東から]		
	森西2号墳C地点 周堀検出状況 [北東から]		
写真3	杉ノ根2号墳出土土器		
	杉ノ根5号墳出土土器		
	杉ノ根7号墳出土土器		
	杉ノ根7号墳出土朝顔形埴輪		
			三笠山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪(1)
		写真4	三笠山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)
		写真5	三笠山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)
		写真6	三笠山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪(4)
		写真7	三笠山8号墳出土形象埴輪(1)
		写真8	三笠山8号墳出土形象埴輪(2)
		写真9	三笠山8号墳出土形象埴輪(3)
		写真10	三笠山8号墳出土形象埴輪(4)
		写真11	三笠山8号墳出土形象埴輪(5)
		写真12	三笠山9号墳出土円筒・朝顔形埴輪(1)
		写真13	三笠山9号墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)
		写真14	三笠山9号墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)
		写真15	三笠山9号墳出土形象埴輪(1)
		写真16	三笠山9号墳出土形象埴輪(2)
		写真17	三笠山9号墳出土形象埴輪(3)
		写真18	三笠山9号墳出土形象埴輪(4)
		写真19	三笠山9号墳出土形象埴輪(5)
		写真20	三笠山9号墳出土形象埴輪(6)
		写真21	三笠山9号墳出土土器
			三笠山14号墳出土円筒埴輪
		写真22	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(1)
		写真23	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)
		写真24	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)
		写真25	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(4)
		写真26	森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(5)
			森西1号墳出土形象埴輪(1)
		写真27	森西1号墳出土形象埴輪(2)
			森西1号墳出土金輪
			森西2号墳出土土器

## I 調査に至る経過

昭和63年本市市長織茂良平から、市内小島地区において「小島西土地区画整理事業」の計画があり、これに関する埋蔵文化財の所在及び取扱いについての協議の申し入れが本市教育委員会に出された。本市市長から協議のあった「小島西土地区画整理事業計画」は、本市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が所在する場合、相当程度の影響が及ぶことが予測された。本市教育委員会事務局では、これを受けて、埼玉県教育委員会発行の「本市遺跡分布地図」をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。その結果、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群(53-171)の所在することが判明した。

本市教育委員会では、このような状況を踏まえ、ただちに旭・小島古墳群の保存について本市と協議を開始した。その結果、本市教育委員会教育長と本市市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、

1) 事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在墳丘を有する古墳のみならず事業区全域協議対象とすること、2) 本市指定文化財131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)、136号古墳(蜷影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3) 前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構についてを発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4) 調査の結果重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、

1) 本市教育委員会教育長と本市市長が締結した「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」とおり実施すること、2) ただし、市指定文化財135号古墳(前の山古墳)の石室については調査終了後、136号古墳(蜷影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の存在する公有地に復元保存し、活用を図ること、3) 調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議をおこなうことの指導があった。

現地での発掘調査は平成元年4月から開始し、平成19年度現在もなお断続的に実施している。調査原因は、道路・下水道建設、調整池整備、個人住宅その他建造物の建設、曳家、宅地、駐車場その他の造成工事等開発行為に伴うものが主であるが、131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)等公有地化の図られた区域は、公園としての土地利用が計画されており、これらについては保存整備を目的とした範囲確認調査も実施している。整理調査は発掘調査と平行しつつ平成元年度から断続的に行っている。

なお、各地点の発掘調査ならびに整理調査期間、調査担当者、調査原因・目的、調査面積等の情報は各節の冒頭に記したとおりである。

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境

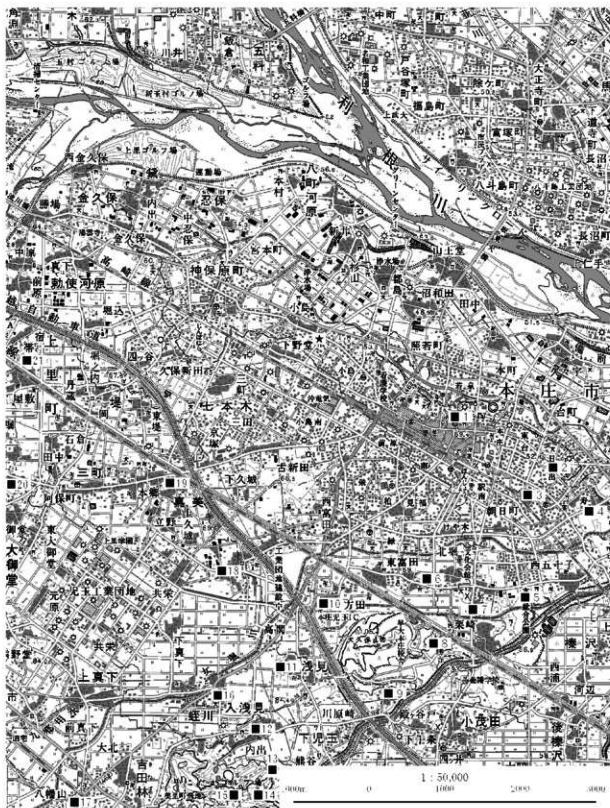
本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地、さらにその南方に連なる山地とに大別される。低地には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。台地は身馴川（小山川）扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川（小山川）扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった見玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は見玉郡上里町大字金久保から本庄市鷲森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。また、山地は上武山地の北縁にあたり、奥秩父山地に比べ浸食が進み、谷が広く、起伏の少ない地形を特徴としている。本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市小島から上里町神保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁部は東流する元小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達している。

### 2 歴史的環境

本庄市が所在する見玉地域は、上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代においては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、本庄市ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など、当該期における流通や生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期の電導入に見るような先進性や格子タタキ調整技法による土器・埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。本節ではこれらの成果をふまえつつ、見玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

本庄市鷲山古墳は、現在、見玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手焙形土器の出土から、築造は前方後円墳集成畿内編年(広瀬1992、以下単に集成〇期と略す)2期以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、鷲山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土椀と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、古墳時代前期後半を降らないと考えられる。



- ★旭・小島古墳群 1. 北原古墳群 2. 御堂坂古墳群 3. 塚合古墳群 4. 鶴森古墳群 5. 西五十子古墳群  
 6. 公卿塚古墳群 7. 有勝寺薬埴輪窯跡 8. 前山1・2号墳 9. 塚本山古墳群 10. 四方田古墳群  
 11. 鷺山古墳 12. 金鑽神社古墳 13. 生野山古墳群 14. 生野山9号墳 15. 生野山将軍塚古墳  
 16. 鉦川埴輪窯跡 17. 八幡山埴輪窯跡 18. 今井古墳群 19. 本郷古墳群 20. 大御堂古墳群 21. 帯刀古墳群

図1 周辺の遺跡



また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本庄市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることが確認された(南毛古墳文化研究会2001・松本2002)。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器埴が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30~40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60~70m程度の方後円墳となる可能性も考えられている。

集成6期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山將軍塚古墳(径60m)、同金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。兎玉地方で古墳がもっとも大型化するはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと共伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の本庄市長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道灌山古墳(径40m)、同勝丸稲荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される。

これに対し、集成7・8期には前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30~40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三笠山2号墳(径22m)、上前原5号墳(径26m)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10~20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。なお、神川町青柳古墳群では、集成9期前半に、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出てくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳

群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、集成9期以降になると首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では本庄市長沖古墳群の長沖25号墳（40m）、同31号墳（51m）、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳（60m）、同生野山古墳群の生野山鏡子塚古墳（58m）、生野山16号墳（58m）、小山川中流の深谷市四十塚古墳群の寅稲荷古墳（52m）、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳（規模未詳）、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳（規模未詳）、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳（46m）、中新里諏訪山古墳（42m）などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳（辺37m）のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳（径38m）のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生出塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している。

本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型的特徴などは不明である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、また、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市教育委員会では、この際に出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

本庄市有勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は駝形埴輪4点、髯形埴輪1点をはじめ、家、大刀、柄、馬、人物など多量の形象埴輪を出土している。円筒埴輪は外面二次調整を欠き、板押圧による基部調整を施す個体がみられること、各種器財埴輪が出揃っていることから、操業時期は6世紀後半段階以降のものと推定される。

なお、実態は全く不明ながら、美里町から深谷市にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある（橋本・佐々木ほか1980）。

### 3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市小島地区から上里町神保原地区にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概述する。

旭・小島古墳群の形成は西群に群在する方墳の築造をもって開始されると考えられる。方墳は現在まで20基余りが検出されている。万年寺つつじ山古墳(辺25m)は、高さ1.7mの墳丘が残り、確認調査時に、表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。直刃鎌、短冊形鉄斧を含むことから集成4期後半に該当すると考えられる(南毛古墳文化研究会2001、太田・松本2005)。

下野堂10号墓(辺24m)では、周堀の立ち上り部から石剣が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、形式的には古墳副葬品のうちに見られる石剣と同形の資料である(並木1976)。

林10号墳、同20号墳は、1辺30mを超える方墳で、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をはるかに凌ぐ規模を有する。また、林13号墳(辺10m)では、木棺直葬と推定される埋葬施設が検出されている。

これらの方形墓は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった。しかし、最近の調査の結果、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、一辺25m方墳である事実が確認されたこと、万年寺つつじ山古墳・下野堂10号墓などに見るように低墳丘方形墓の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに古墳時代前・中期の小型方墳群が各地に確認できることなどから、旭・小島古墳群の方形墓についても、古墳とすることが適当である。

万年寺八幡山古墳(径43m)は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えらる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても遺物を検出できていないため築造時期の詳細は不明であるが、前期に遡る可能性も考えられる(南毛古墳文化研究会2001)。南東側に隣接する万年寺つつじ山古墳とは双方の周堀が重複する関係にあるが、覆土の切り合い関係は確認できていない。

集成6期に属する古墳は明らかではない。当該期の兎玉地域の首長墓は、本庄市公卿塚古墳(径65m)、同金嶺神社古墳(径68m)、同生野山將軍塚古墳(径60m)、同長沖157号墳(径32m)、美里町志渡川古墳(径40m)などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群には中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

集成7期には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三ヶ山2号墳(径43m)では、2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉式後半期の土師器内斜口縁環が共伴する。また、上原5号墳(径26m)でも2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、この時期には東群におい

でも確実に古墳の造営が始まっている。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器杯は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は集成7期に遡る。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造される推測される事例が含まれる。

集成8期においても群集墳の造営は継続し、三笠山8号墳（規模不詳）では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した眉庇付冑の表現があり注目される。この集成8期前後には、三笠山7号墳（29m）などの帆立貝式古墳を中核とし、その周囲に低平な墳丘をもち、竪穴系埋葬施設を備える小規模な円墳が数多く築造されるようになり、前段階からの連続的な群集墳造営を認めることができる。

集成10期には東群に大型円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳（径42m）はそれらの中で最大の規模を有し、角閃石安山岩を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具、などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳（径36m）、山の神古墳（径40m±）、蛭影山古墳（径25m）、前の山古墳（径30m±）なども、埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期はいずれも集成10期段階に降ると考えられる。

坊主山古墳（規模不詳）では直刀、刀装具、鉄鏃、玉類、前の山古墳では耳環、ガラス玉が出土し、また、山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳では段築、葦石の存在が確認されている。いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳（径30m）があり、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほかに銅鏡1点が出土している。

下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中唯一の前前後円墳である。墳丘はすでに削平を受け、段築・葦石・埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真・地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料が得られていないが、埴輪が確認されないことから集成10期後半の築造が考えられている。

終末期には、下野堂開拓1号墳（径22m）、下野堂御手長山古墳（径20m）、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳（径22m）では石室攪乱層からは鉄製の鈎貝、刀子、釘が出土し、石室前庭部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半代までの土器が相伴しており長期間の追葬が想定される。終末期の有力古墳には方墳を採用する地域もあるが、群内での所在は現状において確認できない。

なお、三笠山古墳は直径64m、高さ3.2m、周堀幅26mを群内最大大型円墳であったが、全面的な発掘調査にもかかわらず埋葬施設の所在を確認できていない。調査前の墳丘高は3m強で、墳丘径と比較してきわめて低平であったことを考えると、本来の墳丘が、後代に埋葬施設とともに削平を受けたことも想定される。しかし、墳丘、周堀からの出土遺物は皆無であり、埋葬行為自体が実行されなかった可能性も否定できない。調査では、墳丘構築土中に火山噴出物と思われる灰層の堆積を検出している。

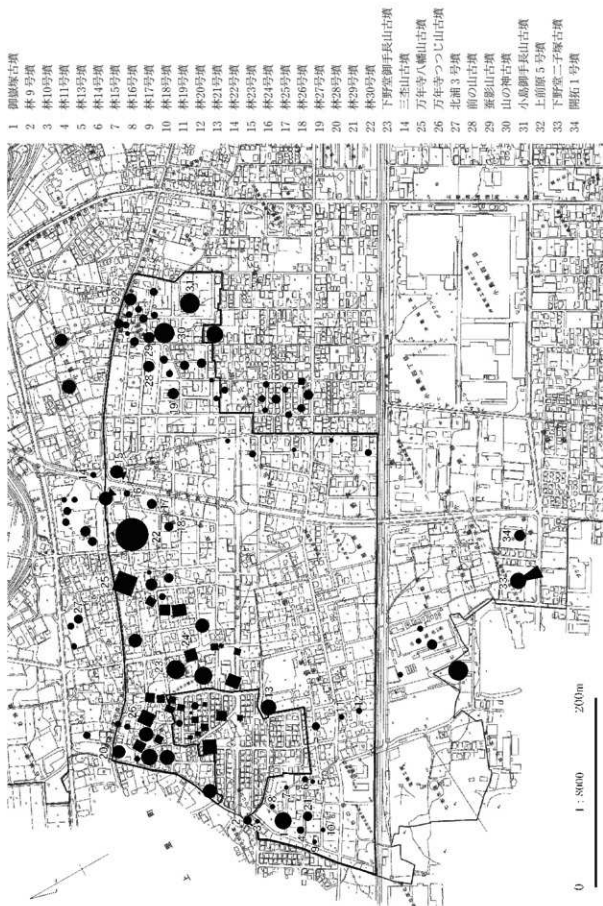


図2 旭・小島古墳分布図



### III 調査の成果

#### 1 杉ノ根1号墳

##### [A地点]

**調査期間** 平成2年10月1日～平成2年10月22日  
**調査面積** 397.5㎡  
**調査原因** 個人住宅建設  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司  
**備考** 同一調査区内で下野堂御手長山古墳の周堀を検出 [下野堂御手長山古墳A地点]

##### [B地点]

**調査期間** 平成4年5月13日～平成4年5月29日  
**調査面積** 220㎡  
**調査原因** 個人住宅建設  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司  
**備考** 同一調査区内で下野堂御手長山古墳の周堀 [下野堂御手長山古墳C地点] および杉ノ根4号墳の周堀 [杉ノ根4号墳A地点] を検出

##### [C地点]

**調査期間** 平成10年8月17日～平成10年9月10日  
**調査面積** 360㎡  
**調査原因** 個人住宅建設  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

##### [D地点]

**調査期間** 平成10年9月1日～平成10年9月30日  
**調査面積** 300㎡  
**調査原因** 区画整理に伴う市道建設  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕  
**備考** 同一調査区内で杉ノ根8号墳の周堀を検出 [杉ノ根8号墳A地点]

##### [E地点]

**調査期間** 平成11年9月1日～平成11年9月30日  
**調査面積** 250㎡  
**調査原因** 区画整理に伴う市道建設  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

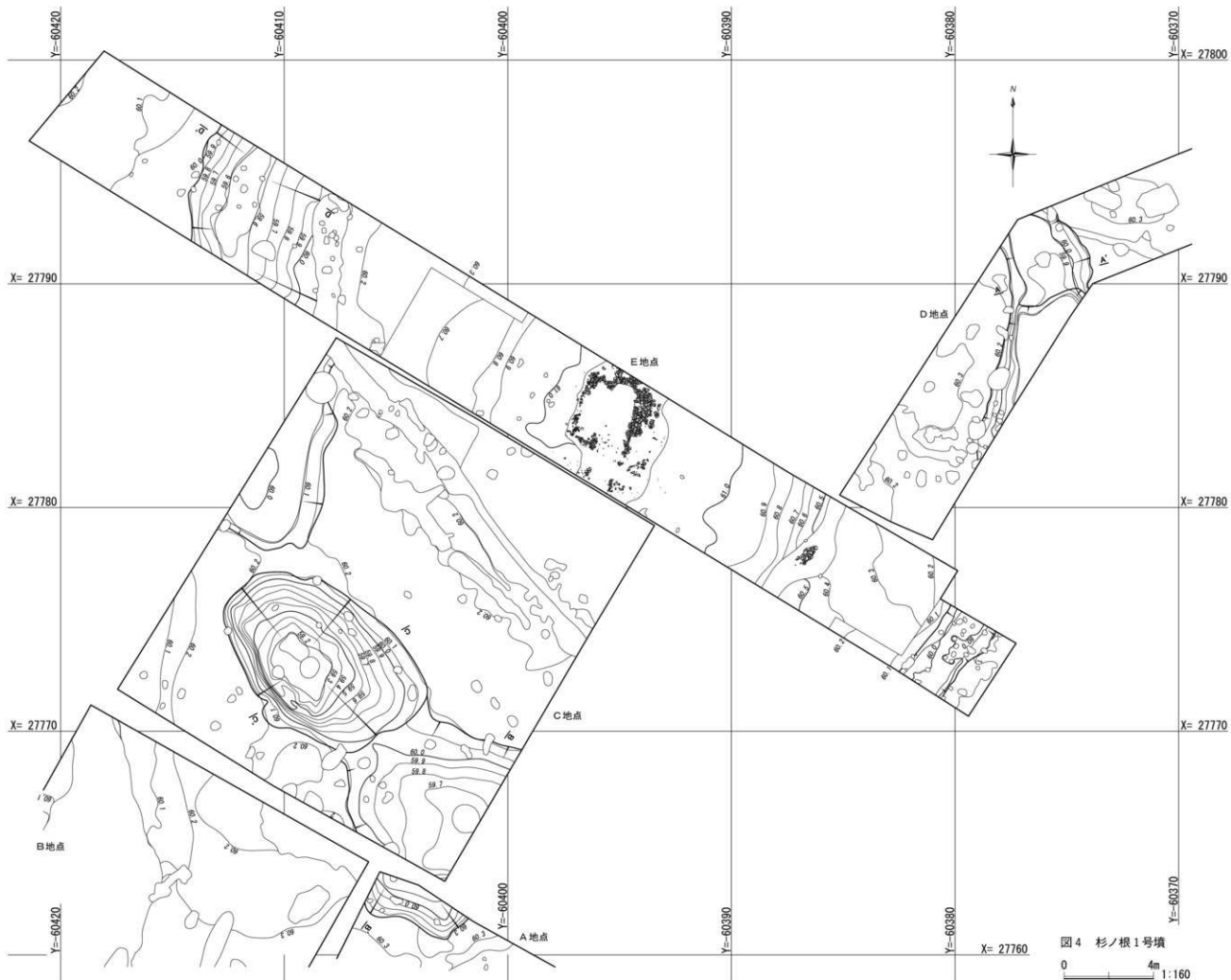


图4 杉ノ根1号墳

0 4m 1:160



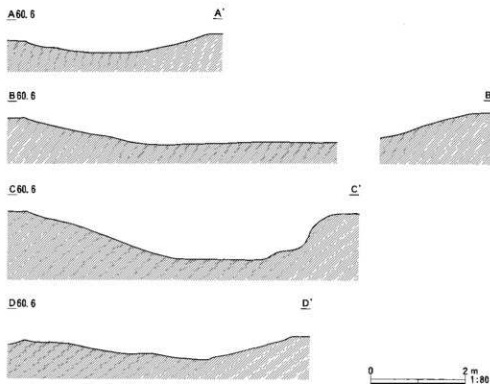


図5 杉ノ根1号墳断面図

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心を $X=27,785$ 、 $Y=-60,395$ 付近におく。周囲には北東側に杉ノ根8号墳、南側に下野堂御手長山古墳、南西側に杉ノ根4号墳が存在する。直径30m前後を測る大型の円墳で、平面設計は整円をなさず、北東から南西方向にやや長い楕円形を呈する。墳丘盛土は旧表土とともに失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態である。埋葬施設の形式も不明であるが、墳丘中心部に礫の拡散がわずかに認められる箇所があり、この部分に横穴式石室が構築されていた可能性が高い。

周堀は南側から西側にかけて堀幅が広く、逆に東側は狭くなっている。南側には外側へ極度に広がる箇所があり、南西側には周堀の途切れる部分が1箇所見られる。周堀底面にも起伏が多く、とくに南西側の一角には確認面からの深さ1.0mを測る土壇状の掘り込みが存在する。この部分では、掘削がローム層下の白色粘質土層にまで及び、一部は白色粘質土層下の礫層に達している。

### (2) 遺物

遺物は周堀覆土から少量の土師器片を検出している。埴輪は出土していない。

### (3) 小結

杉ノ根1号墳は、埋葬施設に横穴式石室を備える可能性が高く、埴輪をもたないことから、築造年代は隣接する下野堂御手長山古墳に近く、終末期まで下ると推測される。

## 2 杉ノ根2号墳

[A地点]

調査期間 平成3年5月21日～平成3年5月30日

調査面積 260㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

備考 同一調査区内で杉ノ根3号墳の周堀を検出 [杉ノ根3号墳A地点]

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,855、Y=-60,360付近におく。周囲には南西側に近接して杉ノ根3号墳が存在する。直径18m前後を測る円墳と推測されるが、平面設計の詳細は不明である。北東から南西方向にやや長い楕円形を呈する。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆している。埋葬施設の痕跡は全く認められない。

周堀は南側に確認面からの深さ1.0m以上の土壌状の掘り込みが存在する。この部分では、掘削がローム層下の白色粘質土層にまで及び、一部は白色粘質土層下の礫層に達している。南西側には周堀の途切れる部分が見られる。また、南東側にも周堀の大きく途切れる箇所が存在する。周堀覆土は上層にAs-Bを含む黒灰褐色土または暗灰褐色土、下層にロームブロックを含む灰褐色土または褐色土が堆積し、また周堀の掘り込み面に接してロームブロックを多量に含む褐色土やロームブロックを主体とする黄褐色土が見られる。Hr-FAの堆積は確認できない。

### (2) 遺物

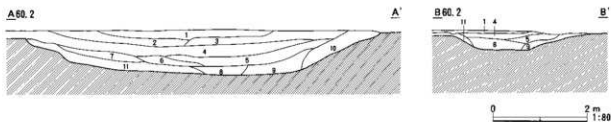
遺物は周堀覆土から土師器坏5点を検出している。埴輪は出土していない。

#### a. 土器

土師器 (図8、写真3)

坏 [1～5]

1は体部と口縁部の境界に稜をもち、口縁部は外湾気味に立ち上がる。調整は体部外面がヘラケズリ、口縁部内外面には横位のナデを施している。色調はにぶい橙色を呈する。2～5は底部が丸底で、



杉ノ根2号墳A地点土層説明 [A-A'・B-B']

- 1 暗灰褐色土 As-B、ロームブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 As-Bを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 As-Bを多量に含む。
- 4 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。

- 6 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

図6 杉ノ根2号墳土層断面図

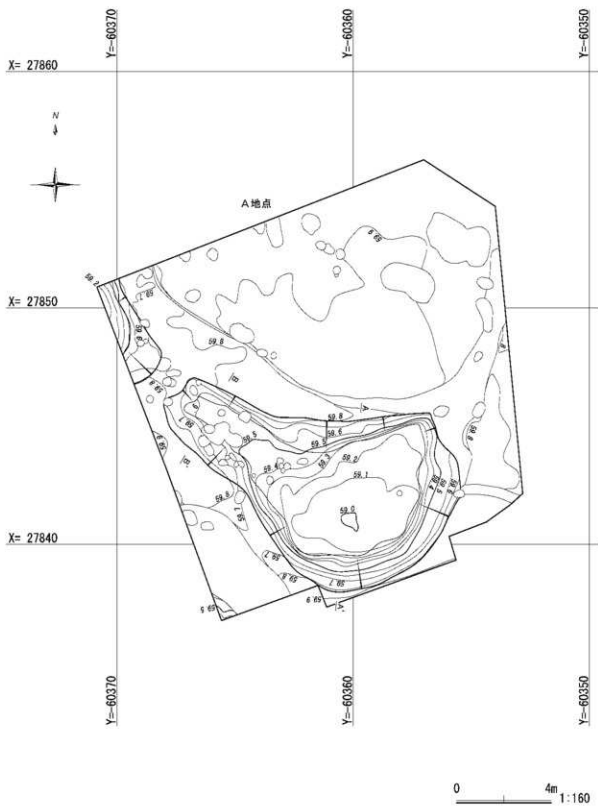


图7 杉ノ根2号墳

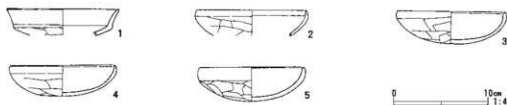


図8 杉ノ根2号墳出土土器実測図

杉ノ根2号墳出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 (11.8) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に稜を持ち、外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	微砂粒・黒色粒 内一橙色 外一にぶい橙色	口縁～体部片。
2	土師器 環	口径 (11.4) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内湾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一橙色	1/4。
3	土師器 環	口径 11.2 底径 — 器高 3.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一橙色	2/3。 外面体部～底部を黒色処理。
4	土師器 環	口径 11.0 底径 — 器高 3.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一橙色	4/5。
5	土師器 環	口径 10.9 底径 — 器高 3.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一橙色	ほぼ完形。

体部は湾曲し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。調整は体部外面がヘラケズリ、口縁部内外面には横位のナデを施している。胎土に雲母を含み、色調はにぶい橙色を呈する。

### (3) 小 結

遺存状態の良い土師器環4・5から、杉ノ根2号墳の築造年代は、古墳時代終末期段階まで下るものと推測される。

## 3 杉ノ根3号墳

[A地点]

調査期間 平成3年5月21日～平成3年5月30日

調査面積 260㎡

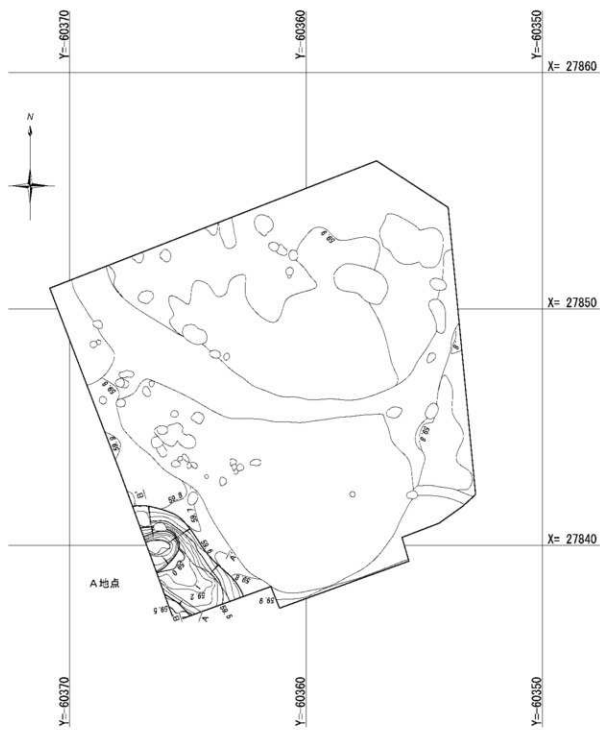
調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

備考 同一調査区内で杉ノ根2号墳の周堀を検出 [杉ノ根2号墳A地点]

### (1) 遺 構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,830、Y=-60,370付近におくものと推測される。北東側に近接して杉ノ根2号墳が所在する。北東側の周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘部分は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。周堀覆土は中央部分の黒灰褐色土または暗灰褐色土、周堀の掘り込み面に接してロームブロックを多



0 4m 1:160

图9 杉ノ根 3号墳

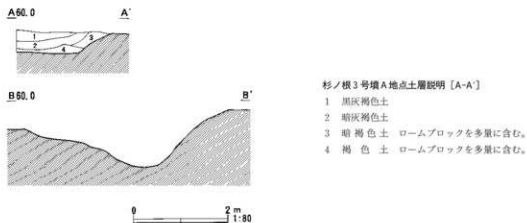


図10 杉ノ根3号墳土層断面図

量に含む暗褐色土または褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

#### (2) 遺物

遺物は出土していない。

#### (3) 小 結

杉ノ根3号墳は土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造年代を特定できないが、周堀形態がやや不安定であることから、古墳時代後期後半以降に下る可能性が考えられる。

## 4 杉ノ根4号墳

[A地点]

調査期間 平成4年5月13日～平成4年5月29日

調査面積 220㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備 考 同一調査区内で杉ノ根1号墳の周堀 [杉ノ根1号墳B地点] および  
下野堂御手長山古墳の周堀 [下野堂御手長山古墳C地点] を検出

#### (1) 遺 構

本庄市下野堂地内において、中心をX=27,765、Y=-60,435付近におくものと推測される。北東側に杉ノ根1号墳、南東側に下野堂御手長山古墳が所在する。

東側から南東側の周堀の一部を検出した。直径15～20m程度の円埴と推測される。埴丘部分は調査時点で畑地となっておりすでに削平されているものと思われる。



図11 杉ノ根4号墳断面図

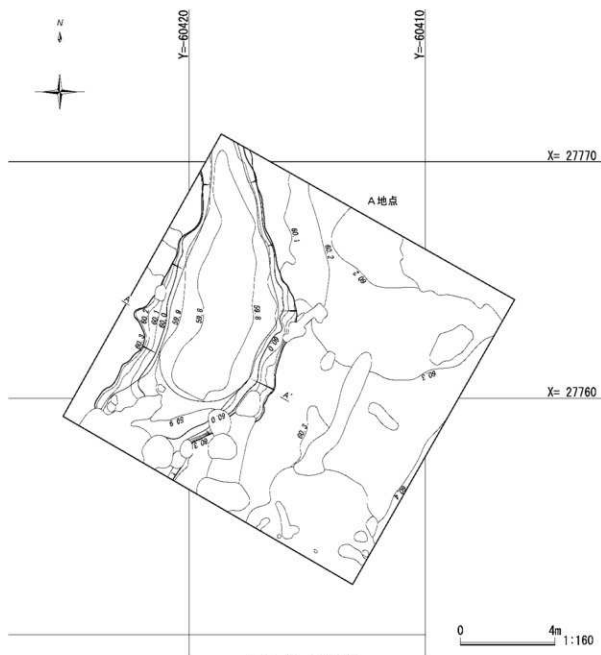


図12 杉ノ根 4号墳

周堀は幅が一定せず、確認の範囲で最大約 6 m を測る。堀底までの深さも地点により異なり、最深箇所を確認面から 50cm を測る。周堀覆土にはロームブロックと白色粘質土ブロックを少量に含む暗灰褐色土が堆積している。As-B・Hr-FA の堆積はともに確認できない。

(2) 遺物

遺物は出土していない。

(3) 小 結

杉ノ根 4 号墳は土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造時期を特定できないが、堀底が浅く、幅の一定しない周堀形態から、集成 8 期以前には遡らないと考えられる。古墳時代後期後半以降の築造と推測される。

## 5 杉ノ根5号墳

### [A地点]

調査期間 平成4年9月22日～平成4年9月28日

調査面積 110m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で杉ノ根6号墳の周堀を検出 [杉ノ根6号墳A地点]

### [B地点]

調査期間 平成4年9月22日～平成4年9月28日

調査面積 110m<sup>2</sup>

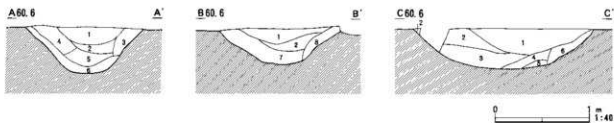
調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,695、Y=-60,352付近におく。北東側に近接して杉ノ根6号墳が所在する。直径10m前後を測る円墳で、墳丘平面設計は整円をなさず、南東から北西方向にやや長い楕円形を呈する。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の形式も不明である。

周堀は北東および南西側で幅を広げる箇所があり、南西側には周堀の途切れる部分が見られる。周堀底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cm前後を測る。北東側の堀幅が広がる箇所は、土坑状の落ち込みが見られる。周堀覆土にはロームブロックや暗褐色土ブロックを含む灰褐色土ないし褐色系の土層が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。



#### 杉ノ根5号墳A地点土層説明 [A-A']

- 1 黒褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

#### 杉ノ根5号墳B地点土層説明 [B-B'・C-C']

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒灰褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 4 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 黄褐色土 ロームを主体とする。

図13 杉ノ根5号墳土層断面図



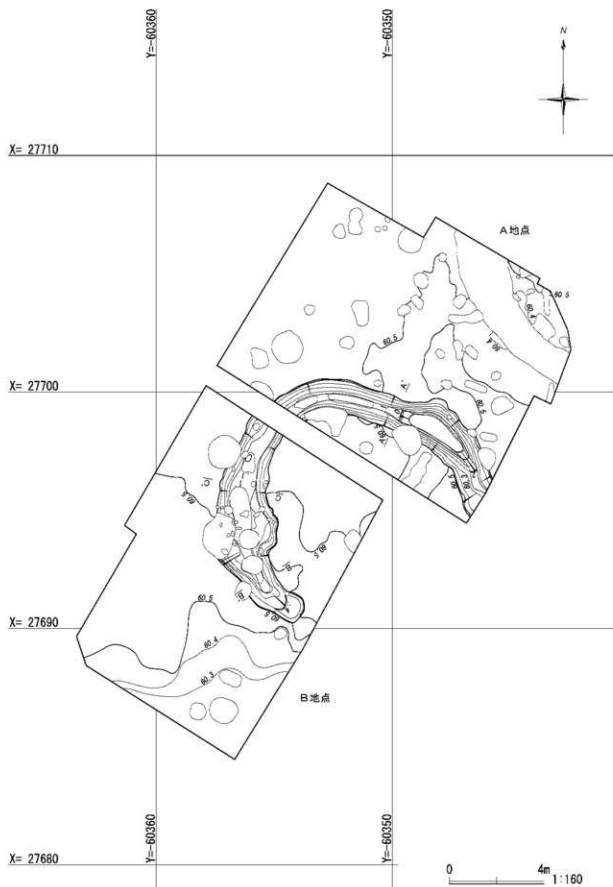


图14 杉ノ根5号墳

## (2) 遺物

遺物は周堀覆土から土師器環1点を検出している。埴輪は出土していない。

### a. 土器

土師器(図15、写真3)

#### 環[1]

丸底で、半球形体部をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。調整は底部から体部にかけての外面にヘラケズリののちヘラナデ、口縁部内外面には横位のナデを施している。胎土に雲母を含み、色調は明赤褐色を呈する。



図15 杉ノ根5号墳出土土器実測図

#### 杉ノ根5号墳出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形製・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器環	口径 14.1 底径 — 器高 6.0	体部から口縁部は内湾して立ち上がる。底部は丸底。	外面→口縁部ココナデ、体部→底部ヘラケズリ後に体部ヘラナデ。 内面→口縁部ココナデ、体部→底部ヘラナデ。	雲母・白色粒 内外明赤褐色	完形。

## (3) 小 結

土師器環は、口縁部には横位のナデを施す椀状の坏で、和泉Ⅱ式から鬼冨Ⅰ式にかけての時期に該当すると考えられ、杉ノ根5号墳の築造時期は、集成7期または8期と推定される。

## 6 杉ノ根6号墳

[A地点]

調査期間 平成4年9月22日～平成4年9月28日

調査面積 110㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

備考 同一調査区内で杉ノ根5号墳の周堀を検出 [杉ノ根5号墳A地点]

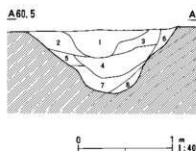


図16 杉ノ根6号墳土層断面図

#### 杉ノ根6号墳A地点土層説明 [A-A']

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 ロームを主体とする。
- 8 黄褐色土 ロームを主体とする。



### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,708、Y=-60,340付近におくものと推測される。南西側に近接して杉ノ根5号墳が所在する。南西側の周堀と墳丘の一部を検出した。平面設計墳丘は整円形をなしている。直径10~12mほどの円墳と考えられる。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態である。調査区外の墳丘部分も、調査時点で畑地や道路となっておりすでに削平されているものと思われる。

周堀は確認面で幅1.6~1.8m、深さ70cm前後を測る。堀底はほぼ平坦で、安定している。周堀覆土には上層に黒灰褐色土または暗灰褐色土、下層にロームブロックを多量に含む褐色土やロームブロックを主体とする黄褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

### (2) 遺物

遺物は出土していない。

### (3) 小 結

杉ノ根6号墳は安定した掘り方をもつ周堀がめぐっている。土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造時期は特定できないが、周堀の形態から杉ノ根5号墳・同7号墳の築造時期に近い年代が推測される。

## 7 杉ノ根7号墳

### 〔A地点〕

調査期間 平成9年3月3日~平成9年3月17日

調査面積 275m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,748、Y=-60,337付近におくものと推測される。南西側の周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘部分は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。周堀覆土は黒灰褐色土ないし暗褐色土が堆積している。

### (2) 遺物

#### a. 土器

土師器 (図20、写真3)

環 [1・2]

1は丸底の底部と湾曲する体部をもち、口縁部は内屈して立ち上がる。体部と口縁部の境界の稜が貧弱で、わずかに突出し、口唇部は丸く仕上げられている。2も丸底の底部と湾曲する体部をもち、口縁部は直立して立ち上がる。体部と口縁部の境界は1よりさらに不明瞭で、わずかな稜が観察される。口唇部は1と同じく丸く仕上げられている。調整は体部外面がヘラケズリ、体部内面がナデマ

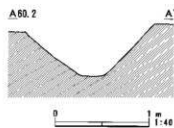


図18 杉ノ根7号墳断面図

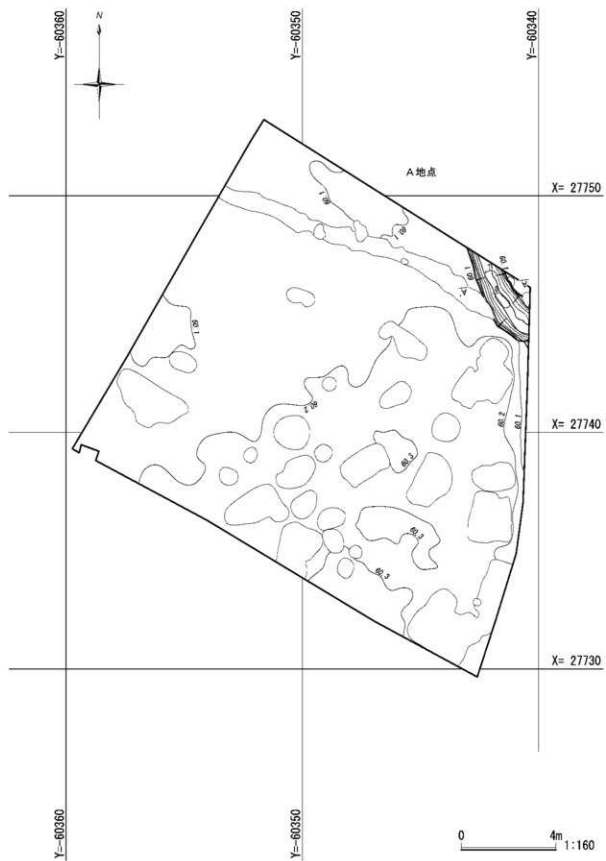


图19 杉ノ根7号墳

はヘラナデで、口縁部内外面には横位のナデを施している。胎土に石英を含み、色調は1の外表面がにぶい橙色、1の内面および2が橙色を呈する。

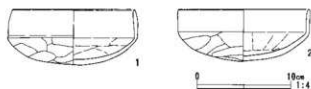


図20 杉ノ根7号墳出土土器実測図

#### 杉ノ根7号墳出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 12.9 底径 — 器高 5.8	口縁部は体部との境に稜を持ち、内湾して立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内—橙色 外—にぶい橙色	ほぼ完成。
2	土師器 環	口径 (13.8) 底径 — 器高 5.5	口縁部は体部との境に強い稜を持ち、直立気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	3/4。

#### b. 埴輪

##### 朝顔形埴輪 [1] (図21、写真3)

胴部最上段以上が残る。胴部は寸胴を呈するが、最上段の一部を残すのみで段構成・突帯間の幅・透孔の形状等は不明である。肩部には緩やかな張りをもち、頸部が太く、口縁部は外反して直線的に立ち上がったのち、中で内側に角度を変え、口唇部付近で強く外湾し、口唇端面はやや下方を向く。頸部、口縁屈曲部に突帯をめぐらす。調整は胴部外面に二次調整として横位のハケを観察するほか、胴部内面が斜位のハケ、肩部から口縁部下段の外面が縦位のハケ、口縁部上段外面が横位または斜位のハケ、肩部内面が斜位のナデ、口縁部内面が斜位のハケまたはナデとなっており、口唇部周辺は内外面とも横位のナデが加えられている。胎土にチャート・片岩を含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

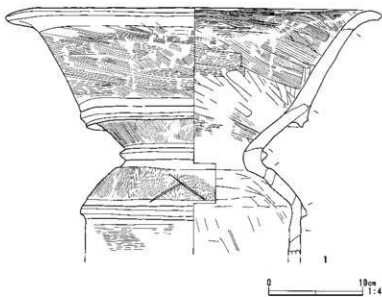


図21 杉ノ根7号墳出土朝顔形埴輪実測図

#### (3) 小 結

土師器環2点は、坏蓋模倣坏であるが、体部と口縁部の境界の稜が貧弱で、鬼高I式の典型的な坏蓋模倣坏成立以前の不定形坏蓋模倣坏が盛行する段階の資料である。朝顔形埴輪は胴部最上段に二次調整として横位のハケが認められ、川西IV式段階まで遡る。以上の資料から、杉ノ根7号墳の築造時期は、集成7期におくことができる。

## 8 杉ノ根 8号墳

[A地点]

調査期間 平成10年9月1日～平成10年9月30日

調査面積 300㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

備考 同一調査区内で杉ノ根1号墳の周廻を検出 [杉ノ根1号墳D地点]

[B地点]

調査期間 平成19年5月9日～平成19年5月15日

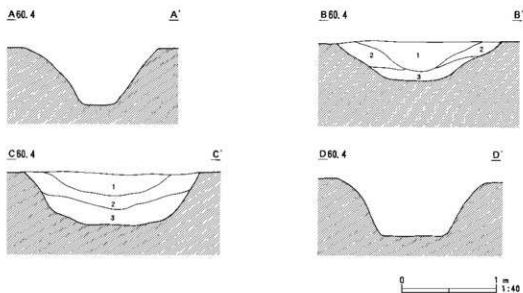
調査面積 174㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係 大橋季広

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,795、Y=-60,357付近におく。南西側に近接して杉ノ根1号墳が所在する。直径11.5mを測る円墳で、墳丘平面設計は整門をなさず、東側から南側にかけてやや歪んでいる。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の形式も不明である。

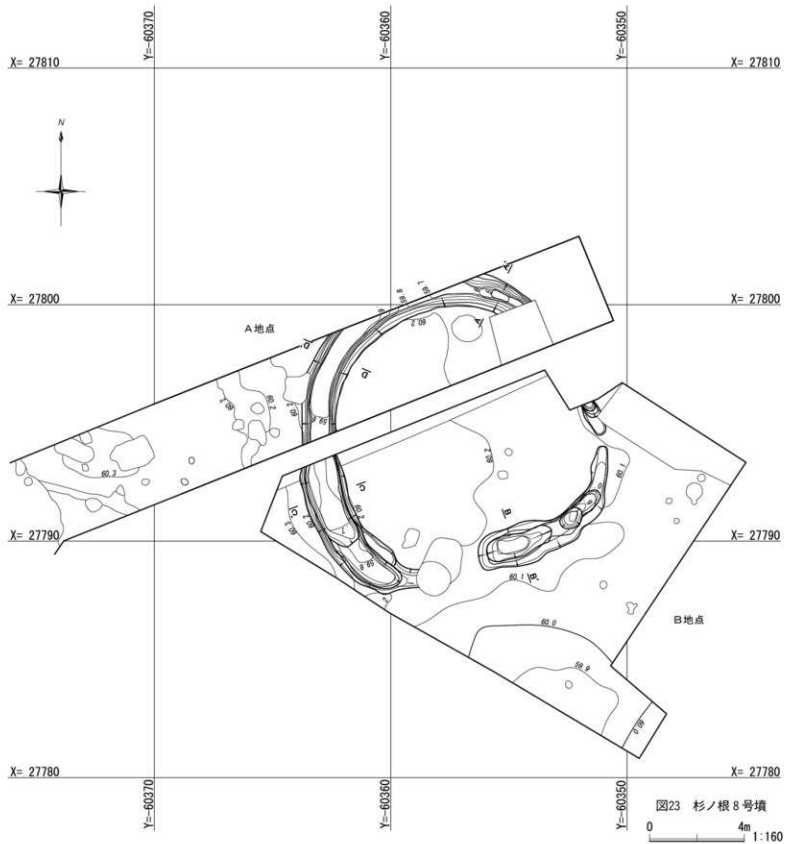


杉ノ根8号墳B地点土層説明 [B-B'・C-C']

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黄褐色ロームブロック(～0.5mm)を微量含む。しまりやや弱。粘性なし。
- 2 明褐色土 暗褐色土を主体とし、黄褐色風化ローム

- 3 明黄褐色土 ロック(～1cm)を少量点状に含む。しまりやや弱。粘性なし。
- 風化ローム土を主体とし、暗褐色土粒子(～0.5mm)を微量含む。

図22 杉ノ根8号墳土層断面図





周堀は東側および南側で途切れる部分があり、東側から南東側にかけて堀幅が狭くなっている。周堀底面は北半はほぼ平坦であるが、南半には段差や土坑状の落ち込みが各所に見られる。確認面からの深さは40～60cmを測る。周堀覆土には上層に暗褐色土、下層にロームブロックを多量に含む褐色土やロームブロックを主体とする黄褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

## (2) 遺物

遺物は出土していない。

## (3) 小 結

杉ノ根8号墳は一部で陸橋状に途切れる部分があるものの比較的安定した掘り方をもつ周堀がめぐっている。土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造時期は特定できないが、周堀の形態から杉ノ根5号墳・同7号墳の築造時期に近い年代が推測される。

## 9 杉ノ根9号墳

〔A地点〕

調査期間 平成4年5月1日～平成4年5月12日

調査面積 240㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

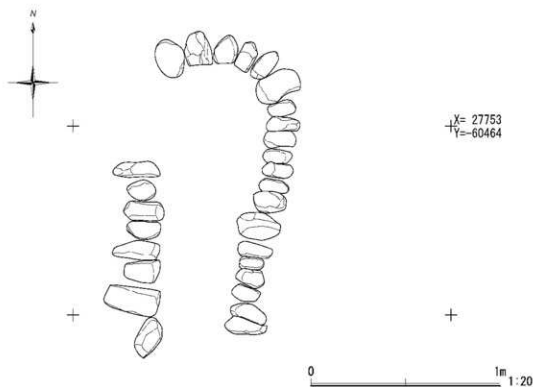


図24 杉ノ根9号墳

### (1) 遺構

破壊された横穴式石室の残滓と推定される列石状の構造物である。表土層直下のローム層上面を基盤としている。大振りの河原石を、小口を内側にして胴張形横穴式石室の根石状に一列に並べていることから、古墳時代の埋葬施設である可能性が考えられる。規模はいずれも内法で、奥行き約1.5m、羨門幅35cm、玄室最大幅55cmを測る。内部の床面に相当する部分には、敷石、裸敷等の工事はとくに認められなかった。

### (2) 遺物

遺物は出土していない。

### (3) 小結

杉ノ根9号墳はきわめて小規模な埋葬施設であるが、構造は横穴式石室であることから、墳丘をもたないような副次的な埋葬施設とは考えにくく、本来は小規模ながら墳丘を有していたことが推測される。

## 10 杉ノ根10号墳

[A地点]

調査期間 平成12年6月9日～平成12年6月16日

調査面積 96㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・松本完

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内にあって、北東側に下野堂御手長山古墳が存在する。周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘の位置は確定的ではないが、今のところ検出した周堀の南東側に所在したと推定される。墳丘が想定される部分は、調査時点で畑地や道路となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。

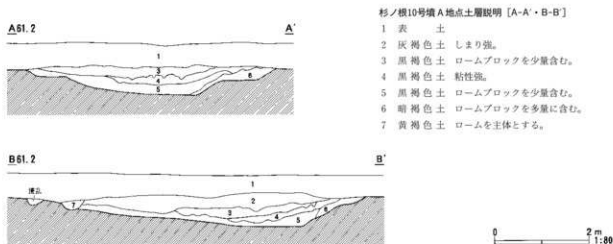


図25 杉ノ根10号墳土層断面図

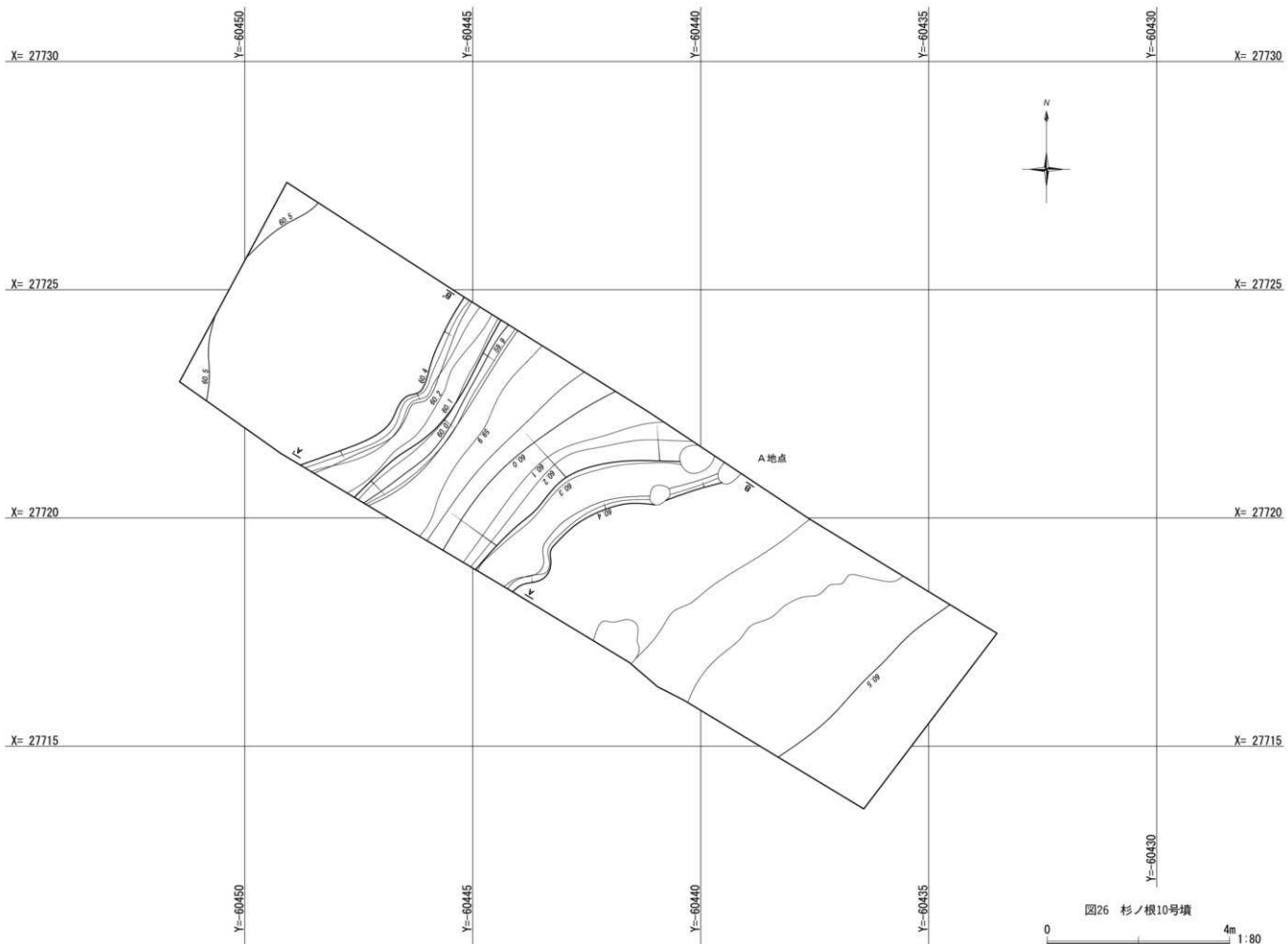


图26 杉ノ根10号墳



周堀は最深部が北西側にあり、堀底の平坦面を広く形成せず、南東側は最深部から上端に向かって緩やかに立ち上がっている。これに対し北西側の立ち上がりは、中間に段を形成したのち上端に至る。周堀覆土は表土直下にしまりのある灰褐色土が発達し、中間にロームブロックを含む黒褐色土または暗褐色土堆積している。また、周堀底面に接してロームブロックを主体とする黄褐色土が見られる。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

## (2) 遺物

遺物は出土していない。

## (3) 小 結

杉ノ根10号墳は土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造年代を特定できないが、堀幅の広さに比較して形態がやや不安定であることから、古墳時代後期後半以降に下る可能性が考えられる。

## 11 屋敷内1号墳

### 【A地点】

調査期間 平成2年12月19日～平成2年12月27日

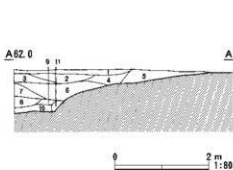
調査面積 165m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### (1) 遺構

本庄市下野堂地内に所在する。西側の周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘部分は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。周堀覆土は正常な層序を示さず、後世の掘削等により攪乱を受けている部分が含まれているらしい。周堀底付近には、ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。



### 屋敷内1号墳A地点土層説明【A-A'】

- 1 黒褐色土 粘性・しまりとも弱。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 白色パミスを含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 9 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
- 11 黄褐色土 ローム主体とする。

図27 屋敷内1号墳土層断面図

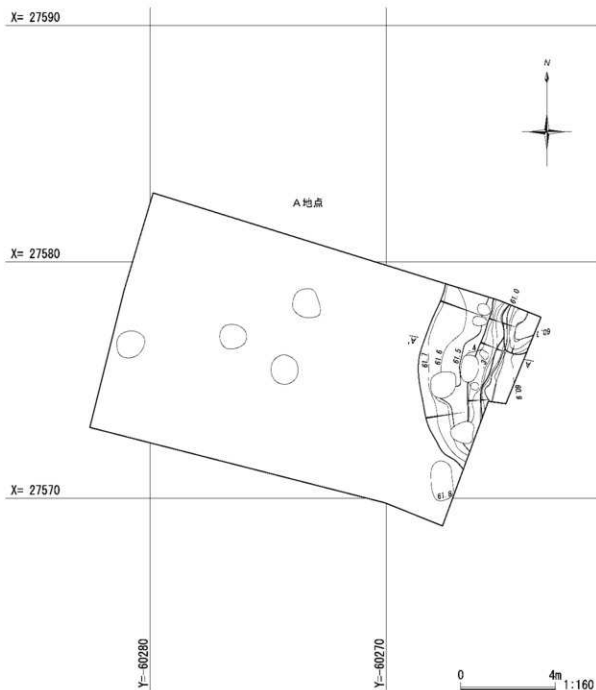


図28 屋敷内1号墳

(2) 遺物

遺物は出土していない。

(3) 小 結

屋敷内1号墳は同2号墳とともに杉ノ根地区の古墳群から南東方向にやや離れた位置に存在する。周辺の確認調査においても他に古墳は確認されていないことから、付近は古墳分布密度の低い一帯となっている。

## 12 屋敷内2号墳

[A地点]

調査期間 平成4年3月25日～平成4年3月31日

調査面積 330m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

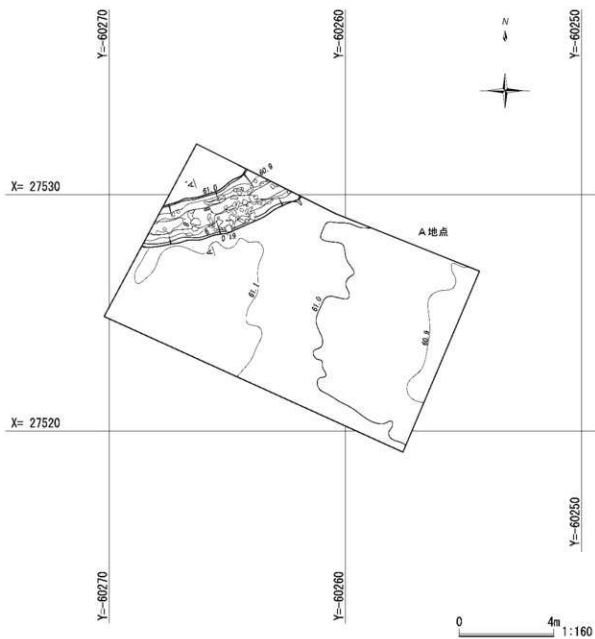
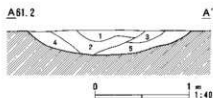


図29 屋敷内2号墳



屋敷内2号墳A地点土層説明 [A-A']

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒灰褐色土 ロームブロックを多量を含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量を含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量を含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを多量を含む。

図30 屋敷内2号墳土層断面図

### (1) 遺構

本市下野堂地内にあって、中心をX=27,540、Y=-60,270付近におくものと推測される。南東側の周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘部分は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。

周堀は確認で幅1.7m、深さは30cm前後を測る。堀底は明確な平坦面を形成せず、船底状に曲面をなしている。周堀覆土は中央にロームブロックを含む黒褐色土、黒灰褐色土、暗灰褐色土が堆積し、掘り方面に沿ってロームブロックを多量を含む暗褐色土と褐色土がみられる。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

### (2) 遺物

遺物は出土していない。

### (3) 小 結

屋敷内2号墳は安定した掘り方をもつ周堀がめぐっている。確認の範囲では、堀幅に比較してやや緩い円弧を描いているが、直径20mを超えるような規模をもつことは想定しにくい。土器・埴輪などの遺物が全く出土せず、築造時期は特定できない。

## 13 屋敷内3号墳

### [A地点]

調査期間 平成10年9月16日～平成10年10月17日

調査面積 500㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

### [B地点]

調査期間 平成13年4月26日～平成13年5月27日

調査面積 80㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・松本完

### (1) 遺構

本市下野堂地内にあって、昭和49年度に埼玉県遺跡調査会によって調査が実施された下野堂14号墓と同一の遺構である。下野堂遺跡の調査で検出された方墳群からは、やや南方に離れて所在している

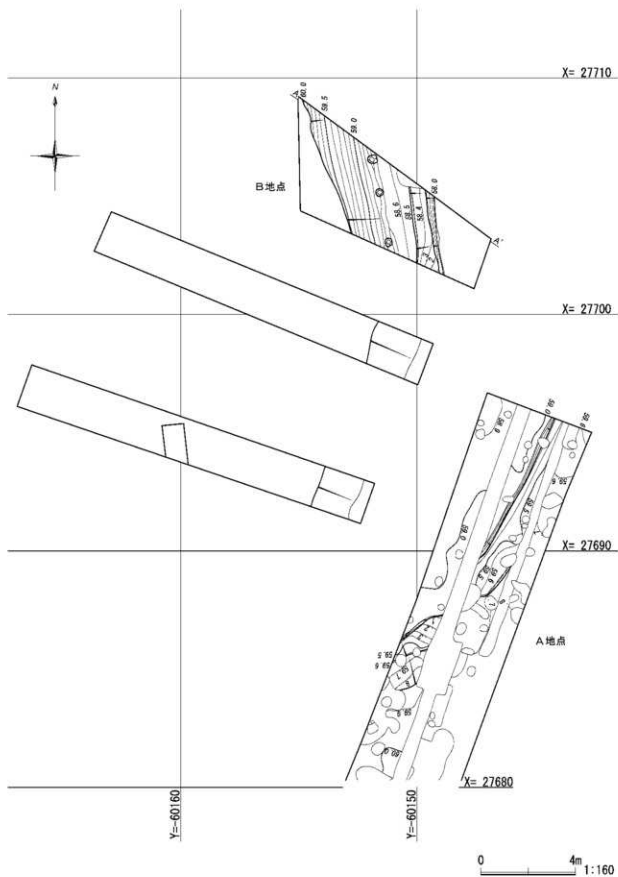


图31 屋敷内3号墳



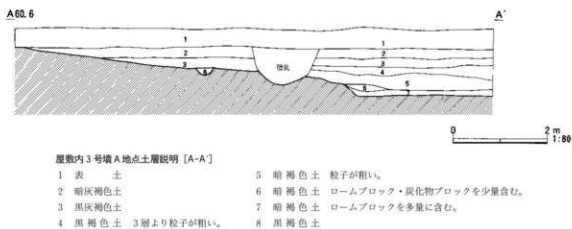


図32 屋敷内3号墳土層断面図

る。直径30m以上を測る円墳で、墳丘平面設計はほぼ整円をなす。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の形式も不明である。

周堀は掘り込みが深く、堀底も平坦で安定している。確認面からの深さは約100cmを測る。周堀外側の立ち上がりは、堀底から急激に立ち上がったのち、中位で角度を変換し、上半は傾斜を緩めて立ち上がっている。周堀内側の立ち上がりは、堀底から一旦立ち上がり、中間にローム層を削り出して形成した幅90～110cmの平坦面を挟んで墳丘が立ち上がっている。平坦面と墳丘の境界部分には、幅20センチ前後の狭い溝が彫り込まれ、さらに1.4～2.1mの間隔で径30～40cm、深さ25～44cmのピットが彫り込まれている。周堀覆土には上層に暗褐色土、下層にロームブロックを多量に含む褐色土やロームブロックを主体とする黄褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

## (2) 遺物

遺物は出土していない。

## (3) 小 結

平坦面と墳丘境界に存在する溝とピットは、覆土の観察から古墳と一連の遺構であることは確実である。ピットは25～45cmの深さがあり、柱状の器物が埋設されていた可能性が考えられる。土器・埴輪などの遺物が全く出土していないことから築造時期の特定は困難であるが、周堀形態が整円形をなし、掘り方も規格的であること、埋葬施設に横穴式石室を想定しにくいことから、古墳時代後期までは下らない可能性が高い。

## 14 三壺山 8 号墳

[A地点]

調査期間 平成4年9月25日～平成4年9月26日

調査面積 55㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本市市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本市市小島地内にあって、南側に三壺山9号墳、南西側に三壺山7号墳が存在する。周堀の一部をわずかに検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。南側には比較的近接して三壺山9号墳が存在することから、検出した周堀は墳丘の南側にあたると考えられる。墳丘が存在したと推定される範囲は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。

周堀は確認面で幅8m以上、深さ約120cmを測る。周堀覆土にはロームブロックを含む暗褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

### (2) 遺物

遺物は遺構確認面および周堀覆土上層から多量の埴輪片を検出している。原位置をとどめる個体は認められない。

#### a. 埴輪

円筒埴輪 [1～36] (図35～39、写真7～10)

円筒埴輪は全形の判明する資料が存在しないが、1のように中間の2段にわたって透孔を配する個体が存在することから3条突帯4段構成品が含まれることは確実である。また、13以下のように径の小さな個体もみられることから、2条突帯3段構成品も含まれる可能性が高い。

外面調整はいずれも縦位のハケおよびナデによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。底部調整を施す個体は確認できない。内面調整は縦位のハケないしナデによる。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。突帯は断面形が崩れた台形を呈するものと三角形を呈するものが相半ばする。透孔は円形と半円形があり、歪みを生じ不整形をなすものがみられる。3条突帯4段構成品の場合は第2・3段に、90°角度を違えて穿っている。刻線は最上段に「×」や「/」がみられる。胎土は砂粒を含み、焼成は総じて良好で、還元焼成の個体は認めない。色調は全体にぶい褐色を示す。



図33 三壺山 8 号墳土層断面図



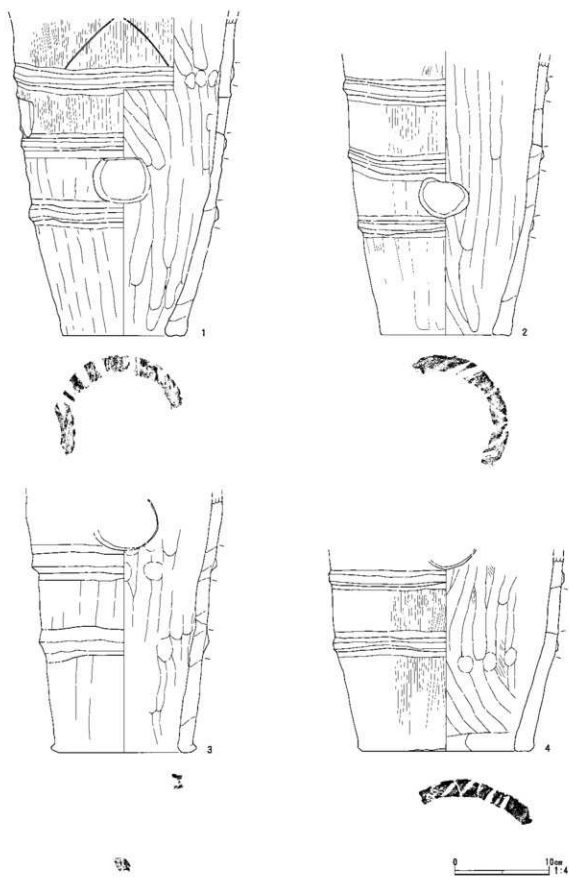


图35 三灶山8号出土陶筒·朝顔形埴輪实测图(1)

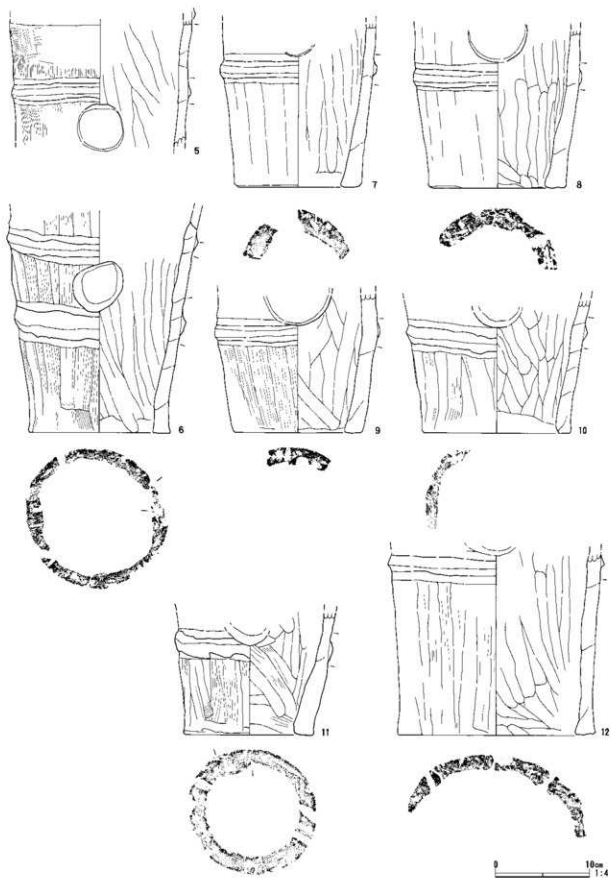


图36 三灶山8号填出土铜筒·朝顔形埴輪实测图(2)

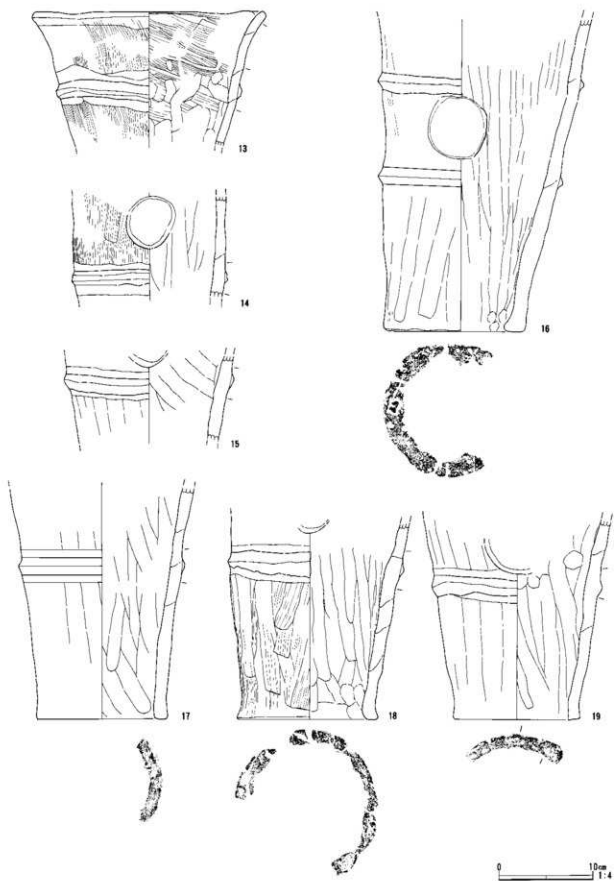


图37 三岔山8号出土陶筒·朝顔形埴輪実測图(3)

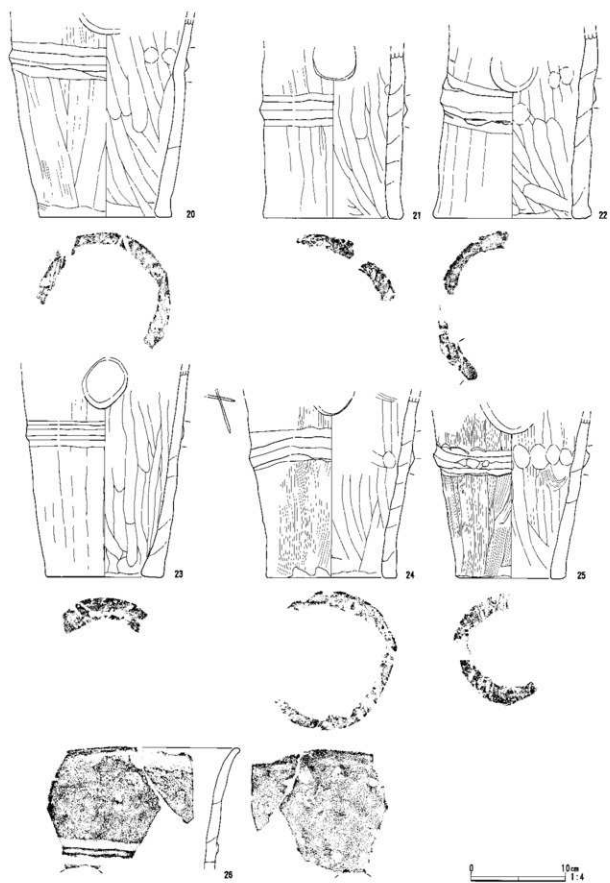


图38 三垄山8号出土陶筒·朝顔形埴輪実測图(4)

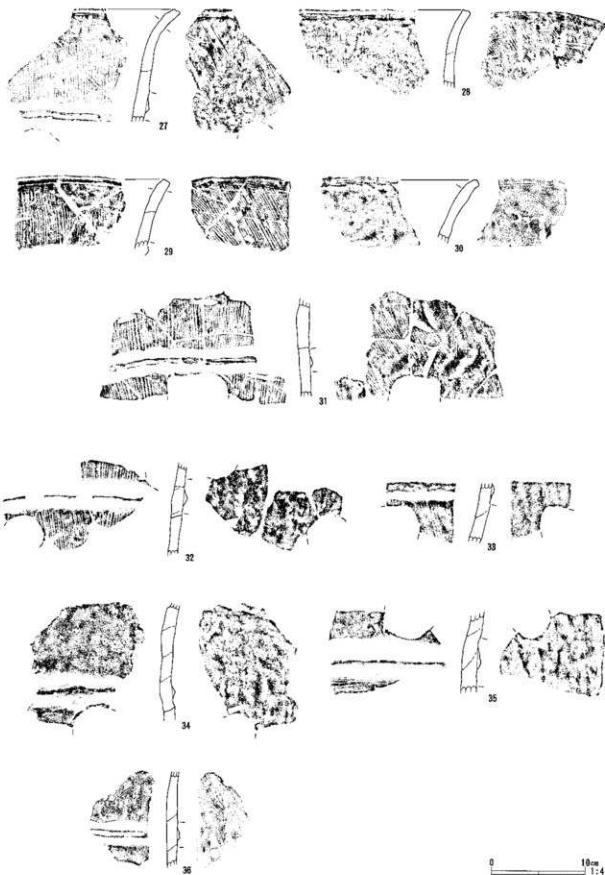


图39 三垄山8号出土陶筒·朝顔形埴輪实测图(5)



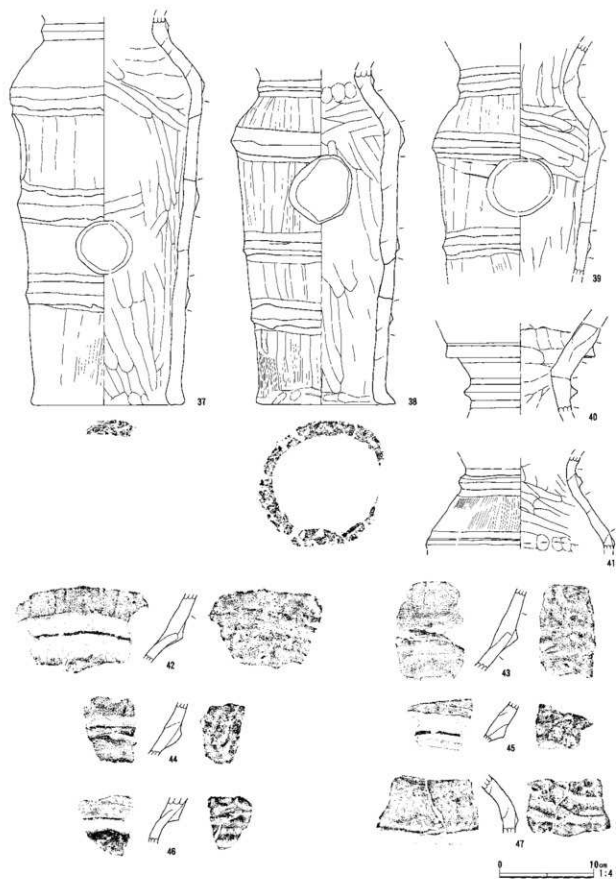


图40 三灶山8号出土陶筒·朝顔形埴輪実測图(6)

#### 朝顔形埴輪 [37~47] (図40、写真6)

朝顔形埴輪も全形の判明する資料が存在しない。胴部は2条突帯3段構成で、やや径を増しながら肩部にいたる。肩部はほとんど張りをもたず、頸部に移行している。頸部には突帯がめぐり、口縁部は直線的に外反したのち、中位で内側に角度を変え、口唇部へと立ち上がっている。

外面調整は縦位のハケおよびナデによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。内面調整は胴部が縦位のナデ、肩部が斜位のナデ、頸部、口縁部は縦位ないし斜位のナデとなっている。

突帯は断面形が崩れた台形や三角形を呈する。第2・3段に一对の円形透孔を配している。刻線は観察できない。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、還元焼成の個体は認めない。色調は全体にぶい褐色を呈する。

#### 形象埴輪 [1~127] (図41~52、写真7~11)

形象埴輪は多数の破片を検出しているが、調査範囲が限定されたためか、出土点数に比較して器種が限定され、器種不明の破片が若干存在するものの、人物・馬以外は確認できない。胎土は全体に少量の砂粒を含み、片岩の混入を認める。調整はいずれも良好で、還元焼成による個体は存在しない。色調は全体にぶい明褐色を呈し、個体ごとの差がほとんど認められない。

#### 人物 [1~50] (図41~46、写真9)

1は頭部から胸部にかけての破片である。1は頭部には鉢巻き状の突帯が一周し、頭頂部には小孔が存在する。帽状の被り物を表現している可能性が考えられる。耳は表現せず、鼻は顔面から剝離している。両側頭からは下げ美豆良を伸ばし肩の前方へ垂下するとともに、後頭部にも垂髪を観察できる。また、下げ美豆良の下端からは縦方向に粘土紐が伸び、その中寄りには粘土塊を貼付して乳房状の表現がある。調整は内外面ともナデである。

2にも鉢巻き状の突帯が一周し、頭頂部には不整形の粘土塊が貼付される。1と同じく帽状の被り物を表現している可能性が考えられる。耳・美豆良の表現は確認できない。

頭頂部の粘土塊と同様の表現は51の盾持人物にも見られることから、2も同種の頭部である可能性を排除できない。鼻は小鼻が広がらず、細く棒状に成形され、ヘラ状工具の刺突により鼻孔が表現されている。調整は後頭部外面が縦位のハケ、他は内外面ともナデを施している。

3は性別が明らかではないが、頭頂部に壺を乗せていたと考えられること、美豆良の剝離した痕跡が認められないことから、女子の可能性が高いといえる。両側頭には「C」字形の粘土を貼付して耳を表現し、中央にヘラ状工具の刺突による穿孔を加えて、耳孔を表している。鼻は小鼻が広がらず、細く棒状に成形され、鼻孔は表現されない。調整は内外面ともナデである。

4も性別不詳であるが、頭頂部に髷の脱落した痕跡と思われる大きな剝離面があり、3と同様に女子の可能性が考えられる。調整は内外面ともナデである。

5は鼻を中心とした顔面の一部である。丁寧にナデを加えた顔面本体に鼻を貼付し、縦位にナデを施した後、棒状工具の先端で刺突を加え、鼻孔を表現している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はぶい明褐色を呈する。6は顔面から剝離した鼻である。調整は縦位のナデを施している。下面には棒状工具の先端で刺突を加え、鼻孔を表現している。

7・8は側頭部の破片で、「C」字形の粘土を貼付し、耳を表現している。8は2と同様にヘラ状工具の刺突による穿孔を加え、耳孔を表している。

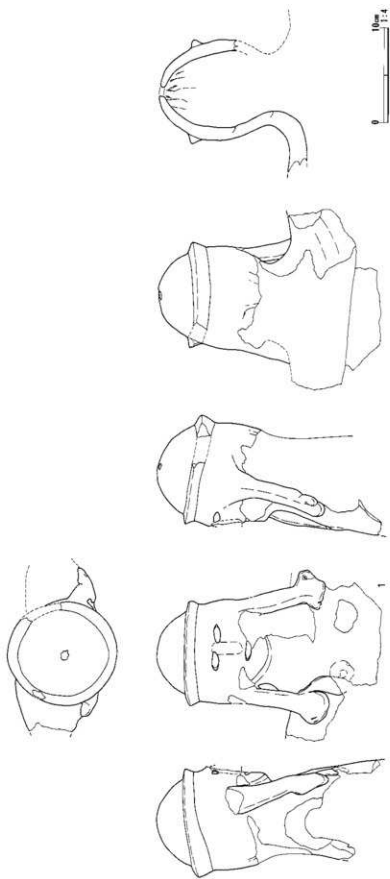


图41 三基山8号墓出土形象埴轮类图(1)

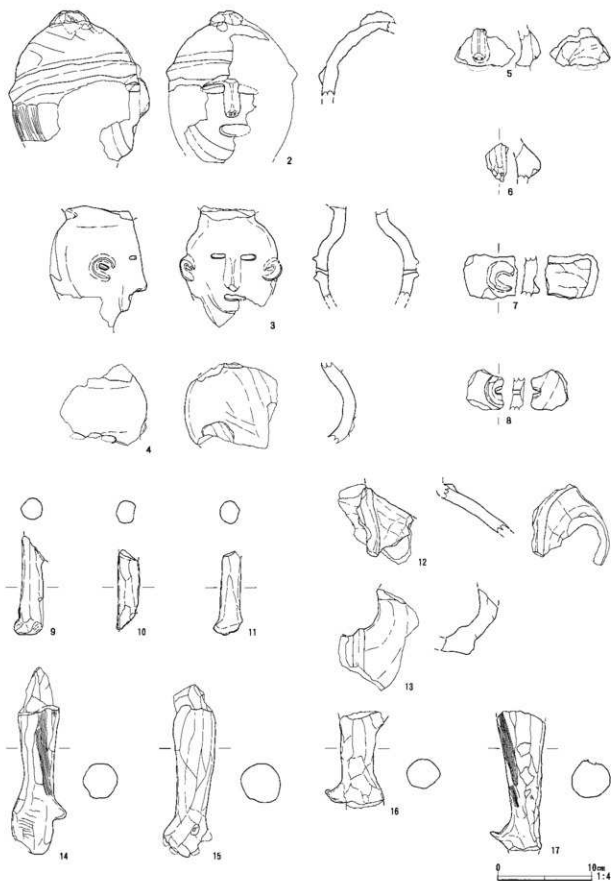


图42 三空山8号坑出土形象埴轮实测图(2)

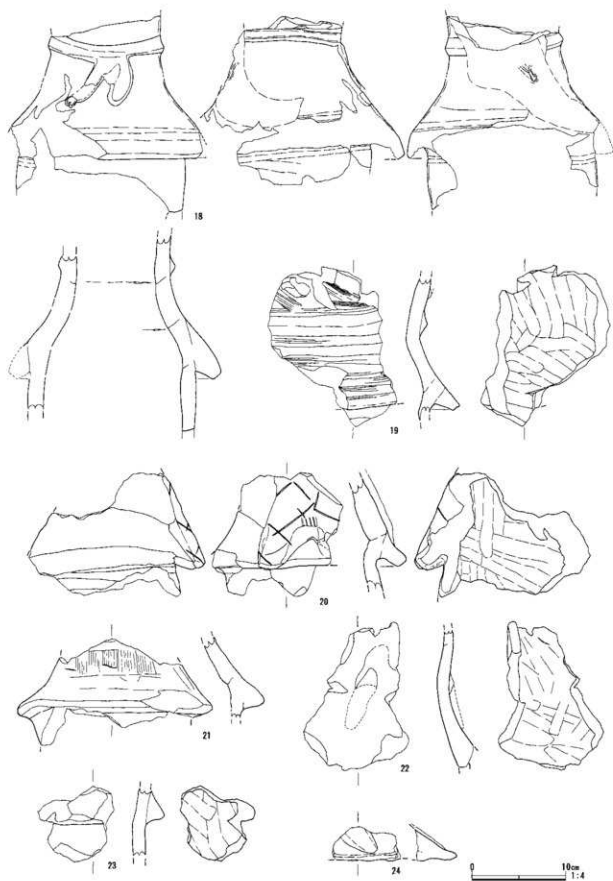


图43 三垄山8号出土土形象埴輪实测图(3)

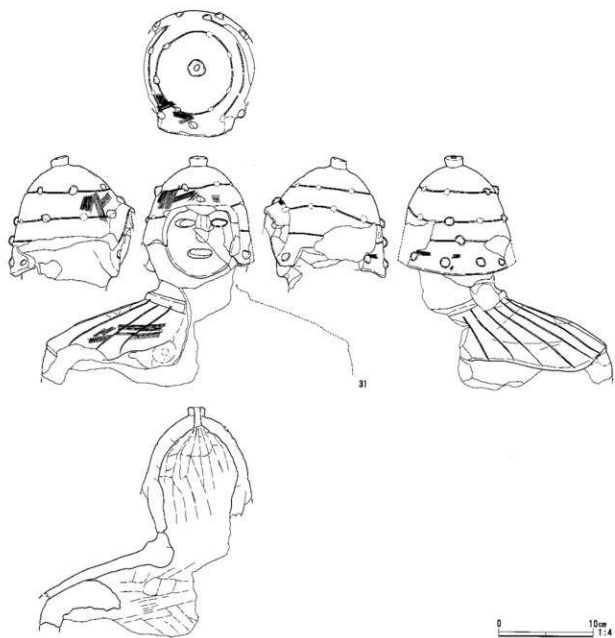
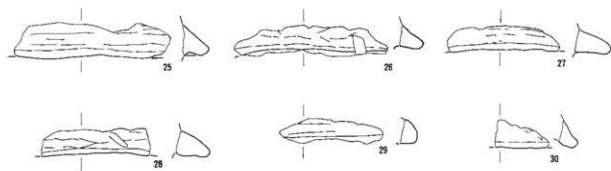


图44 三垄山8号墳出土形象埴輪実測图(4)

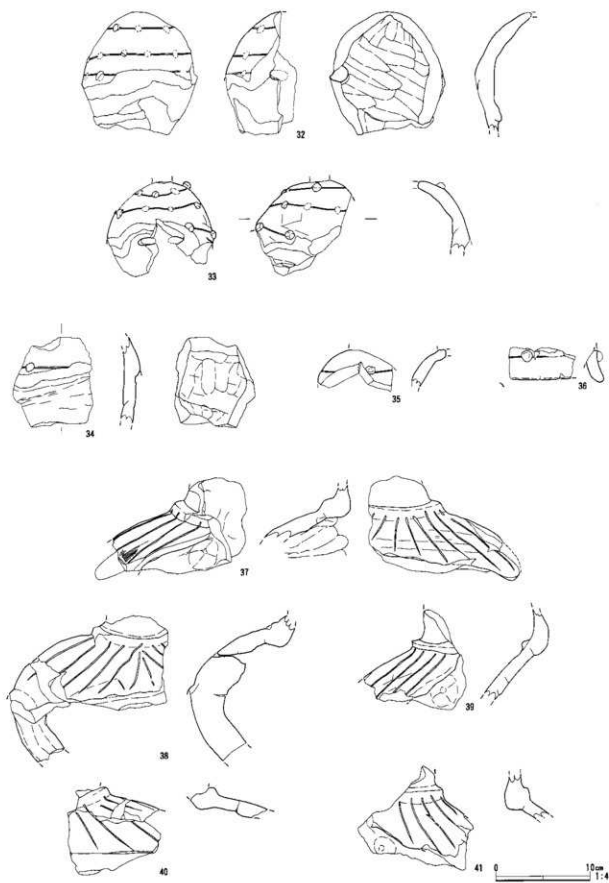


图45 三台山8号出土形象埴轮实测图(5)

9～11は頭部本体から剝離した美豆良である。いずれも断面円形の棒状を呈し、調整は縦位のナデを施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

12・13は左肩の破片である。12は下方に伸びる腕部が連続すると考えられるが、腕部は臍ごと脱落している。肩から前胸にかけて、襷を表現する縦方向の粘土紐が残る。13も縦方向に粘土紐が貼付されている。調整は内外面ともナデを施している。

14～17は本体から脱落した腕である。いずれも中実成形で、付け根から手先まで直線的に伸びる。調整は14・17の一部に縦位のハケが観察されるほかはすべてナデで仕上げられている。

18～23は半身像の胴部下半から台部にかけての破片である。18には腰に帯の表現があり、右側面に結び目を垂下している。左腰には大刀の剝離痕が観察される。19にも腰に突帯状の帯の表現がある。20は上衣の上から幅広の襷をかけ、襷の表面には直線的な刻線が不規則に並んでいる。剝離のため明瞭ではないが19・22・23にも幅の広い帯状の粘土紐がみられ、襷の表現が存在していた可能性がある。調整は19・22の外面に縦位または横位のハケをみる以外はいずれも丁寧なナデを施している。内面はすべて不定方向のナデである。

24～30は上衣の下端部の破片で、24には大刀もしくは襷の端部と推測される粘土紐の貼付が観察される。調整はいずれも丁寧なナデを施している。

31～50は武装人物と人物本体から脱落した武器の破片である。冑は衝角部をもたない円錐形を呈し、眉庇付冑に類似するが、眉庇を造形せず、代わって顔面を囲むように冑の縁に沿って鐙状の覆いがつく。頭頂部にも伏鉢・受鉢を表現せず、短い管が突出している。鏝も冑本体と一連のものとして表している。冑本体は横方向に3条の刻線をめぐらせ、刻線上に一定の間隔で粘土粒を貼付し、横短板を鋸留している状態を表現している。

肩甲状の武器は、背面から両肩前方にかけてを覆い、前胸部分が広く開く特異な形状を示している。直線上の刻線を放射状に配し、この肩甲が細長い板を綴じて構成されていることを表している。31・37・39は胸部前面右側に、41は胸部前面左側にそれぞれ粘土塊を貼付した乳房状の表現がある。腕部はいずれも中実成形で、胴部側方に伸びている。調整は外面が丁寧なナデを基本とし、冑・肩甲の一部に不定方向のハケを認める。内面は全面がナデである。

#### 盾持人物 [51～55] (図47・48、写真9・10)

51は頭部に鉢巻き状の突帯が一周し、頭頂部には不整形の粘土塊が貼付される。帽状の被り物を表現している可能性が考えられる。美豆良は存在しない。両側頭には「C」字形の粘土を貼付して耳を表現し、中央にへら状工具の刺突による穿孔を加えて、耳孔を表している。鼻は小鼻が広がらず、細く棒状に成形され、鼻孔は表現されない。体部は太い円筒状で、正面に別造りの盾が付く。盾の表面には刻線による鋸歯文が表現される。調整は内外面ともナデを施している。

52は頭頂部から剝離した二楕形の髷である。やや小型であることから、51・54のような大頭の個体とは異なる小型の盾持人物に伴う可能性が考えられる。調整はやや粗いナデである。

53は後頭部から上部背面にかけての破片で、長く扁平な粘土帯を貼付して垂髪を表現している。後頭部の垂髪は、下げ美豆良で振り分け髪の子の髪形にもあるが、それらに比べ本例は垂髪が非常に長い点が異なる。一方、同様の例は旭・小島古墳群前の山古墳出土の盾持人物埴輪にもあることからここでは盾持人物の後背部の破片と判断した。調整は内外面ともナデを施している。



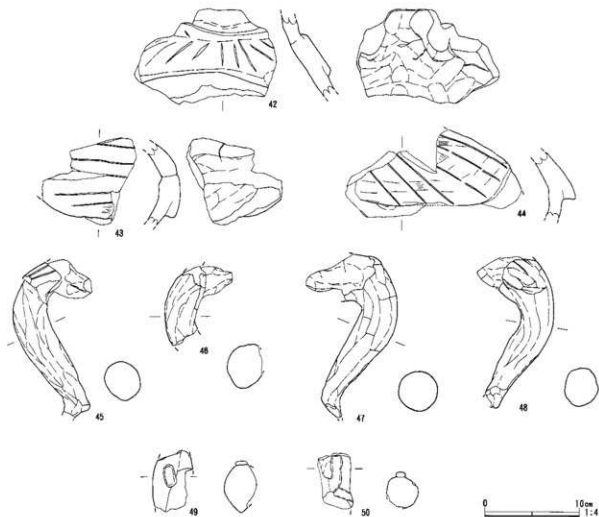


図46 三台山8号墳出土土形象埴輪実測図⑥

54・55は胴部および盾部の破片である。51と同じく、体部は太い円筒状で、正面に別造りの盾が付き、盾の表面には刻線による鋸歯文が表現される。54では体部に3条の突帯がめぐり、側方に円形透孔が配される。調整は内外面ともナデを施している。

馬 [56~105] (図49~51、写真10・11)

56~59は頭部周辺の破片である。56は左側頭部の破片で、f字形鏡板を伴う面繫を表現している。57も同様の部位で、同じくf字形鏡板を伴う面繫を表している。58は右側頭後部の面繫類革・類革・項革の交差部で、眼孔・耳孔の一部も観察される。59は右側頭後部で、眼孔の一部を含む部位である。面繫の類綱の一部が残っている。いずれも調整は内外面ともナデを施している。

60~63は鼻面から顎にかけての破片である。60は鼻面付近の破片で、二重の粘土紐を貼付し、環状鏡板を表現している。口はヘラ状工具を用いて深く切り込まれている。61は右下顎先端部の破片で、ヘラ状工具により口が切開かれている。62は下顎先端部の破片で、顎中央に穿たれた孔の前端部がかかっている。63は個体は異なるが、59と反対側の左側頭後部にあたる。眼孔の一部を含む部位で、面繫の類綱の一部が残っている。調整は60の外面がハケのちナデ、ほかはすべて内外面ともナデを施している。

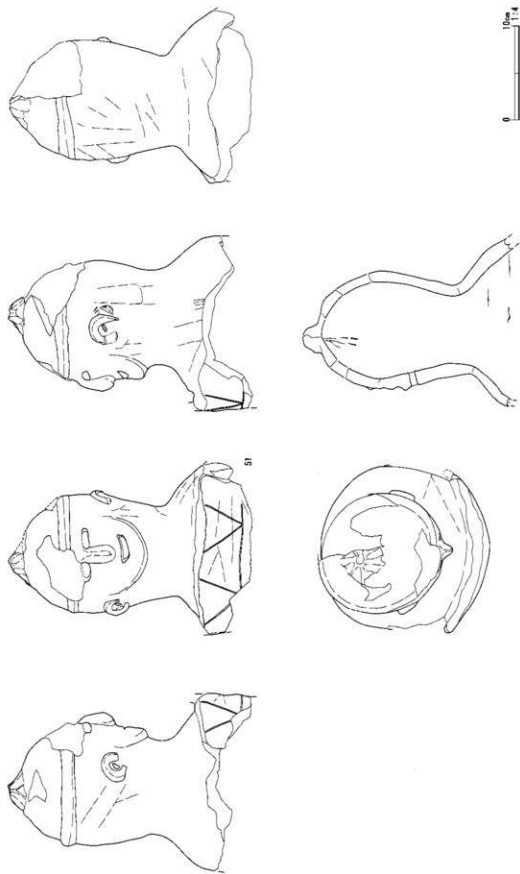


图47 三圣山8号出土形象埴轮实测图(1)

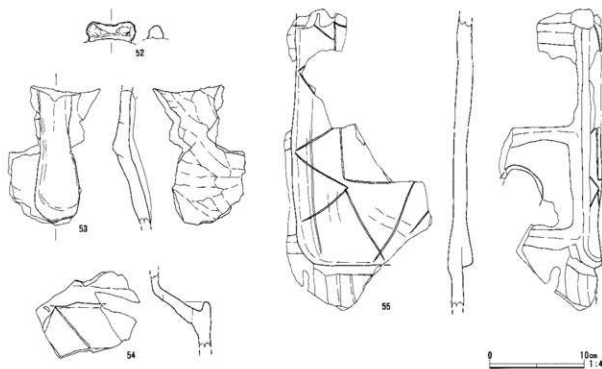


図48 三笠山 8号墳出土土形象輪実測図⑧

64は右側頭下部の破片で、下顎にあたる下面を粘土板で閉塞したのち、中央に孔を穿っている。面繫の頬綱の一部が残る。調整は内外面ともナデを施している。

65・66は耳の先端部で、三角形の粘土板を左右方向に湾曲させて成形している。66にはわずかに作業台の木目疔痕が観察される。調整は内外面ともナデを施している。

67～69は鬘で、67・68は前立て部分の破片で、全面にナデを施している。69には両面とも粗いハケのちナデを施している。

70～73は本体から剝離した鏡板もしくは杏葉の破片である。縁辺部に細い粘土紐を貼付し、さらに要所に粘土粒を配して緑金と鋲頭を表している。

74～77は胸繫周辺の破片である。74は胸繫の下端に鈴の脱落した断面が観察される。75・76には胸繫の表面に刻線により鋸歯文が施される。77は横方向に胸繫、縦方向に馬鐔の剝離痕が観察される。調整は外面が縦位のハケのちナデ、内面が不定方向のナデである。

78～80は障泥周辺の破片である。78は右側の障泥上半部で、胴部本体に方形の粘土板を貼付し、その上から輪鏡を表現している。調整は内外面ともナデである。79は左胴部下半の破片で、上方に障泥の剝離痕を認める。80も部位の詳細は不明ながら胴部の破片で、障泥の剝離痕が存在する。調整はいずれも内外面ともにナデを施している。

81・82は胴部本体から脱落した鞍橋の破片である。前輪・後輪の区別はつかない。81には作業台の木目疔痕が残る。

83・84は障泥の端部で、縁辺にヘラ状工具刺突により列点を施し、革覆輪を表現している。調整は表裏面とも丁寧なナデで、裏側の上位は剝離面となっている。

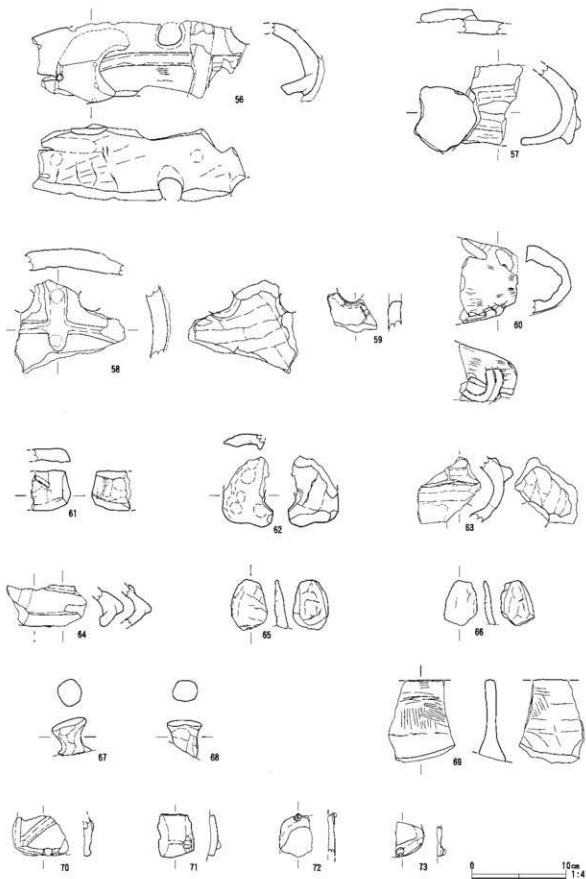


图49 三岔山8号填出土形象埴輪实测图(9)

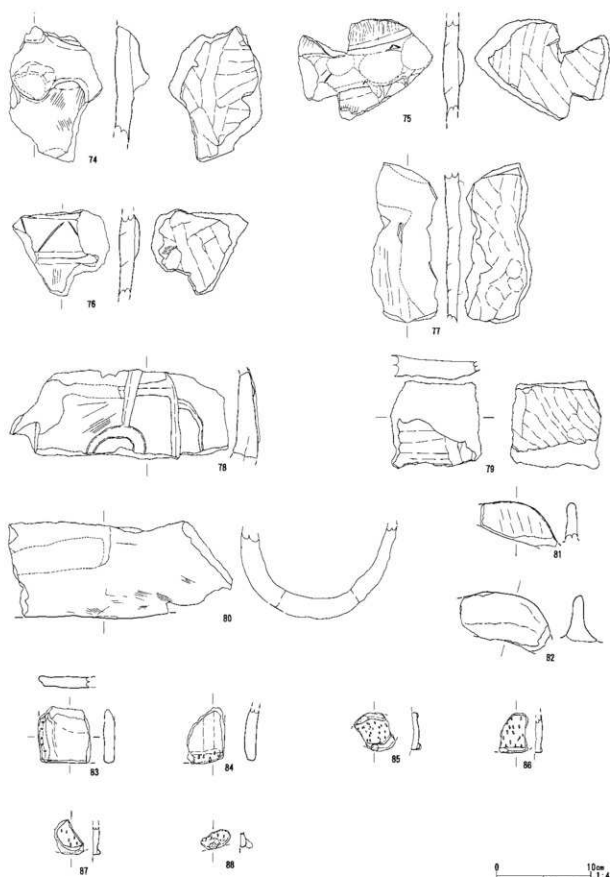


图50 三岔山8号填出土形象埴輪実測図⑩

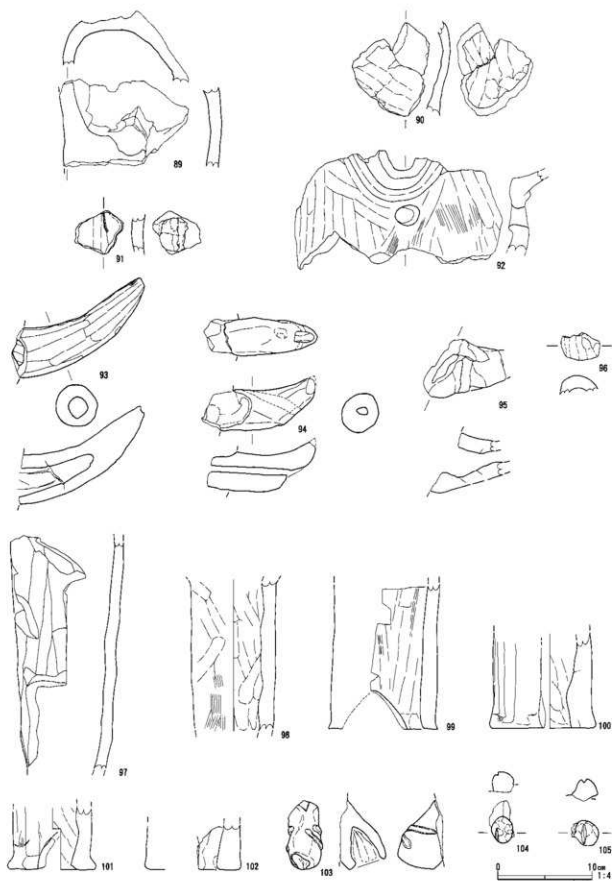


图51 三岔山8号出土形象埴輪实测图(1)

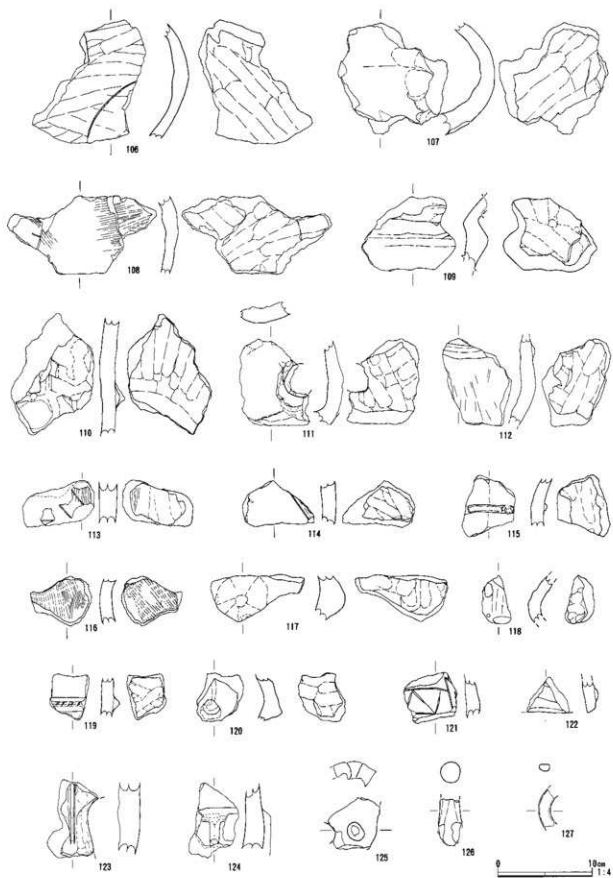


图52 三岔山8号出土土形象埴輪実測图(1)

85～88は鞍の一部もしくは杏葉の破片である。薄い板状の部品で、裏側は剝離面となっている。縁辺に細い粘土紐を貼付し、内側にヘラ状工具の先端で刺突を施している。調整は丁寧なナデを加えている。

89～91は胴部から脚の付け根にかけての破片である。複雑に湾曲し、調整は内外面ともに縦位または斜位のナデを粗く施している。

92は尻部で尾の付け根を尻繫の革紐がめぐり、革紐の下方に小円孔が穿たれている。

93～96は尾の破片で、いずれも中空成形である。とくに、94は本芯中空成形技法を用い、孔は先端部まで貫通している。

97～102は脚部の破片で、成形には切開再接合技法を用いている。99・101には下端を切り込んで蹄の表現がある。調整は外面が縦位のハケのちナデ、内面が縦位のナデである。

103は胸繫から剝離した馬鐸である。表面に粘土紐を交差させ馬鐸表面の文様を表現している。104・105は胸繫もしくは鈴杏葉から剝離した小型の鈴である。中実成形で、鈴口のみを表現し、調整は粗いナデを施している。

#### 器種不明 [106～127] (図52、写真11)

106～127は器種不明の破片である。115は湾曲した表面に細い粘土紐と粘土粒を貼付している。119は板状の本体に粘土紐を貼付し、その上面にヘラ状工具により連続する斜位の列点を加えている。125は成形・調整とも粗いが、縁辺近くに1対の小孔がみられることから、馬の鼻面の破片である可能性がある。

#### (3) 小 結

三宝山8号墳の調査はきわめて限定した範囲にとどまったにもかかわらず多種多量の埴輪を検出している。周堀もごく一部の検出にとどまっているが、確認面で幅8m以上、深さ約120cmを測る比較的規模の大きなものであることから、やや大型の円墳ないし帆立貝形古墳の可能性が高い。

出土した埴輪のうち、武装人物埴輪が着用する肩甲状の武具は、背面から両肩前方にかけてを覆い、前胸部分が広く開く特異な形状を示している。古墳出土鉄製武具の実物資料のなかには存在しない形式である。なお、胸部前面の乳房状の表現は左右一対で存在した可能性が高い。築造時期は、調査段階において周堀覆土中にHr-FAの堆積を確認できていないものの、武装人物埴輪の着用する冑に肩庇付冑に類似の表現が認められることから、集成8期に該当すると考えられる。



## 15 三笠山9号墳

[A地点]

調査期間 平成4年7月20日～平成4年8月5日

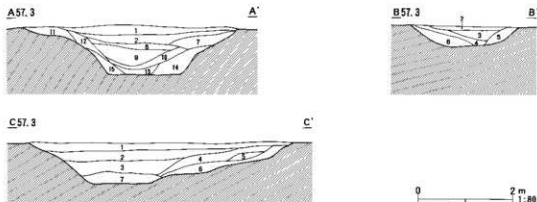
調査面積 740㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本市市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本市市小島地内において、中心をX=27,740、Y=-59,580付近におく。北側に三笠山8号墳、北西側に三笠山7号墳が所在する。南西側に突出部をもつ帆立貝形古墳で、推定主軸長約28m、推定円丘部径約22m、突出部全面幅15mを測る。墳丘平面設計は円丘部が整円で、突出部は「ハ」の字状に開く。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の形式も不明である。



#### 三笠山9号墳A地点土層説明 [A-A'・B-B']

- 1 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 暗灰褐色土 As-Bを多量に含む。
- 3 暗灰褐色土 白色パミスを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 微細なロームブロックをまんべんなく多量に含む。
- 5 暗褐色土 微細なロームブロックをまんべんなく多量に含む。
- 6 暗黄褐色土 微細なロームブロックをまんべんなく多量に含む。
- 7 暗褐色土 微細なロームブロックをまんべんなく多量に含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・白色パミスを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・白色パミスを多量に含む、粒子が粗い。
- 10 黒灰褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 11 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロック少量含む。
- 12 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む、斑状に堆積する。

- 13 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、斑状に堆積する。
- 14 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロック少量含む。
- 15 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、斑状に堆積する。

#### 三笠山9号墳A地点土層説明 [C-C']

- 1 暗灰褐色土 As-Bを多量に含む。
- 2 黒灰褐色土 As-Bを多量に含む。
- 3 黒褐色土 白色粒子、暗褐色ブロックを少量含む。粘性強。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロック、白色粒子を少量含む。粘性強。
- 5 黒灰褐色土 ロームブロック、白色粒子を少量含む。粘性強。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、斑状に堆積する。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、斑状に堆積する。粘性強。

図53 三笠山9号墳土層断面図

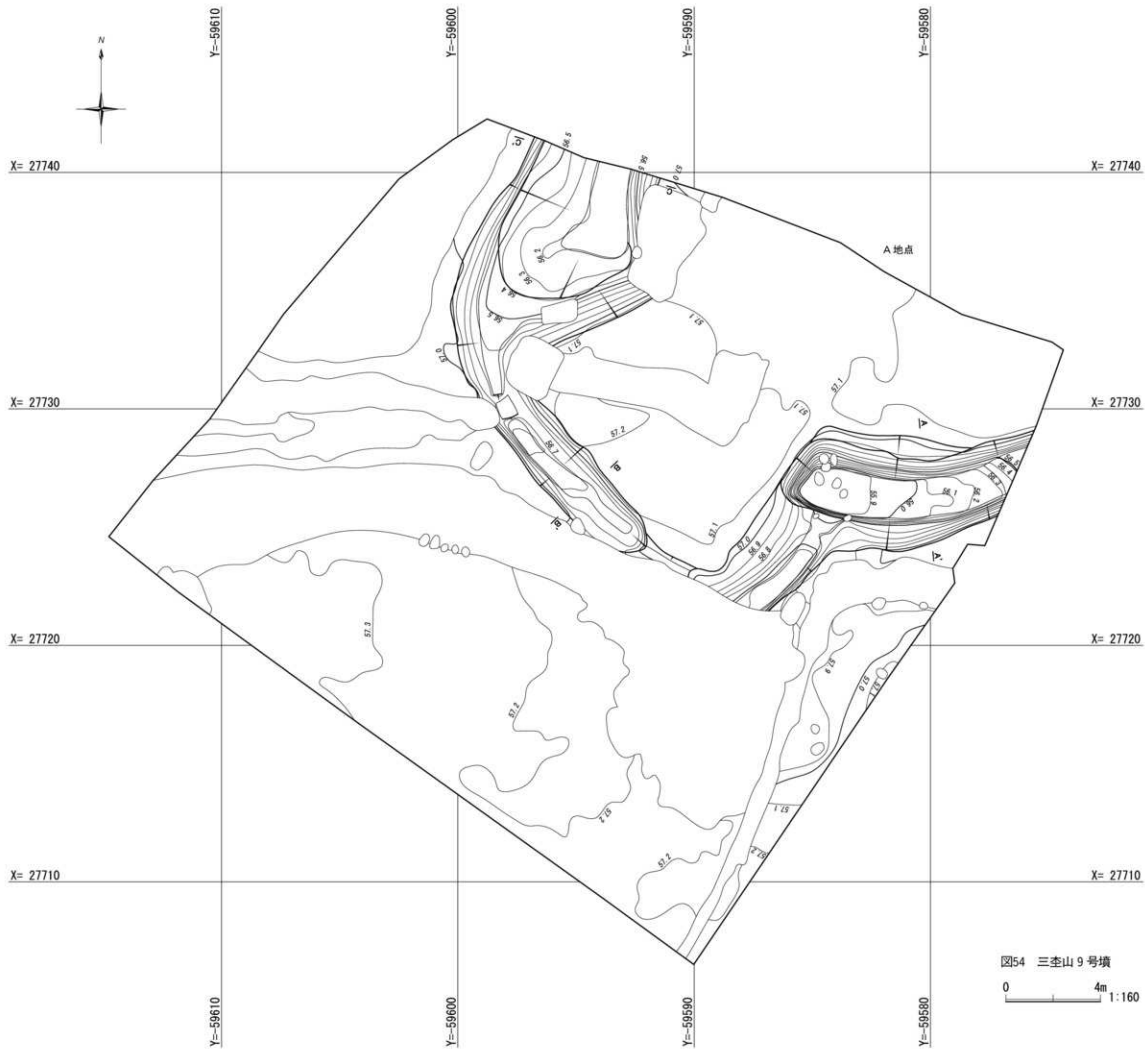


图54 三台山9号墩  
0 4m 1:160

周堀は円丘部の周堀が深いのに対し、突出部の周堀は浅く、堀幅も狭い。円丘部の周堀底面は、緩やかな傾斜が見られるものの、広く安定した平面を形成している。確認面からの深さは最深部で110cmを測る。突出部の周堀底面は広い底面を形成せず船底状を呈し、確認面からの深さは40cmを測る。突出部全面の右隅よりは堀底が一段浅くなる箇所がみられる。周堀覆土は上層にロームブロックを少量含む黒褐色土、下層にロームブロックを多量に含む暗褐色土または褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに認められない。

## (2) 遺物

周堀および墳丘縁部部の確認面上層、周堀覆土の上層から土師器・須恵器の他多量の埴輪片を検出している。埴輪は原位置をとどめる個体はなく、いずれも墳丘上から転落・移動したものと考えられる。ただし、確認面上層で検出の遺物には、相当程度のレベル差があり、三奈山9号墳の築造に前後する時期の遺物が混入している可能性を完全に否定できるわけではない。

### a. 土器

土師器 [1~4] (図55、写真21)

#### 環 [1~4]

1・2は坏蓋模倣坏で、双方とも口縁部が強く外湾し、体部との境界に明瞭な稜をもつ器形が特徴である。3は内屈する口縁部をもち、4は体部が浅い。焼成は1・2が良好で硬質であるのに対し、3・4はやや軟質である。

須恵器 [5~13] (図55、写真21)

#### 提瓶 [5]

頸部の長い器形が特徴で、肩部に把手や粘土粒の貼付を認めない。体部には前・背面ともにカキメを施している。胎土に黒色粒、白色粒を含み、焼成はやや甘く軟質で、色調は灰色を呈する。

#### 大甕 [6~13]

口唇端面には櫛描波状文、口縁部外面には複数条の櫛描波状文と沈線がめぐる。6・9・10・13には頸部補強帯がみられる。13の胴部外面には平行タタキが観察され、内面には同心円状の当具痕が残る。胎土に黒色粒、白色粒を含み、焼成は全体に甘く軟質で、色調はにぶい黄色、にぶい褐色、灰白色などを呈する。

三奈山9号墳出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 (12.4) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に稜を持ち、 外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部 ナデ。	石英・黒色粒 内外—橙色	口縁～体部片。
2	土師器 環	口径 (11.8) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に稜を持ち、 外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部 ナデ。	石英・角閃石 内外—橙色	口縁～体部片。
3	土師器 環	口径 (11.2) 底径 — 器高 4.2	体部は丸みを持って立ち上がり、 内湾する口縁部に至る。底部は丸 底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラクズリ。内面—口縁部～体部ヨ コナデ、底部ナデ。	粗粒チャート 内外—にぶい黄橙 色	1/2。
4	土師器 環	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部 ナデ。	石英・黒色粒 内外—にぶい橙色	口縁～体部片。
5	須恵器 提瓶	口径 (7.4) 底径 — 器高 —	口縁部は長く外反して開き、端部 は段をなす。体部は背面が平らで 前面は膨れる。	外面—口縁部ナデ、体部は前面・背 面ともカキ目。内面—口縁部ナデ、 体部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰色	体部前面、底部 欠損。

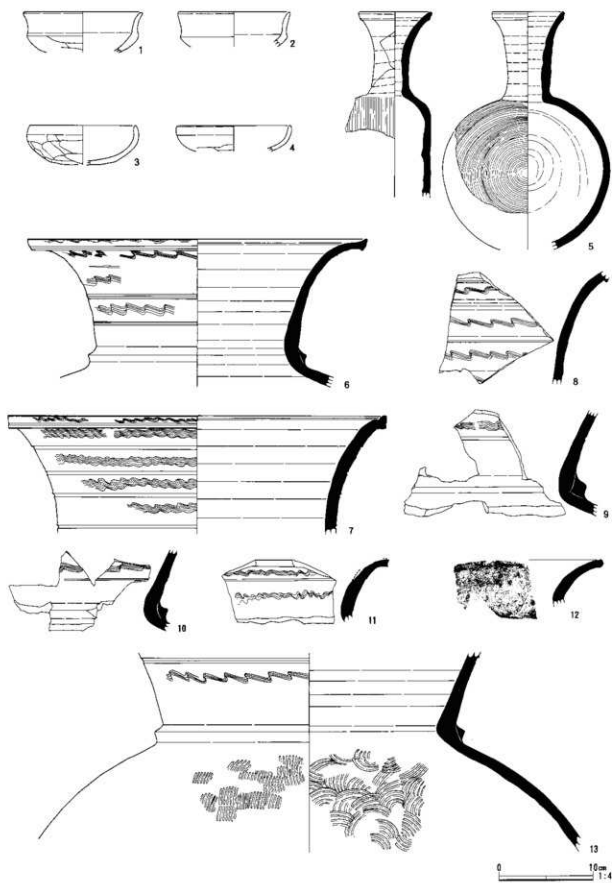


图55 三垄山9号墳出土土器実測図

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	須恵器 罎	口径 (35.8) 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開き、端部は上下に延びる。頸部に補強帯が通る。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線、胴部平行タタキ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部に同心円状当具痕。	微砂粒・黒色粒 内外—灰白色	口縁～胴部上位片。
7	須恵器 罎	口径 (40.0) 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開き、端部内外面に沈線が通る。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線が通る。内面—口縁部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰色	口縁部1/4。
8	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線が通る。内面—口縁部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内—褐灰色 外—灰褐色	口縁部片。
9	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外傾して立ち上がる。頸部に補強帯が通る。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線が通る。内面—口縁部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰色	口縁下位～胴部片。
10	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外傾して立ち上がる。頸部に補強帯が通る。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線が通る。内面—口縁部ヨコナデ。	微砂粒・黒色粒 内外—ぶい黄色	口縁下位～胴部片。6と同一個体と思われる。
11	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線が通る。内面—口縁部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰白色	口縁部片。やや軟質。
12	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ナデ、摩耗するが磨き波状文。内面—口縁部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰白色	口縁部片。やや軟質。
13	須恵器 罎	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は外傾して立ち上がる。頸部に補強帯が通る。	外面—口縁部ヨコナデで磨き波状文と沈線、胴部平行タタキ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部に同心円状当具痕。	白色粒・黒色粒 内—褐灰色 外—ぶい褐色	口縁下位～胴部上位片。

## b. 埴輪

### 円筒埴輪 [1～40] (図56～59、写真12～14)

円筒埴輪は第1段の幅が広く細身の一群と、第1段が相対的に狭い一群がみられる。全形の判明する資料は存在しないが、いずれも2条突帯3段構成品と考えられる。

外面調整はいずれも縦位のハケおよびナデによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。11のように基部外面に板押圧による底部調整を施す個体が含まれる。内面調整は縦位または斜位のハケまたはナデによる。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。突帯は断面形状が台形または三角形を呈する。透孔は円形と半円形があり、第2段に一对を配している。半円形透孔は第2突帯と接している。刻線を施す個体はみられない。胎土に片岩・チャートを含むものと角閃石を含むものが混在している。焼成は総じて良好で、還元焼成の個体は認めない。色調は橙色系または褐色系を呈する。

### 朝顔形埴輪 [41] (図59、写真14)

肩部から口縁部にかけての破片1点が確認される。頸部は緩やかに屈曲し、断面台形の突帯がめぐる。口縁部は挑戦的に外反して立ち上がる。外面調整は縦位のハケによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。内面調整は頸部以下が不定方向の粗いナデ、口縁部が横位または斜位のハケである。内面には粘土紐の積み上げ痕が残る。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を示す。

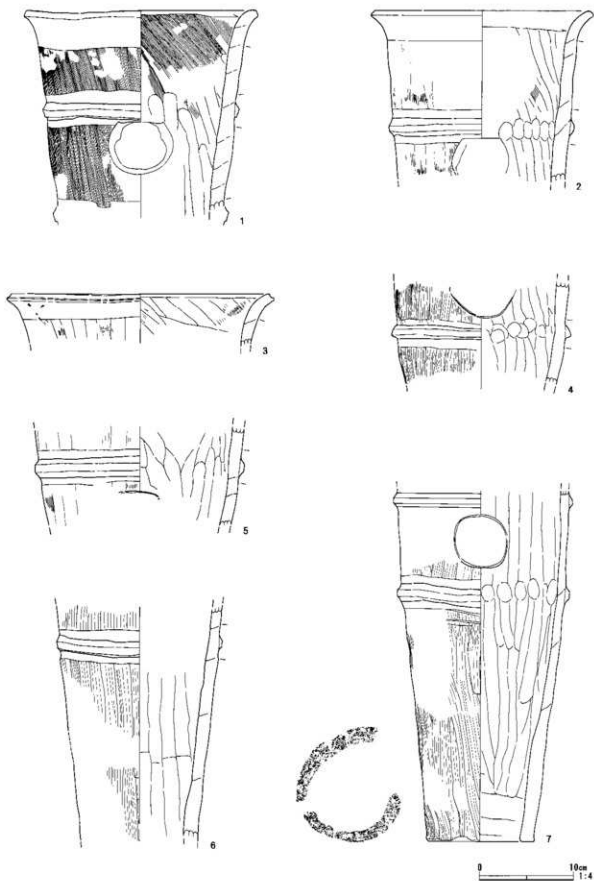


图56 三垄山9号出土卣筒·朝顔形植輪实测图(1)

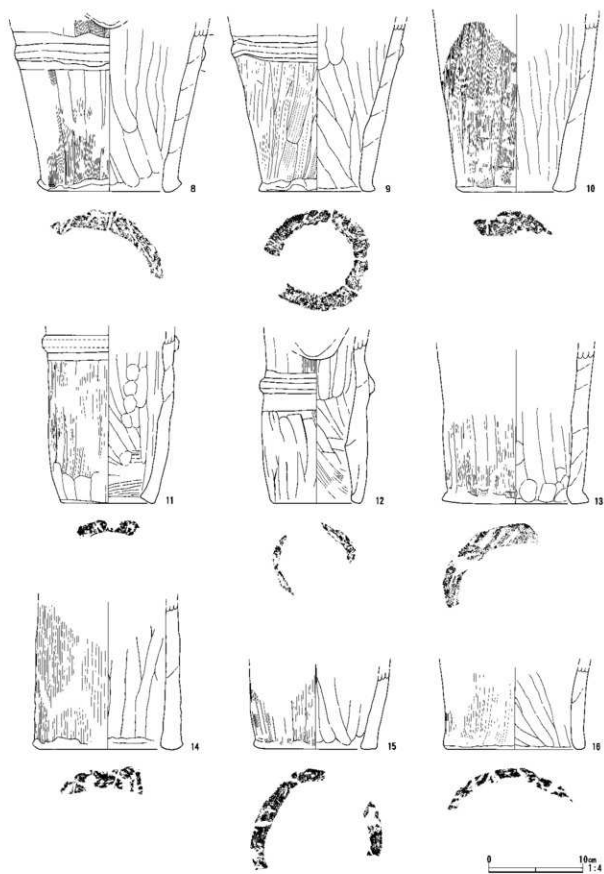


图57 三垄山9号墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(2)

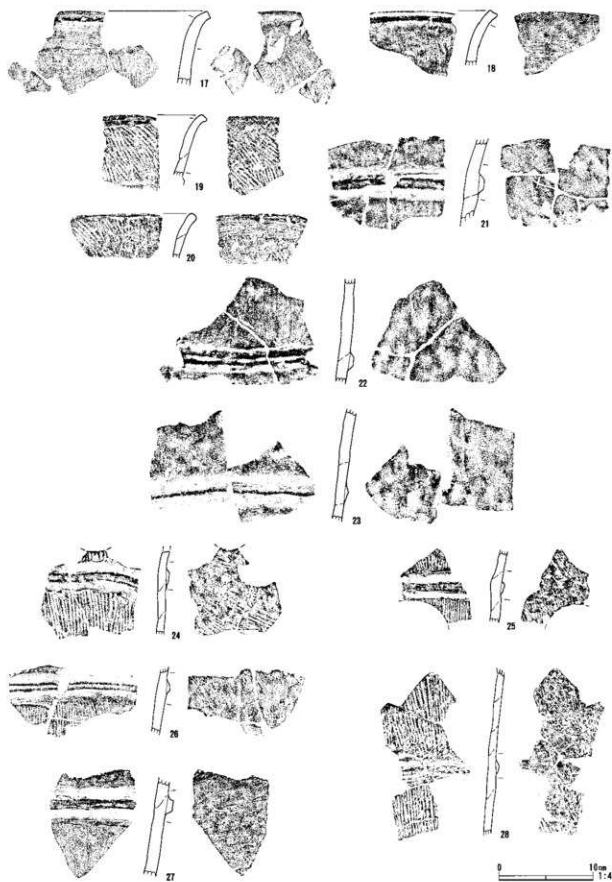


图58 三岔山9号出土陶筒·朝顔形埴輪实测图(3)



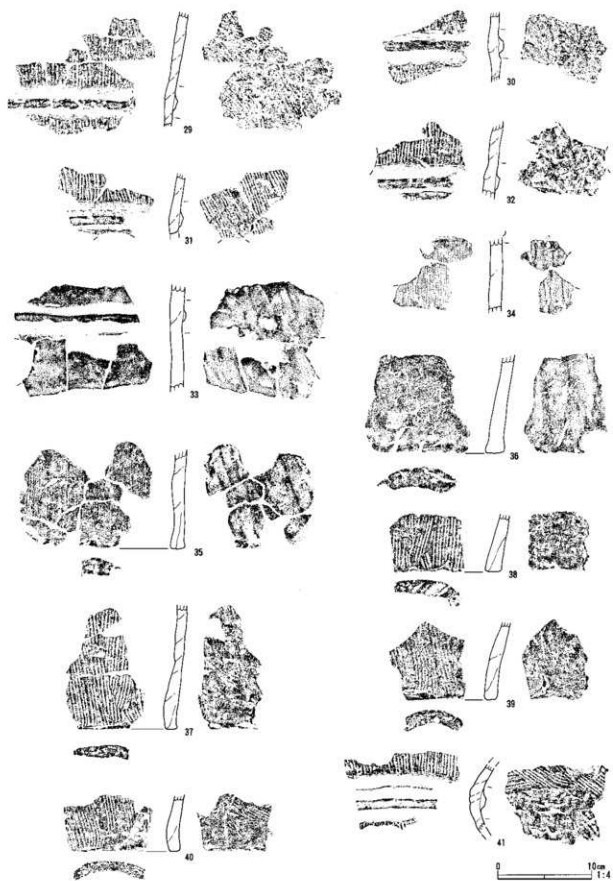


图59 三垄山9号出土陶筒·朝顔形埴輪实测图(4)

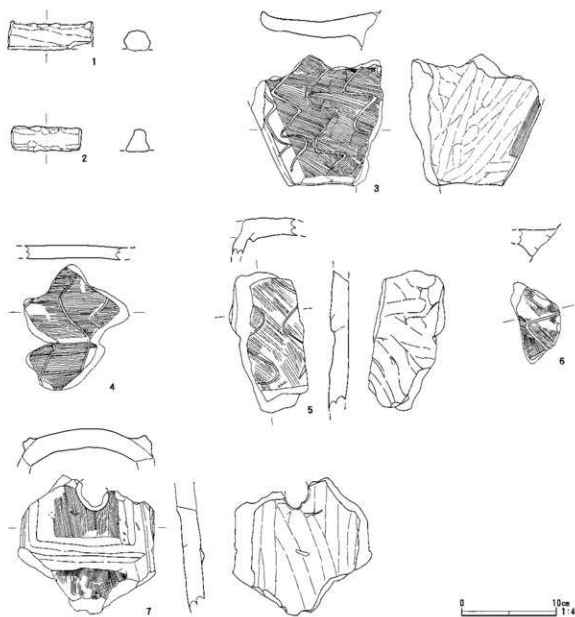


図60 三空山9号墳出土形象埴輪実測図(1)

形象埴輪 [1~114] (図60~70、写真15~20)

形象埴輪は家、盾、鞍、大刀、男女の人物、馬を確認できるほか、器種不明の破片も存在する。胎土は全体に少量の砂粒を含み、片岩の混入を認める。調整はいずれも良好で、還元焼成による個体は存在しない。色調は赤色系から淡褐色まで、個体により差がみられる。

家 [1~8] (図60・61、写真15)

1・2は屋根の棟から脱落した堅魚木である。ともに中実成形で、全面に粗いナデを加えて仕上げている。色調は暗赤褐色を呈する。

3~6は入母屋型屋根上部の破片である。5は端部を外側に屈曲させ、妻部を成形している。調整は外面が横位および斜位のハケで妻部の屈曲付近には丁寧なナデを施している。内面は斜位のナデである。外面にはいずれの個体にも、調整後、縦方向にヘラ描きによる波状沈線を加えている。色調は

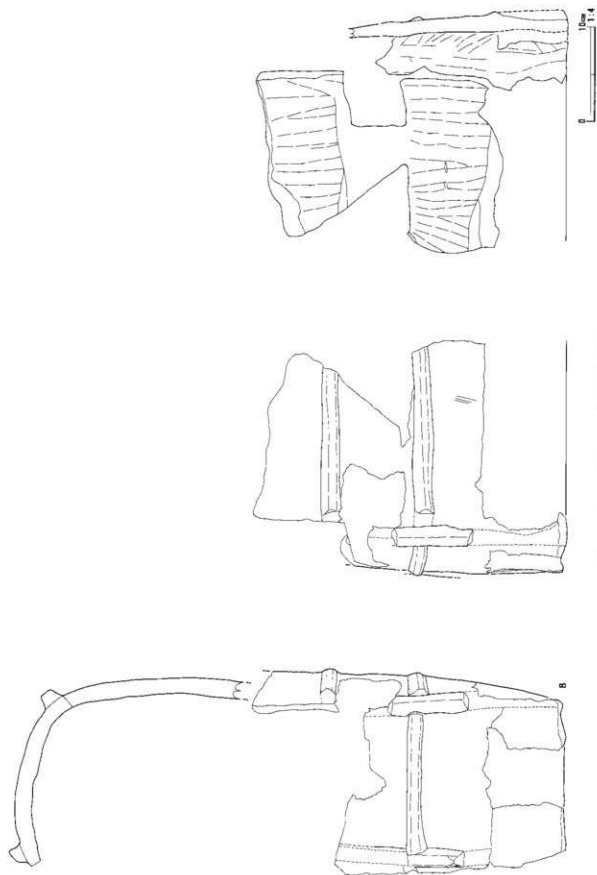


图61 三圣山9号墳出土形象埴輪美測図2)

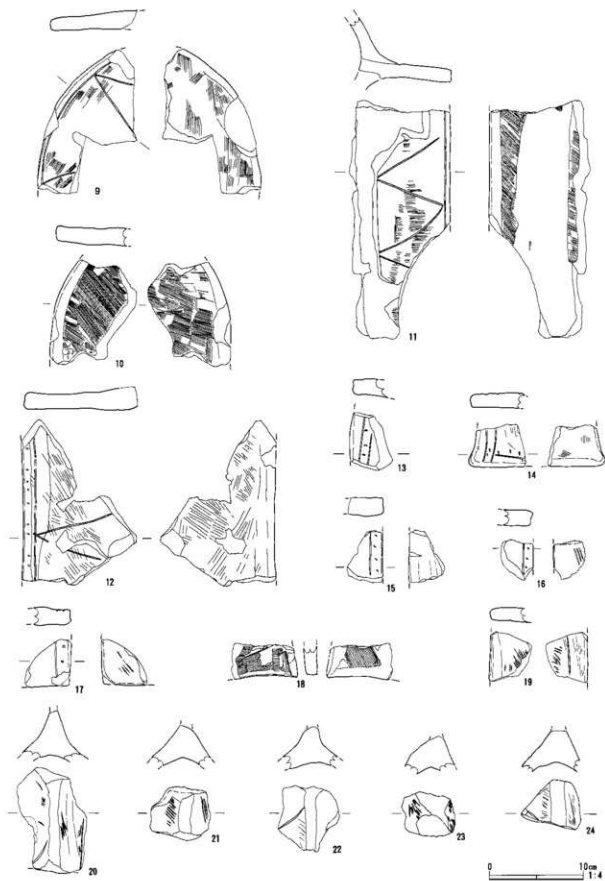


图62 三壘山9号墳出土形象埴輪実測图(3)

いずれにもぶい明褐色を呈する。

7は妻側の壁の一部である。壁面は横方向に緩やかに湾曲し、角も丸みを帯び、原形は隅丸の平面形であったと推測される。上位に凹形の透孔を配する。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位のナデである。色調はぶい橙褐色を呈する。

8も壁の一部である。中位に2条の突帯がめぐり、隅にも縦位の突帯がつく。入り口や窓の表現は確認できない。調整は外面が縦位のハケのち横位および斜位のナデ加え、内面は横位および斜位のナデである。色調はぶい明褐色を呈する。

**盾** [9~24] (図62、写真15・16)

いずれも破片資料で、盾持人物である可能性も否定できない。9・10は盾の上位の破片で、外縁は緩やかな弧をなす。11は左側方の破片で、円筒状の本体を切開し、粘土板を挟み込んで全体を成形している。12~17には外縁内側に1・2条の刻線を施し、さらに外縁との間にへら状工具の先端で等間隔に刺突を加え、盾の覆輪を表現している。また、9・11・12の盾表面には鋸歯状の刻線が観察される。調整は盾表裏面が横位または斜位ハケ、内面は斜位のナデである。色調はいずれにもぶい褐色を呈する。

**鞆** [25] (図63、写真16)

鞆の下端から上部にかけての破片である。正面下端には横方向に幅広の粘土帯がめぐり、粘土帯の上下の縁辺には粘土粒を貼付し筋を表現している。側方には鱗状の粘土板ではなく、縦方向に2条の突帯状の表現がある。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面は縦位のナデである。色調はぶい橙褐色を呈する。

**大刀** [26~29] (図63、写真16)

いずれも勾革の破片である。27・28には三輪玉が貼付されている。26にも三輪玉の剝離痕が観察される。29にも剝離痕が残るが、形状は凹形で26~28とは別種の大刀と推測される。色調は橙褐色を呈する。

**人物** [30~80] (図63~66、写真16~18)

30は顎の部分がU字状に剝落した頭部である。頭頂部に二瘤状の髷の表現があることから盾持人物の頭部であった可能性が考えられる。両側頭には円環状の粘土を貼付して耳を表現し、中央にへら状工具の刺突による穿孔を加え、耳孔を表している。眉は粘土紐を貼付して表現し、眉間部で鼻部へと連続している。小鼻は広く、へら状工具の刺突により鼻孔が表現されている。色調はぶい褐色を呈する。

31~33は頭頂部付近の破片である。31は後頭部寄りの破片で性別は不詳である。全体に厚手のつくりで、調整は内外面とも不定方向のナデである。32は女子の頭部で髷は完全に脱落し、ほぼ全面が剝離面となっている。側方にはわずかに幅広の粘土紐が残る。調整は外面が丁寧なナデ、内面が不定方向の粗いナデである。33は頭頂部方向からの図で、頭部中央にナデによる前後方向の凹線が観察される。男子の振り分け髪を表現しているものと推測される。調整は内外面とも丁寧なナデである。38は女子の頭部上位の破片である。頭頂部が水平に開口し、本来は板状に成形し髷で閉塞していたものと推測される。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が不定方向のナデである。色調はいずれにもぶい褐色を呈する。

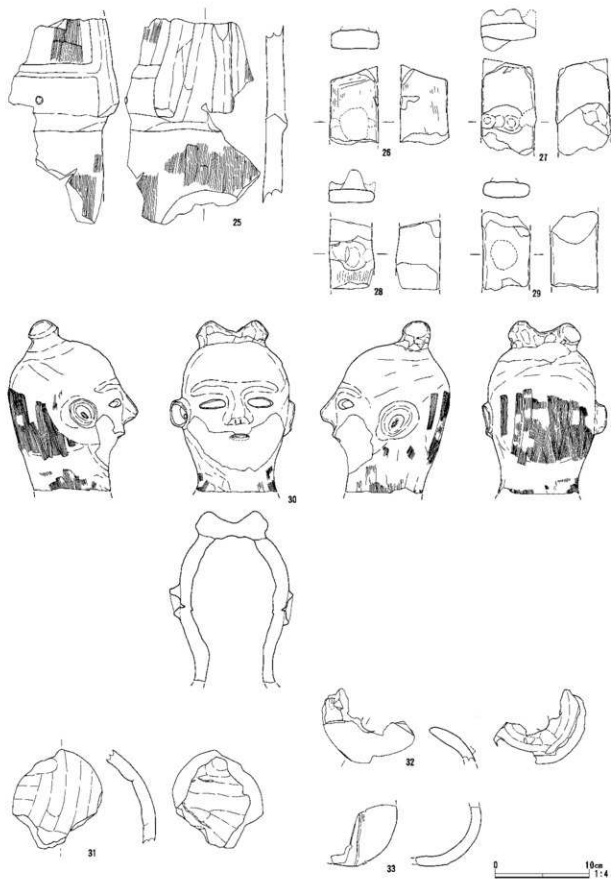


图63 三台山9号出土形象埴輪実測图(4)

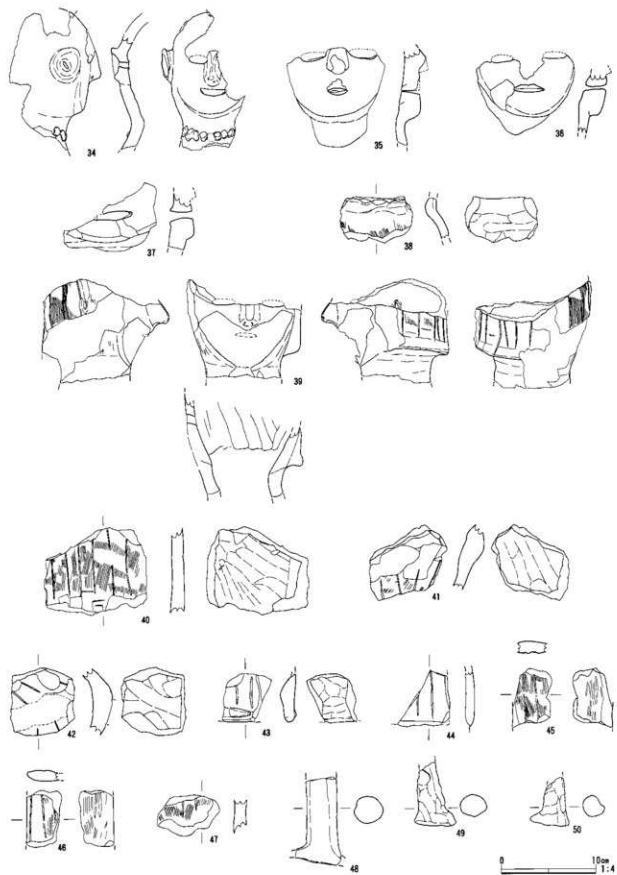


图64 三岔山9号出土形象埴輪実測图(5)

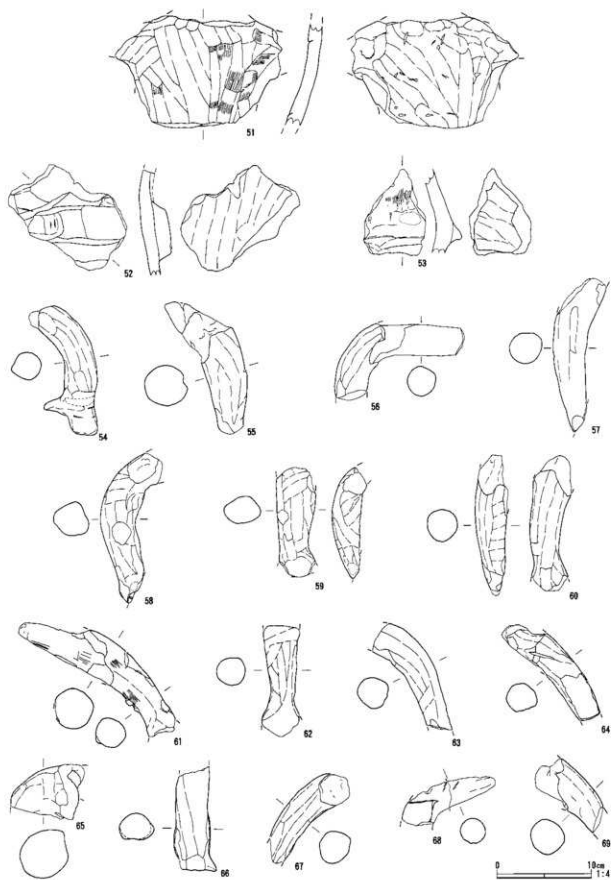


图65 三岔山9号出土土形象埴輪実測图(6)



39は武装人物の頭部で両側頭部から後頭部にかけて胃の鍔の表現がある。調整は鍔の外面向が縦位のハケおよびナデ、頸部外面が横位のナデ、内面向が縦位および斜位のナデである。

40～47は武装人物から脱落した武具の破片である。部位を確定するまでには至らないが、41・42は肩甲、43は鍔、46は頬当の可能性が考えられる。調整はいずれも外面が縦位のハケおよびナデ、内面向が不定方向のナデである。色調はいずれもにぶい赤褐色を呈する。

48～50は頭部本体から脱落した下げ美豆良である。48・50は左右の別が不明であるが、49は右側の美豆良で外側に1個の粘土粒を貼付している。調整は48が縦位のナデ、49・50が不定方向の粗いナデである。色調は48・49が橙褐色、50がにぶい褐色を呈する。

51は背部の破片である。腕部との接続部分には大きな腓穴を成形している。調整は外面が縦位または斜位のハケおよびナデ、内面向が縦位または斜位のナデである。色調はにぶい褐色を呈する。

52は左腰部の破片で、帯を巻き、斜めに佩刀した状態を表現している。帯には鋸歯状の刻線が観察される。調整は外面が丁寧なナデ、内面向がやや粗い斜位のナデである。

54～77は本体から脱落した腕部およびその破片である。55・72には手先側の断面に木芯状の小孔が観察されるが、腓骨は閉塞されている。他はすべて中実成形である。61は手首に2条の粘土紐がめぐらされる。54にも手首に幅広い粘土板が被覆していた痕跡があり、籠手の装着状態を表現していたと推測される。77は右手の破片で、全体をミット状に成形し、人差指から小指は刻線により表現している。掌には横方向に窪みが観察されることから、何らかの器物を手にしていただ可能性がある。色調は55が暗赤褐色、57・64・72が橙褐色、他はにぶい褐色を呈する。

78・79は座像の脚部である。78は足首に粘土紐をめぐらせ、足裏は剝離面となっている。左右の別は判然としなない。79は右脚で内側、後側、足裏が剝離面となっている。膝から腿にかけてが太く、膝下に粘土紐をめぐらせて脚結を表現し、この部分で袴を絞り込んでいる。靴の表現は認められない。色調はともににぶい明褐色を呈する。

80は双脚全身立像の台部である。天井部との境界に1条の突帯めぐらせている。両側面の突帯直下には円形透孔を穿っている。天井部はドーム状をなし、左右の脚首には1条の粘土紐をまわし何らかの装飾を表現している。足は左右とも脱落しているが、踵は左側が残る。調整は外面が縦位または斜位のハケおよびナデ、内面向が縦位または斜位のナデである。色調はにぶい褐色を呈する。

馬 [81～98] (図67～69、写真18～20)

81～85は鬣の破片である。81・82・84は鬣の前端の前立が残るが、81・82の前立が断面円形の棒状を呈するのに対し、84は扁平な板状をなす。85は鬣の上端部左右に粘土紐を貼付する所謂「T字状」鬣である。調整は81～83が不定方向のナデ、84・85が斜位のハケおよびナデである。色調はいずれもにぶい橙褐色を呈する。

86～88は右側胴部の破片で、障泥と輪籠の表現がある。86は粘土紐を貼付して障泥の緑金具と輪籠を表現し、障泥の緑金具にはヘラ状工具の先端で列点状に刺突を施してしている。調整は胴部外面が横位のハケおよびナデ、胴部内面向が横位または斜位のナデで、障泥表面には丁寧なナデが施されている。87・88もともに粘土紐を貼付して輪籠を表現している。87の輪籠には板状工具による押圧を加えている。調整は胴部内面向が不定方向のナデ、縦位または横位のハケおよびナデである。88は輪籠が脱落しているが、痕跡の明瞭に残る障泥の各縁辺部にはナデを加えたのちにヘラ状工具の先端で列点状

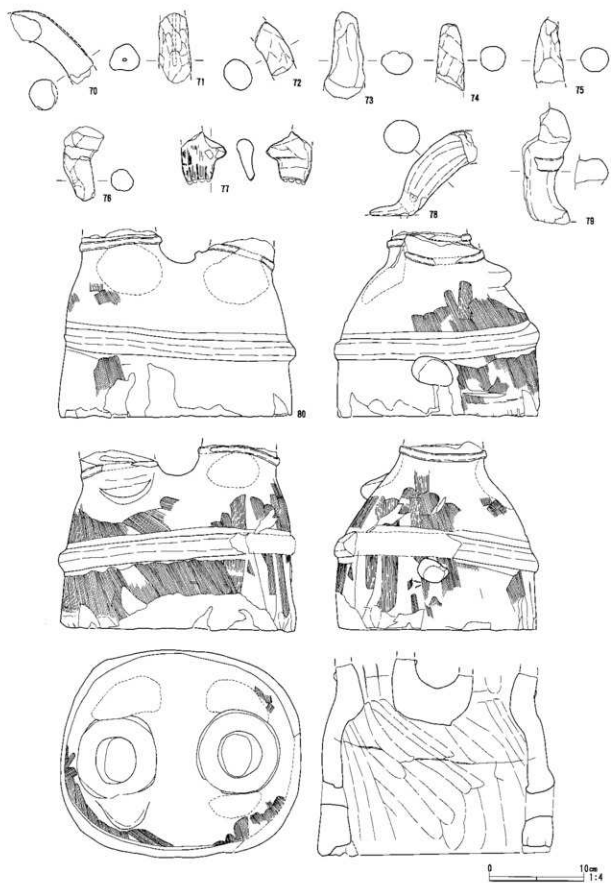


图66 三岔山9号出土形象埴輪実測图7)

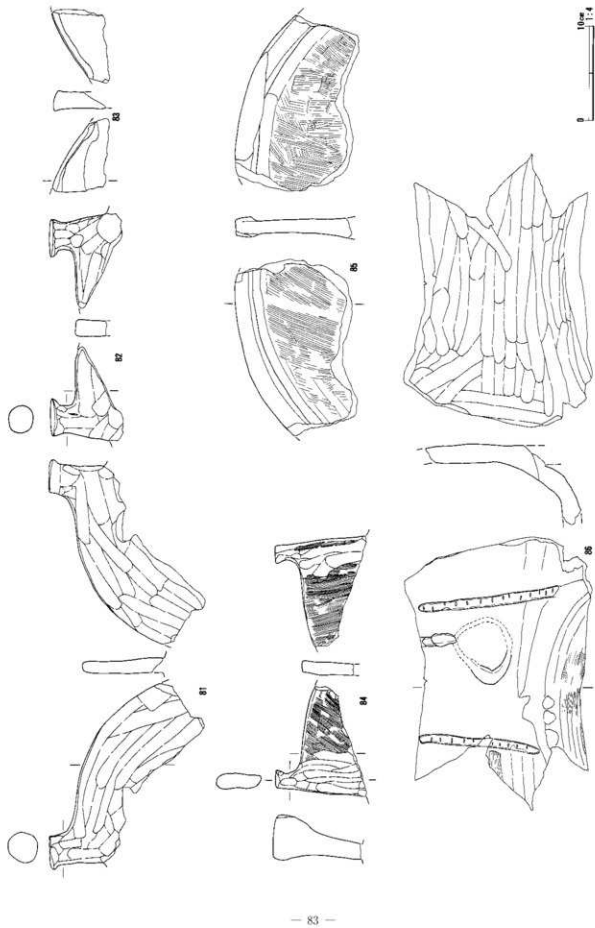


图67 三岔山9号出土形象铜簠铜盃图8

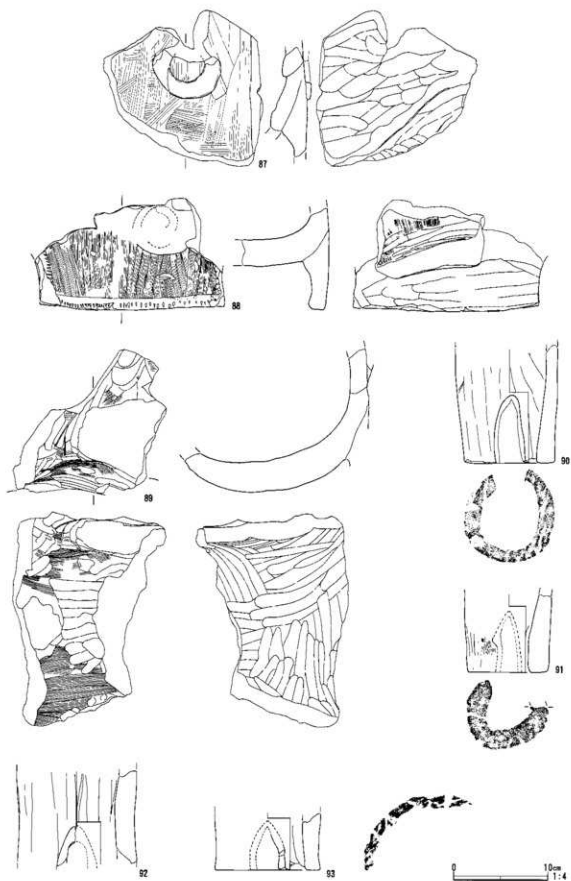


图68 三岔山9号出土形象埴輪実測图(9)

に刺突を施し、付置金具ないしは覆輪を表現している。調整は胴部内面が縦位のハケまたは横位のナデ、障泥外面が縦位のハケ、障泥内面が横位のナデとなっている。色調はいずれもにぶい明橙褐色を呈する。

89は胴部の破片で、側方は障泥の剝離痕となっている。調整は外面が縦位または横位のハケおよびナデ、内面が不定方向のナデで、色調はにぶい明褐色を呈する。

90～93は脚部の破片で、成形にはいずれも切開再接合技法を用いている。また、下端を切り込んで踵の表現がある。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が縦位のナデである。色調はいずれもにぶい明橙褐色を呈する。

94～96は胸繫から脱落した馬鐸である。下縁を弧状に成形し、表面には粘土粒を貼付している。調整は外面および端部に丁寧なナデを施し、内面は粗いナデとなっている。色調はともににぶい灰褐色を呈する。

97・98は本体から脱落した鈴である。大きさからして、97は胸繫もしくは尻繫に、98は鈴杵葉に伴っていた可能性が考えられる。ともに中実成形で、鈴口のみを表現し、調整は粗いナデを施している。色調はにぶい橙褐色を呈する。

#### 器種不明 [99～114] (図69・70、写真20)

99は縦に長い板状の破片で、枝状に分岐する部位が中間の2箇所で見られる。分岐する部位の形状は根元で破断しているため不明である。また、中間付近から下位には、中軸上に不整形の粘土紐を貼付し、補強帯としている。全体の形状は蓋の立飾りに類似する。調整は両面とも縦位のハケおよびナデで、色調はにぶい赤褐色を呈する。

100・101は中位に括れをもつ円筒状の破片で、100には括れ部とその上下に計3条、101には括れ部に1条の突帯がめぐる。調整はともに外面が縦位または斜位のハケ、内面が斜位のハケおよびナデである。色調は100がにぶい暗赤褐色、101がにぶい明橙褐色を呈する。

102・103は板状の破片で、102には2条、103には1条の突帯がめぐり、102の突帯は偏平で幅が広い。調整は102の外面が縦位のハケ、103の外面が丁寧なナデ、内面はともにやや粗い不定方向のナデを加えている。色調は双方ともににぶい橙褐色を呈する。

104は縦に長い板状の粘土を貼り合わせて成形している破片で、裏側は剝離面となっている。調整は縦位のナデで、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

105は板状の破片で、裏面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。調整は表面が縦位・横位または斜位のハケで、縁辺には丁寧なナデを施し、裏面はやや粗いナデとなっている。色調はにぶい淡褐色を呈する。

106は屈曲部をもつ円筒状の破片で、屈曲部の直下に1条の突帯がめぐらす。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が不定方向の粗いナデである。色調はにぶい褐色を呈する。

107は半管状の部品で、裏面には横方向に明瞭な剝離痕が観察される。調整は表裏面ともにナデで、裏面には一部に作業台の木目圧痕が観察される。色調はにぶい暗褐色を呈する。

108～110は板状の破片で、表裏がある。108には縦方向に1条の刻線が観察される。調整は表面が縦位または斜位のハケ、裏面が縦位または斜位のナデである。色調はにぶい褐色を呈する。

111は目と口をもつ頭部とそれに連なる胴部を表現した板状の部品で、胴部を横断するように剝離痕

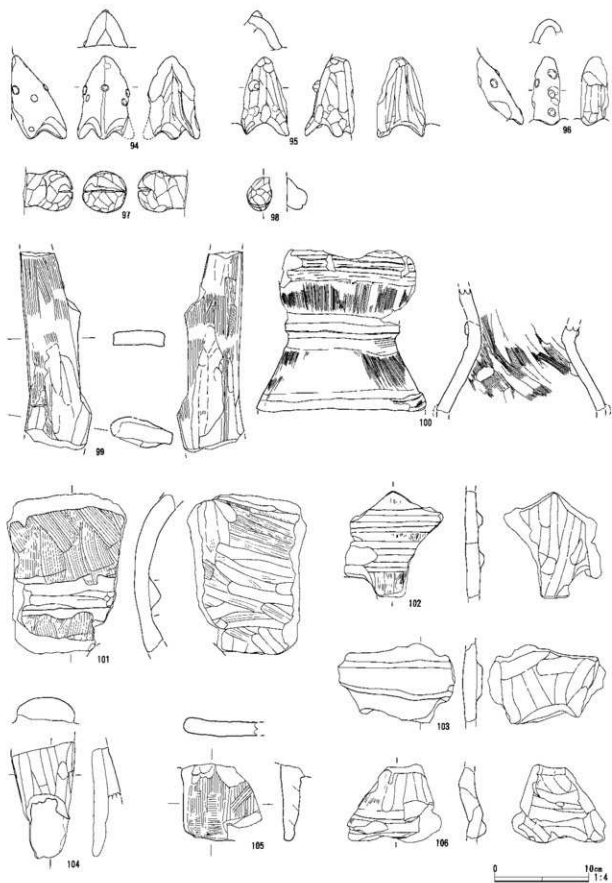


图69 三岔山9号出土形象埴轮实测图⑩

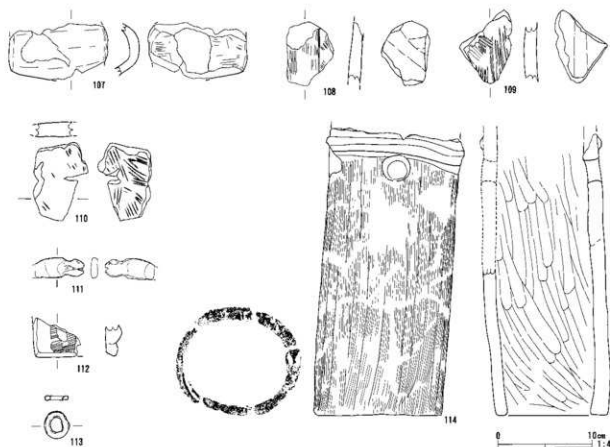


図70 三壺山9号墳出土形象埴輪実測図Ⅱ

が観察される。本来は何物かに挟まれていた状態から脱落した可能性が高い。調整は全面が丁寧なナデで、色調はにぶい淡褐色を呈する。

112は板状の破片で、裏面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。調整は表面が不定方向のハケで、縁辺にはナデを施し、裏面は粗いナデとなっている。色調はにぶい淡褐色を呈する。

113は環状の部品で、剝離痕は明瞭ではないが、人物埴輪につく耳環の可能性が考えられる。調整は丁寧なナデを施している。色調はにぶい橙褐色を呈する。

114は台部で上位に1条の突帯をめぐらせ、突帯直下には1対の円形透孔を配している。横断面はわずかに楕円形をなす。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位または斜位のナデである。色調はにぶい橙褐色を呈する。

### (3) 小 結

三壺山9号墳は三壺山7号墳とともに旭・小島古墳群では数少ない帆立貝形古墳である。円丘部の周囲が深いのに対し、突出部の周囲が浅く、幅の狭い形態は、周辺古墳群の帆立貝形古墳にもみられる。築造時期は集成8期から10期の間と推定される。

## 16 三空山14号墳

[A地点]

調査期間 平成9年1月24日～平成9年2月3日

調査面積 140㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本市市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本市市小島地内にあつて、中心をX=27,745、Y=-59,625付近におくものと推測される。北東側に三空山7号墳、東側に三空山9号墳、南西側に森西1号墳、西側に三空山が所在する。西側の周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘部分は調査時点で畑地となっており、すでに完全に削平されているものと思われる。周堀覆土は正常な層序を示さず、後世の掘削等により攪乱を受けている部分が含まれているらしい。周堀底付近には、ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

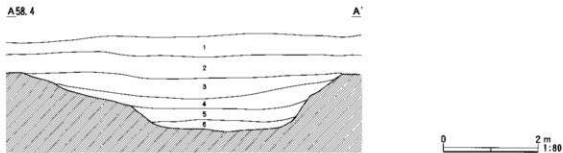
### (2) 遺物

遺物は周堀覆土上層から円筒埴輪1点のほか埴輪の小片を少量検出している。墳丘立ち上がり中段の平坦面からの出土はなく、原位置をとどめる個体は認められない。

#### a. 埴輪

円筒埴輪 [1] (図73、写真21)

円筒埴輪は2条突帯3段構成品である。外面調整は縦位のハケによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。底部調整を施していない。内面調整は第1段が斜位のナデ、第2・3段が斜位のハケとなっている。突帯に対応する箇所には指頭圧痕が目立つ。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。突帯は断面形が「M」字形を呈し、透孔は円形で、第2段に、第2突帯に接して1対を穿っている。刻線は認められない。胎土は片岩・チャートを含み、焼成は総じて良好で、色調は全体に赤褐色を示す。



三空山14号墳A地点土層説明 [A-A']

- |                     |                            |
|---------------------|----------------------------|
| 1 黒灰褐色土 粒子が粗い、しまり強。 | 4 黒灰褐色土 白色粒子を少量含む。         |
| 2 黒灰褐色土 粒子が粗い、しまり強。 | 5 黒灰褐色土 白色粒子を少量含む。         |
| 3 黒灰褐色土 As-Bを多量に含む。 | 6 黒灰褐色土 ロームブロック、白色粒子を少量含む。 |

図71 三空山14号墳土層断面図



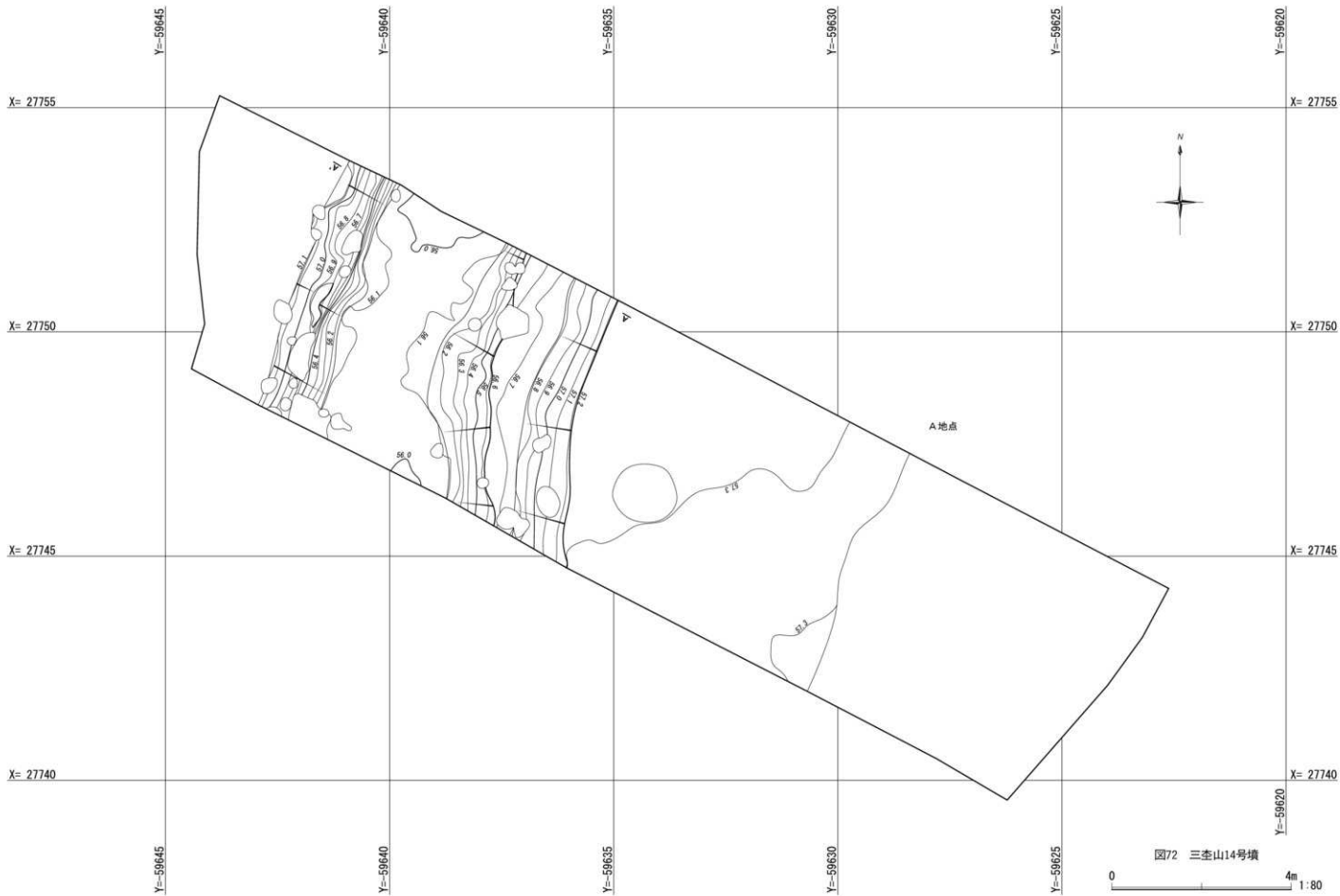


图72 三台山14号填

0 4m 1:80

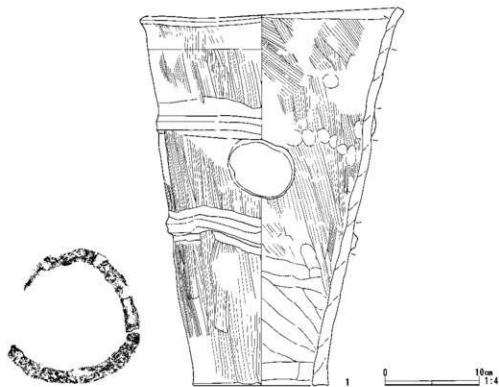


図73 三奈山14号墳出土円筒埴輪実測図

### (3) 小 結

三奈山14号墳は検出した周堀の掘り込みが深く、幅も広いことから、やや大型の円墳のようにもみえるが、東方に近接して三奈山9号墳が存在することから、直径20mを大きく超えるような規模をもつとは考え難い。

## 17 森西1号墳

〔A地点〕

調査期間 平成1年9月11日～平成1年12月25日

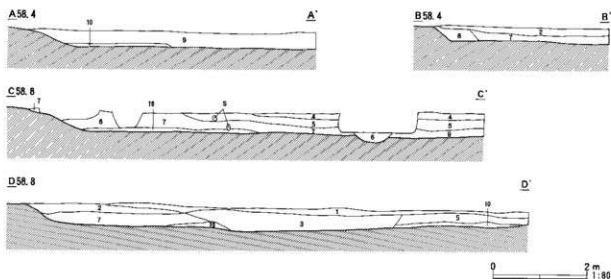
調査面積 1,000㎡

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

### (1) 遺 構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,712、Y=-59,672付近におく。北東側に三奈山14号墳、北西側に三奈山古墳が存在する。墳丘平面設計は整円をなさず、南東から北西方向にやや長い。墳丘規模は南東から北西方向で約21m、北東から南西方向で約19mを測る。墳丘盛土は完全に失われているが、確認面は墳丘の中央部分がやや高く、中心部には地山面に横穴式石室の玄室下部の礎敷がわずかに遺存している。石材は角閃安山岩を含む小型の河原石で占められている。根石はすべて撤去され、痕跡も認められない。礎敷は北東から南西方向に長軸をとることから、開口部は南西を向いていたこ



森西1号墳A地点土層説明 [A-A'・B-B'・C-C'・D-D']

- |                      |                            |
|----------------------|----------------------------|
| 1 灰褐色土               | 6 暗褐色土                     |
| 2 黒褐色土               | 7 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。      |
| 3 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。 | 8 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。       |
| 4 暗灰褐色土              | 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。      |
| 5 黒灰褐色土              | 10 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。しまり強。 |

図74 森西1号墳土層断面図

とがわかる。また、礎敷の外郭線は側面が緩やかな弧を描き、石室型式は胴張形横穴式石室であったことが推定される。

周堀は墳丘側の立ち上がりが明瞭であるのに対し、外側の立ち上がりは明瞭ではない。墳丘側の立ち上がりはローム層を掘削して成形しているが、周堀底と考えられる平坦面が広く外側へ続き、調査区内ではローム層を掘削した周堀外側の立ち上がりを確認することができない。この部分の覆土にはロームブロックを含む黒灰褐色土や暗褐色土がほぼ水平に堆積している。なお、As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

## (2) 遺物

遺物は周堀確認面および周堀覆土上層から多量の埴輪片を検出している。原位置をとどめる個体は認められない。なお、表土から金銅製耳環1点を検出している。

### a. 埴輪

#### 円筒埴輪 [1～42] (図76～79、写真22～24)

円筒埴輪は全形の判明する資料が存在しないが、細身で第1段幅の広い2条突帯3段構成品で占められる可能性が高い。外面調整はいずれも縦位のハケによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。外面の摩擦が進んでいる個体が目立つ。個体数は少ないが、8のように基部外面に板押圧による底部調整がみられる。内面調整は縦位または斜位のハケまたはナデによる。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。突帯は断面形が台形を呈するもの、「M」字形を呈するもの、三角形を呈するものなど多様である。透孔は円形に限られ第2段に一对を穿っている。刻線は最上段に「×」がみられる。胎土に片岩・チャートを含むものと角閃石を含むものが混在している。焼成は総じて良好であるが、14など還元気味の焼成状態を示す個体もわずかに認められる。色調は橙色系が主体を占める。

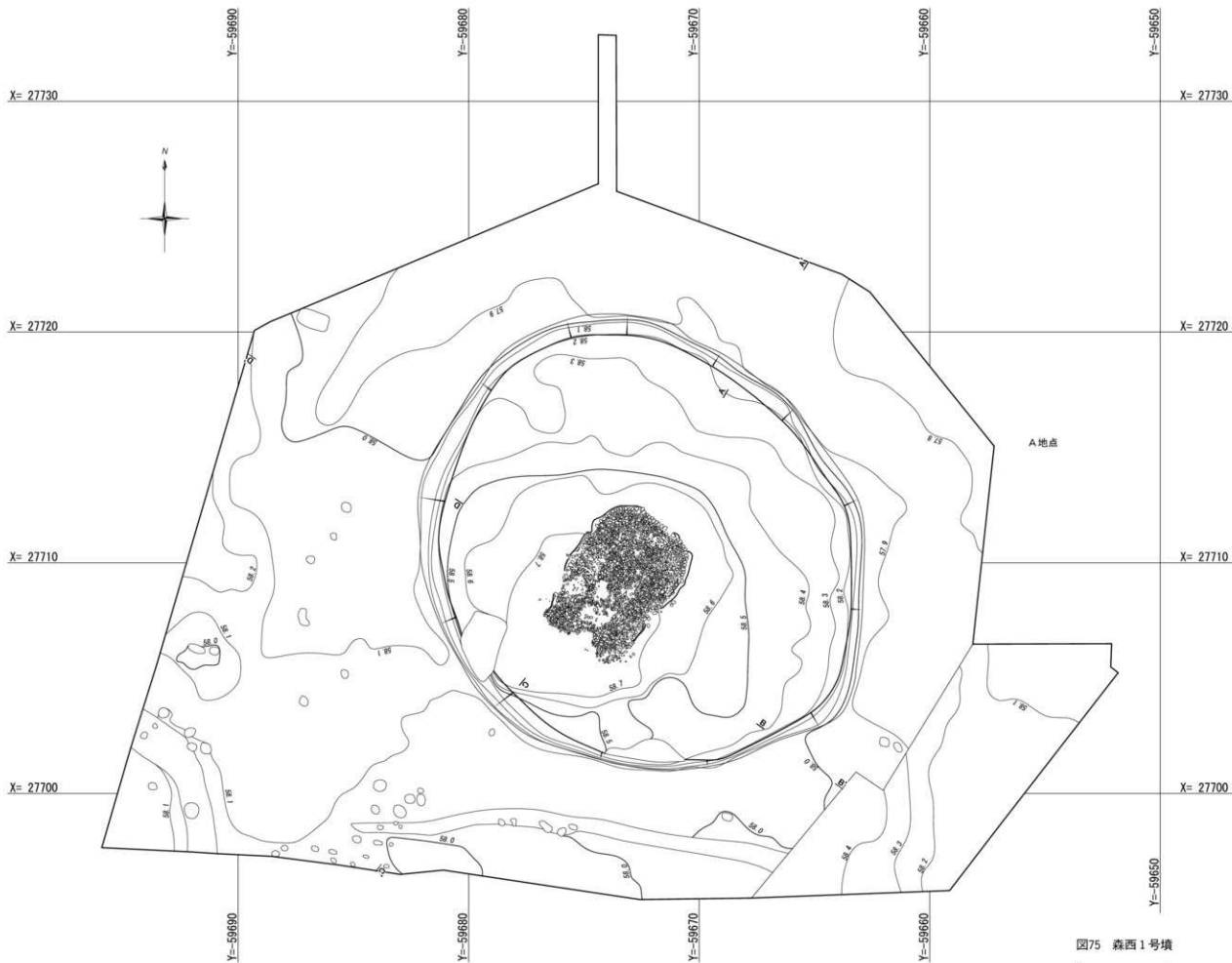


图75 森西1号墳



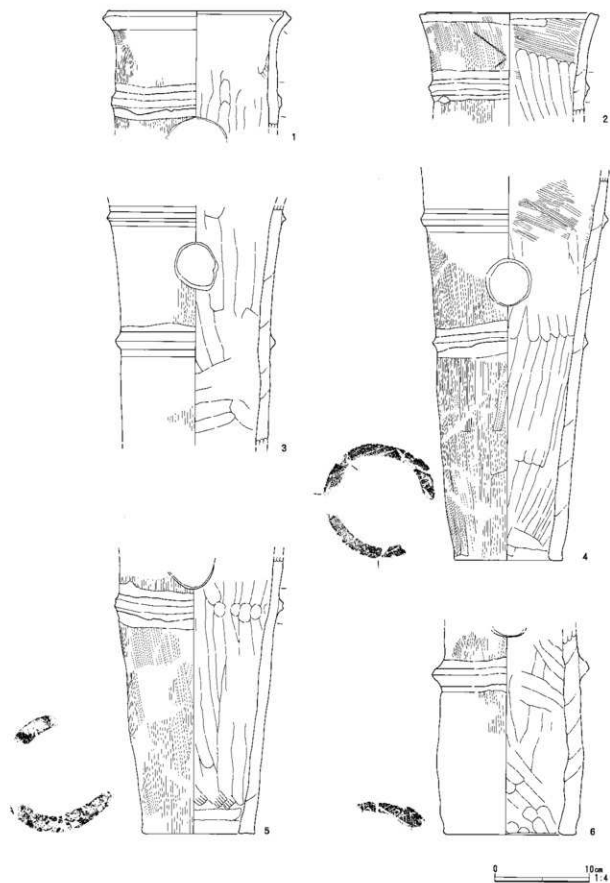


图76 森西1号填出土卣筒·朝顔形埴輪实测图1)

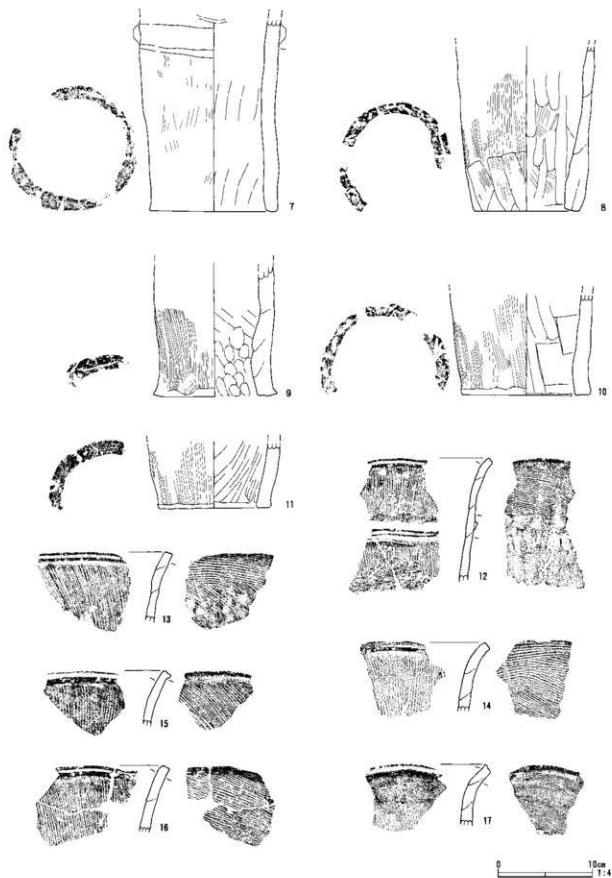


图77 森西1号填出土陶筒·朝顔形埴輪实测图2)

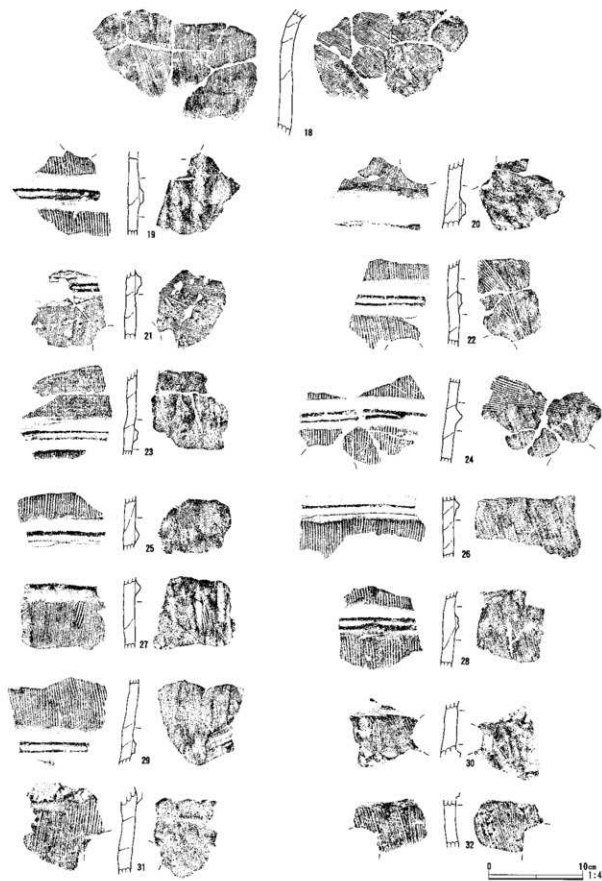


图78 森西1号填出土陶筒·朝顔形埴輪实测图3)

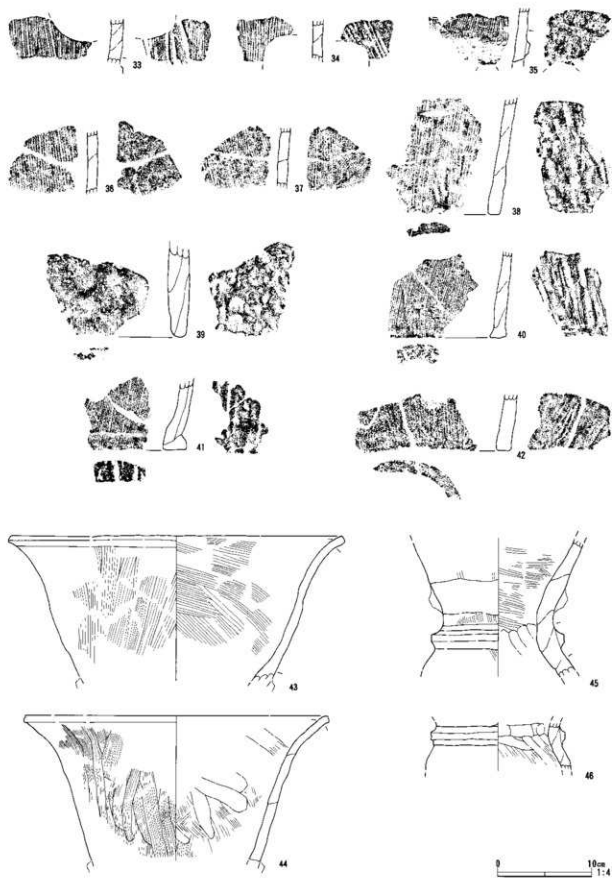


图79 森西1号填出土陶筒·朝顔形埴輪实测图4)



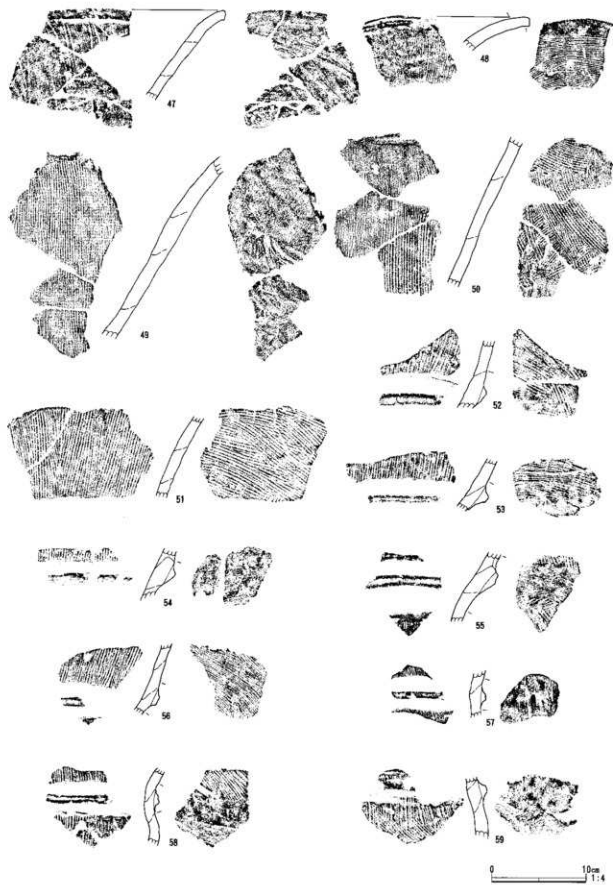


图80 森西1号填出土円筒・朝顔形埴輪实测图(5)

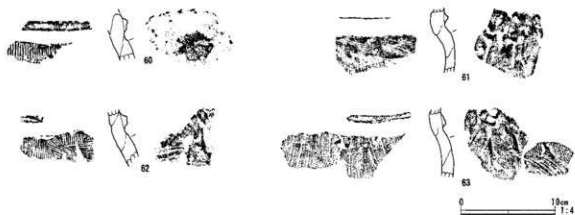


図81 森西1号墳出土土筒・朝顔形埴輪実測図(6)

朝顔形埴輪 [43~63] (図79~81、写真25・26)

朝顔形埴輪も全形の判明する資料が存在しない。胴部の破片が少なく、段構成等の詳細は不明である。肩部は緩やかに張りをもって、頸部に移行している。頸部には断面台形の太身の突帯がめぐる。口縁部は直線的に外反して立ち上がるが、頸部の直上に口縁部突帯を配している。口縁部突帯から上位は緩やかに内湾して立ち上がり、口唇近くで大きく外湾する。口唇部には端面を形成している。外面調整は肩部・口縁部とも縦位または斜位のハケである。いずれも一次調整のみで、二次調整が欠いている。内面調整は肩部・口縁部とも斜位または横位のハケおよびナデとなっている。透孔は円形が確認できる。刻線はみられない。胎土に片岩・チャートを含むものと角閃石を含むものが混在している。焼成は総じて良好で、還元気味の焼成状態を示す個体も認められない。色調は橙色系が主体を占める。

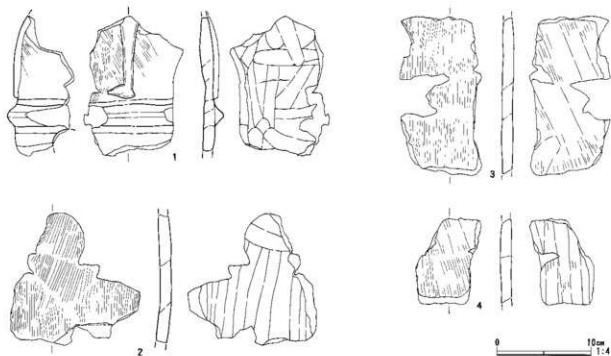


図82 森西1号墳出土土形象埴輪実測図(1)

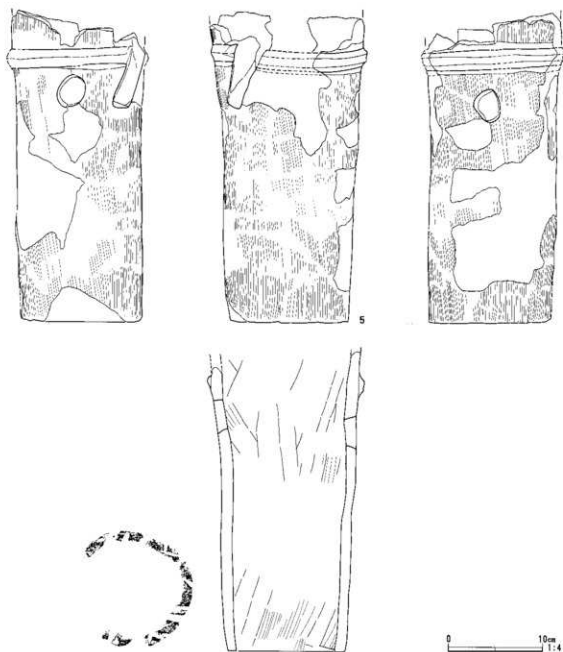


図83 森西1号墳出土形象埴輪実測図(2)

形象埴輪 [1~5] (図82・83、写真26・27)

器種不明 [1~5]

1は下方に断面台形の突帯がめぐり、突帯から上位は緩やかに張り、右上の一部は外側に向かって湾曲している。表面には下端が向かって左側に折れる粘土紐を貼付している。突帯の下位には、粘土紐と90°角度を離れた位置に円形透孔を配している。調整は外面が斜位のハケのちナデ、内面には不定方向のナデを施している。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

2は緩やかに湾曲して立ち上がる破片で、下方に円形の剝離痕が観察される。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位または斜位のナデである。胎土に角閃石を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

3・4は板状の破片である。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケまたはナデで、胎土に角閃石を含み、焼成は良好で、色調は3が明黄褐色、4が橙色を呈する。

5は形象埴輪の上部で、上位に断面台形の突帯がめぐり、突帯から斜め下方に向かって、幅広い粘土紐を貼付している。突帯の下方にはやや離れて一対の円形透孔を配している。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位または斜位のナデである。胎土に角閃石を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

#### b. 金属製品 [1] (図84、写真27)

##### 耳環 [1]

銅芯金箔張製で、太さ0.7cm、外径3.1cm×3.4cmの耳環である。外側の金箔はほとんど剥落している。重さ30.42gを測る。

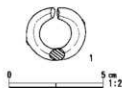


図84 森西1号墳出土金輪実測図

##### (3) 小 結

森西1号墳は墳丘こそ小規模ながら、埋葬施設に角閃石安山岩使用の胴張形横穴式石室を備え、豊富な埴輪を樹立していることが明らかとなった。周堀外側の立ち上りが確認できていないことは疑問点として残る。築造年代は円筒埴輪の第1段幅が伸長していること、埋葬施設に胴張形横穴式石室を導入していることから集成10期後半と推定される。

## 18 森西2号墳

### [A地点]

調査期間 平成3年1月8日～平成3年1月20日

調査面積 250m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [B地点]

調査期間 平成4年6月16日～平成4年6月20日

調査面積 270m<sup>2</sup>

調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### [C地点]

調査期間 平成5年4月7日～平成5年4月21日

調査面積 900m<sup>2</sup>

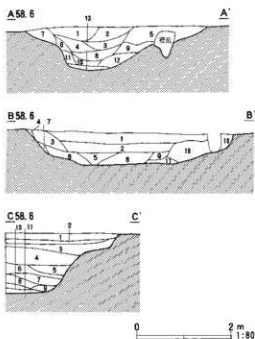
調査原因 個人住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

#### (1) 遺 構

本庄市下野堂地内にあって、中心をX=27,702、Y=-59,732付近におく。北東側に三奈山古墳が





森西2号墳B地点土層説明【A-A'】

- 1 黒灰褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含み、斑状に堆積する。
- 2 黒灰褐色土 ロームブロックを少量、暗褐色土ブロックを多量に含み、斑状に堆積する。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 8 灰褐色土 ロームブロック、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 9 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

- 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に、暗褐色土ブロックを少量含む。
- 12 黄褐色土 ロームブロックを多量に、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 13 黄褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含み、斑状に堆積する。

森西2号墳A地点土層説明【B-B'】

- 1 黒灰褐色土
- 2 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 10 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、黒褐色土ブロックを少量含む。

森西2号墳C地点土層説明【C-C'】

- 1 黒褐色土 粘性・しまりとも弱。
- 2 黒灰褐色土 粘性弱。
- 3 暗灰褐色土 粘性弱。
- 4 黒灰褐色土
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含み斑状に堆積する。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 黄褐色土 ロームブロックを多量に含み斑状に堆積する。

図86 森西2号墳土層断面図

所在する。東西の周堀の一部を検出した。墳丘部分の形状はほとんど確認できないが、A・B両調査地点で検出した周堀外側の立ち上がりや、A地点でわずかに検出された墳丘の立ち上がりが円形をなすことから墳形は円墳と考えられる。墳丘の残存状況は不明であるが、ふたつの調査区の中間は、調査時点で畑地となっており、墳丘はすでに削平されているものと思われる。

周堀は南側中央に途切れる箇所が存在するらしい。確認面で幅3.8~4.5mを測り、深さは地点により異なり、60から120cmと高低差が大きい。周堀底は深い箇所ではほぼ平坦で、安定しているのに対し、浅い箇所では船底状を呈し緩やかに起伏している。周堀覆土の堆積状況は地点により異なるが、総じて上層にロームブロックを含む黒褐色土または灰褐色土、下層にロームブロックを含む褐色土または黄褐色土がみられる。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

## (2) 遺物

遺物は周堀確認面上層および周堀覆土から多数の土師器片を検出している。土師器はいずれも坏で

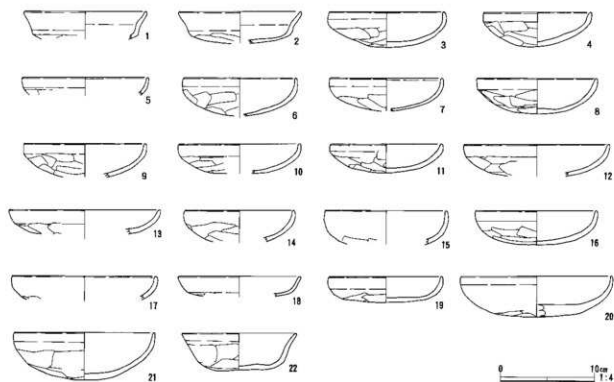


図87 森西2号墳出土土器実測図

森西2号墳出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 11.0 底径 — 器高 5.2	口縁部は体部との境に稜を持ち、 外反して開く。口縁端部はわずかに 内湾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。	石英・黒色粒 内外一色	口縁～体部片。
2	土師器 環	口径 (12.7) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に稜を持ち、 外反して開く。口縁端部はわずかに 内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨ コナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外一色	1/6。
3	土師器 環	口径 12.7 底径 — 器高 3.7	体部は丸みを持ち、口縁部はやや 内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ後弱いナデ。内面一口縁 部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内外一色	2/3。
4	土師器 環	口径 (11.1) 底径 — 器高 3.6	口縁部は体部との境に強い稜を持 ち、やや外傾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ後弱いナデ。内面一口縁 部～底部ナデ。	石英・角閃石 内外一色	1/2。
5	土師器 環	口径 (13.1) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に強い稜を持 ち、やや外傾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ。内面一摩耗のための調整不明瞭。	石英・角閃石 内外一色	口縁～体部片。
6	土師器 環	口径 (11.8) 底径 — 器高 (4.0)	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ後弱いナデ。内面一口縁 部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内外一色	1/4。
7	土師器 環	口径 (11.8) 底径 — 器高 (3.5)	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ後弱いナデ。内面一口縁 部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内外一色	1/4。
8	土師器 環	口径 12.6 底径 — 器高 3.8	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨ コナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外一にふい赤褐色	5/6。
9	土師器 環	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は直立 気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨ コナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外一にふい褐色	1/3。
10	土師器 環	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨ コナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外一にふい褐色	1/4。

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	土師器 環	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.0	体部は丸みを持ち、口縁部は短く内湾気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外—橙色	2/3。
12	土師器 環	口径 (15.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部はやや湾曲して開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外—橙色	1/5。
13	土師器 環	口径 (15.8) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部はやや湾曲して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内—橙色 外—にぶい橙色	1/6。
14	土師器 環	口径 (11.3) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外—にぶい橙色	1/4。
15	土師器 環	口径 (12.7) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部ナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外—にぶい橙色	1/4。
16	土師器 環	口径 (12.6) 底径 — 器高 3.6	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～底部ナデ。	石英・角閃石 内外—橙色	3/4。
17	土師器 環	口径 (15.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。	石英・黒色粒 内外—橙色	1/8。
18	土師器 環	口径 (12.8) 底径 — 器高 —	口縁部はわずかに丸みを持って外傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。	石英・角閃石 内外—橙色	口縁部片。
19	土師器 環	口径 (11.8) 底径 — 器高 2.7	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底気味の丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後弱いナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外—橙色	1/2。
20	土師器 環	口径 (15.7) 底径 — 器高 4.3	体部は丸みを持って立ち上がり、内湾する口縁部に至る。底部は丸底で内厚。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部ナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外—にぶい橙色	1/4。
21	土師器 環	口径 12.4 底径 — 器高 4.4	体部は丸みを持ち、口縁部はわずかに内湾する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外—橙色	3/4。
22	土師器 環	口径 12.0 底径 5.5 器高 3.9	口縁部は外反して開く。底部は平底だが体部との境は不明瞭。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内外—橙色	2/3。

残存率 1/2 以下の小片が多い。埴輪は出土していない。

## a. 土 器

### 土師器 (図87、写真27)

#### 環 [1～22]

1・2は体部と口縁部の境界に稜をもち、口縁部は外湾気味に立ち上がる。調整は体部外面がヘラケズリ、口縁部内外面には横位のナデを施している。色調は橙色を呈する。3～21は底部が丸底で、体部から口縁部へは湾曲しながら立ち上がる。調整は体部外面がヘラケズリ、口縁部内外面には横位のナデを施している。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈する。22は平底の底部をもち、明瞭な境界を形成せず体部へ移行し、口縁部が緩やかに外湾している。調整は底部から体部外面がヘラケズリのものナデ、口縁部内外面には横位のナデを施している。色調は橙色を呈する。

#### (3) 小 結

森西2号墳はA地点で検出された埴輪の立ち上がりや周堀の規模・形状から径15m程度の円墳であったと考えられる。築造時期は、埴輪が全く検出されていないことから、終末期段階まで下る可能性が高い。



## 19 森ノ下1号墳

[A地点]

調査期間 平成3年3月19日～平成3年4月3日

調査面積 625㎡

調査原因 区画整理に伴う調整池建設

調査担当 本市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### (1) 遺構

本市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,555、Y=-59,490付近におくものと推測される。北西側から北側にかけての周堀の一部を検出したのみで、墳丘形態・規模は不明である。墳丘盛土は旧表土とともに完全に失われ、表土が直接ローム層を被覆する状態で、埋葬施設の形式も不明である。墳丘部には周堀と平行するように凹弧を描く溝状の攪乱が存在する。かつて残存していた墳丘中心部分の裾をめぐる根切り溝であったと思われる。

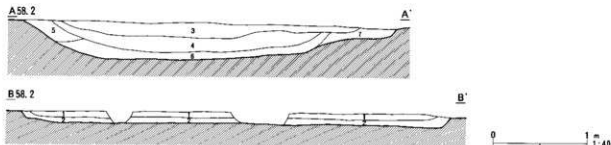
周堀は幅が一定せず、確認の範囲で最大約5m以上を測る。西側が最も広く、北側に向かって徐々に幅を減じ、北東側では途切れる箇所が存在する。堀底までの深さは、堀幅とは逆に西側が浅く、北側には土坑状の落ち込みがあって、この部分が最も深く、掘削はローム層下の白色粘質土層の上面にまで及んでいる。確認面からの深さ40cmを測る。周堀覆土の堆積状況は地点により異なる。周堀西側の覆土には、全体にロームブロックを多量に含む傾向が顕著で、上層に黒灰褐色土、下層に暗褐色土の堆積がみられる。これに対し、北側の土坑状部分では、ロームブロックの混入状況がやや相違し、上層に黒灰褐色土、中層にロームブロックを少量に含む灰褐色土、下層にロームブロックを多量に含む褐色土がみられる。As-B・Hr-FAの堆積はともに確認できない。

### (2) 遺物

遺物は出土していない。

### (3) 小 結

森ノ下1号墳は検出された墳丘の立ち上がりの状況から径15m前後の円墳であったと考えられる。築造時期は、周堀が不整形を呈することや埴輪が全く検出されていないことから、終末段階まで下る可能性が高い。



森ノ下1号墳A地点土層説明【A-A'・B-B'】

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒灰褐色土
- 4 灰褐色土 ロームブロックを少量含む。

- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。黒褐色土ブロックを少量含む。

図88 森ノ下1号墳土層断面図

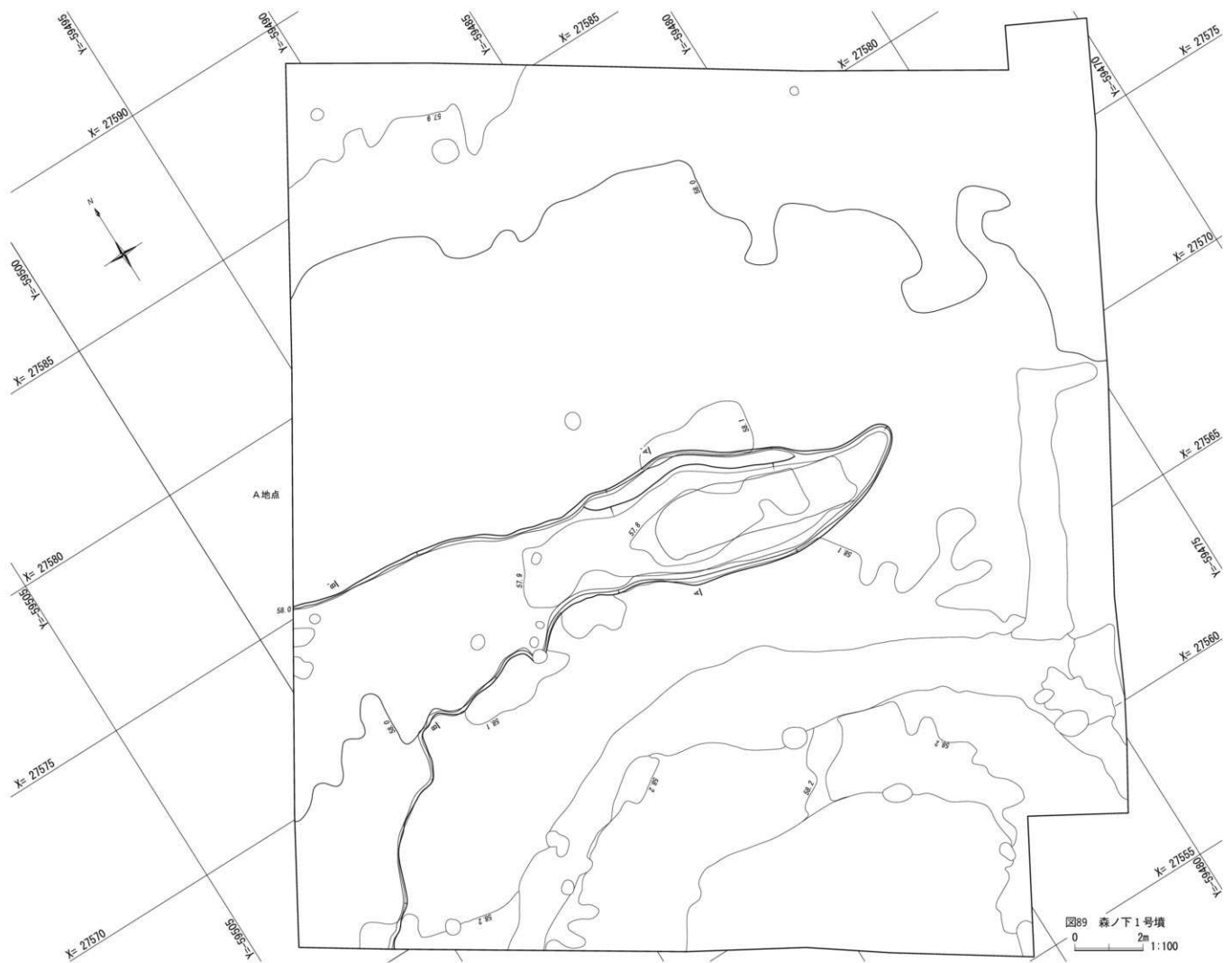


図89 森ノ下1号墳

0 2m 1:100

## IV 結 語

本書には旭・小島古墳群の南西側にあたる杉ノ根・屋敷内地区と、古墳群中央よりの三奈山・森西・森ノ下地区で実施した調査の結果を掲載した。いずれの古墳も埋葬施設までほぼ完全に破壊されていたが、確認された遺構・遺物に関し、留意すべき二、三の点について触れておきたい。

三奈山8号墳では幅4m足らずの非常に限定された調査範囲から男女の人物、盾持人物、馬などの埴輪片が多量に出土している。墳丘規模は不明であるが、堀幅は確認面で8m以上と広く、直径10数m程度の一般的な小型円墳とは異なる比較的大きな規模の墳丘をもっていたことが推測される。埼玉県内で群集墳に埴輪が導入されるようになるのは集成7期からで、群集墳形成の盛行とともに埴輪をもつ古墳も急増し、集成8期には小型円墳においても家、人物、馬の組み合わせを基本とした形象埴輪の樹立が珍しくない。しかし、三奈山8号墳のように多量の形象埴輪を伴う場合は、集成7期の生野山9号墳、集成8期の東五十子23号墳など、群集墳内でも中核的な存在の墳丘径30~40m台の古墳に限られるようで、三奈山8号墳についても、直径30m前後を測るやや大型の円墳または帆立貝形古墳の可能性が高いといえる。

三奈山8号墳出土の形象埴輪で注目されるのは、武装人物埴輪に表現された防具であろう。冑は肩庇付冑に類する表現で、衝角部をもたず、横矧の地板を鋸で接続した表現がみられる。額部全面から顔面の左右にかけては一連の底状突起がめぐり、頭頂部に短い管状の器物を表現している。型的には埼玉稲荷山古墳出土の武装人物埴輪に表現された冑に酷似する。現在、埼玉稲荷山古墳の出土資料には、頭頂部の管状器物をみることはできないが、同資料の頭頂部にも円形の小孔があり、小孔の周囲には剝離痕が観察されることから、三奈山8号墳の武装人物の冑と同形の管状器物が表現されていた可能性が高い。

一方、肩甲状の防具は、刻線を放射状に配し、細板を接続した状態を表現している。背面から両肩前方にかけてを覆い、前胸部分が広く開く特異な形状をもち、古墳副葬品として出土する鉄製武器のなかには実在しない型式である。また、胸部前面には円錐状の粘土塊を貼付した乳房状の表現があり、一個体中では確認できていないが、本来は左右一対で存在した可能性が高い。通常の人物埴輪であれば、胸部前面の円錐状粘土塊は乳房表現であり女子人物像の認定要素である。

さらに、胴部に関しては短甲、挂甲その他武器の表現はおこなわれていないらしく、そうであるとすれば、武装人物埴輪としてはきわめて特異な存在といえ、肩甲状防具の型式、人物の性別の問題とともに今後に検討の余地を残している。

三奈山9号墳は西側に隣接する三奈山7号墳とともに、旭・小島古墳群の中では数少ない帆立貝形古墳である。遺物は土師器・須恵器・各種埴輪を出土し豊富であるが、調査区内部は擾乱が著しく、古墳本来の築造時期に前後する段階の遺物が混入している可能性は考えておく必要がある。

屋敷内3号墳では、墳丘裾部に1条の狭い溝がめぐり、この溝と重複して一定の間隔で連続するピットが検出された。ピットの内部を含め、墳丘裾部、周堀内において遺物はまったく検出されていないが、ピットは柱状の器物を樹立するのに十分な深さがあり、木製樹物など何らかの柱状裝飾物の存在が推測される。







番号	法		直径 (mm)		実径	深さ	第1段第2段第3段第4段	幅	高さ	選孔	口部調整	外面調整		内面調整		底面	色調	観察	備考
	口徑	底径	調整	調整								調整	調整	調整	調整				
	mm	mm	(1/20)	(1/20)								mm	mm	mm	mm				
9	—	(15.6)	—	15.4	—	—	—	—	2.2 0.3	—	—	1次チタハテ	9本	チタハテ・チタハテ	—	—	良好	15%	チタハテ・酸洗の汚染を含む。
10	—	(16.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	18本	チタハテ	—	—	良好	10%	汚染・チタハテを含む。
11	—	9.4	(17.3)	—	—	—	—	—	1.8	—	—	1次チタハテ	10本	チタハテ・チタハテ・木目 チタハテ・チタハテ・粗面風	—	—	良好	30%	汚染・チタハテを含む。
12	—	9.2	—	12.3	—	—	—	—	2.3 0.5	—	—	1次チタハテ	12本	鉄研圧 チタハテ・チタハテ・チタハテ	—	布	良好	50%	小部品。 汚染・チタハテを含む。
13	—	(15.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	10~11本	チタハテ・粗研圧 風	—	—	良好	10%	粗研チタハテを含む。
14	—	(16.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	7本	チタハテ	—	—	良好	10%	粗研チタハテを含む。
15	—	12.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	17本	チタハテ	—	—	良好	10%	粗研チタハテを含む。
16	—	(14.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	調整するが1次 チタハテ	10本	チタハテ	—	—	良好	5%	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	20本	チタハテ	—	—	良好	—	粗研チタハテを含む。
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	調整するが1次 チタハテ	12~15本	粗研のため不明 磨	—	—	良好	—	チタハテ・酸洗の汚染を含む。
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	6本	チタハテ	—	—	良好	—	汚染・チタハテを含む。
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次チタハテ	5本	チタハテ	—	—	良好	—	黄色汚染の粗研あり。 汚染・チタハテを含む。
21	—	—	—	—	—	—	—	—	2.1 0.6	—	—	調整するが1次 チタハテ	20本	チタハテ	—	—	良好	—	粗研・白色研を含む。
22	—	—	—	—	—	—	—	—	2.0 0.5	—	—	調整するが1次 チタハテ	30~25本	チタハテ	—	—	良好	—	—
23	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2 0.4	—	—	粗研のため不明 磨	—	チタハテ	—	—	良好	—	粗研の汚染・チタハテを含む。
24	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2 0.3	—	—	1次チタハテ	5本	チタハテ後ナ テ	—	—	良好	—	汚染・チタハテを含む。
25	—	—	—	—	—	—	—	—	1.5 0.4	円	—	1次チタハテ	9本	ハテ後ナテ	—	—	良好	—	汚染・チタハテを含む。
26	—	—	—	—	—	—	—	—	2.0 0.4	—	—	1次チタハテ	8本	チタハテ後ナ テ	—	—	良好	—	粗研・白色研を含む。
27	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2 0.7	—	—	粗研のため不明 磨	—	チタハテ	—	—	良好	—	—
28	—	—	—	—	—	—	—	—	1.4 0.4	—	—	1次チタハテ	6本	ハテ後ナテ	—	—	良好	—	汚染・チタハテを含む。
29	—	—	—	—	—	—	—	—	1.9 0.4	—	—	1次チタハテ	6本	チタハテ後ナ テ	—	—	良好	—	汚染・チタハテを含む。





番号	法				実高	実径	選孔	口輪部 調整	外周調整		内周調整		底面 形状	色調	観察 状態	備考			
	口径	底深	法						調整	調整	調整	調整					調整	調整	調整
			第1段	第2段															
3	—	—	(13.0)	—	2.9 0.5 (円)	—	1次テハ少	—	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	巻き	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			
4	—	11.5	—	22.0	13.0	—	1次テハ少	—	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	右	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
5	—	12.1	—	24.4	—	1.8 0.5 円	—	1次テハ少	—	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	右	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
6	—	(14.0)	—	18.4	—	3.3 1.1 (円)	—	1次テハ少	—	テハテハテハテハ テハテハ	テハテハテハテハ テハテハ	—	—	—	良好	テート・濃緑の片を含む。			
7	—	(15.5)	—	(16.3)	—	—	—	(1次テハ少)	—	(テハテハ)	—	左	—	—	良好	内周面とも裏面が滑しい。 片石・テートを含む。			
8	—	11.9	—	—	—	—	1次テハ少	8本	板厚正 テハテハ	テハテハテハ テハテハ	テハテハテハ テハテハ	右	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
9	—	(13.2)	—	—	—	—	1次テハ少	9本	法調 テハテハ	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	テート・濃緑の片を含む。			
10	—	12.5	—	—	—	—	1次テハ少	8本	—	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			
11	—	(11.4)	—	—	—	—	1次テハ少	7本	テハテハテハ テハテハ	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
12	—	—	—	—	1.3 0.4	—	1次テハ少	11本	—	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
13	—	—	—	—	(6.9)	—	1次テハ少	10本	—	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
14	—	—	—	—	—	—	1次テハ少	8~9本	—	テハテハテハ テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			
15	—	—	—	—	—	—	1次テハ少	8~11本	—	テハテハ少	—	—	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
16	—	—	—	—	—	—	1次テハ少	8~10本	—	テハテハ少	—	—	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			
17	—	—	—	—	—	—	1次テハ少	14本	—	テハテハ少	—	—	—	—	良好	テート・濃緑の片を含む。			
18	—	—	—	—	—	—	1次テハ少	14~15本	—	テハテハ少 テハテハ	テハテハ少 テハテハ	—	—	—	良好	テート・濃緑の片を含む。			
19	—	—	—	—	2.0 0.4 (円)	—	1次テハ少	7本	—	テハテハ	—	—	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			
20	—	—	—	—	2.7 (円)	—	1次テハ少	14本	—	テハテハ	—	—	—	—	良好	テート・濃緑の片を含む。			
21	—	—	—	—	2.2 0.6 円	—	1次テハ少	13~14本	—	テハテハ テハテハ	テハテハ テハテハ	—	—	—	良好	片石・濃緑の片を含む。 外周面・テートを含む。			
22	—	—	—	—	1.8 0.4 円	—	1次テハ少	9本	—	テハテハ テハテハ	テハテハ テハテハ	—	—	—	良好	同径石(山形)を含む。			
23	—	—	—	—	1.8 0.4	—	1次テハ少	9本	—	テハテハ テハテハ	テハテハ テハテハ	—	—	—	良好	同径石・白色色を含む。			



番号	法		尺 寸 (mm)		実 効 幅 (mm)	選 孔 形 態	口 縁 部 調 整	外 面 調 整		内 面 調 整		底 部 形 状	色 調	質 量 率	備 考	
	口 径	底 深	調 整 第 1 段	調 整 第 2 段				調 整 第 3 段	調 整 第 4 段	調 整 第 1 段	調 整 第 2 段					調 整 第 3 段
45	—	①	②	③	④	2.9 0.8	—	—	1次チハ少	8本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 片割、チナーを食む。
46	—	①	②	③	④	2.4 0.7	—	—	層割のため不明	—	—	—	—	—	—	調整形良質品。 5% 向戻り又は片割を食む。
47	—	①	②	③	④	—	—	—	1次チハ少	(7本)	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
48	—	①	②	③	④	—	—	—	1次チハ少	10本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 チナー、チナー、濃量の片割を食む。
49	—	①	②	③	④	—	—	—	1次チハ少	8本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
50	—	①	②	③	④	—	—	—	1次チハ少	8~12本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
51	—	①	②	③	④	—	—	—	1次チハ少	7本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
52	—	①	②	③	④	2.2 0.6	—	—	1次チハ少	5~6本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
53	—	①	②	③	④	2.2 1.0	—	—	1次チハ少	8本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 片割、チナーを食む。
54	—	①	②	③	④	2.8 0.8	—	—	1次チハ少	9本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
55	—	①	②	③	④	3.5 0.7	—	—	1次チハ少	—	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
56	—	①	②	③	④	2.3 0.5	—	—	1次チハ少	10本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
57	—	—	—	—	—	1.9 0.5	—	—	1次チハ少	12本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
58	—	①	②	③	④	2.4 0.6	—	—	1次チハ少	8~9本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
59	—	①	②	③	④	2.9 0.7	—	—	1次チハ少	8本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 チナー、チナー、濃量の片割を食む。
60	—	①	②	③	④	1.7 0.5	—	—	1次チハ少	8本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 片割、チナーを食む。
61	—	①	②	③	④	1.7 0.5	—	—	1次チハ少	(7本)	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。
62	—	①	②	③	④	1.9 0.7	—	—	チハ少	10本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 チナー、チナー、濃量の片割を食む。
63	—	①	②	③	④	1.7 0.4	—	—	1次チハ少	11~14本	—	—	—	—	—	調整形良質品。 向戻り、白色品を食む。

## 【文 献】

- 江原昌俊・大谷 徹 2005 「北武蔵における古墳時代中期群集墓の形成」『考古学ジャーナル』4月号 (No528) ニューサイエンス社 東京 pp.16-18.
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』山川出版社 東京 pp.24-26.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 『有勝寺北裏遺跡』有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 恋河内昭彦 1996 「第V章まとめ」『辻堂遺跡Ⅰ—県営水田農業確立排水対策特別事業（やばり川地区）に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書—』見玉町文化財調査報告書第19集 見玉町教育委員会 見玉 pp.63-90.
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北堀前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄.
- 中村倉司 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.91-118.
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8・9.
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 太田博之 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書V—公御塚古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之 2001 「旭・小島古墳群—前の山古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第23集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之 2004 「旭・小島古墳群—上前原1～3・5～11号墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第27集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之・松本 完・的野善行 2006 「旭・小島古墳群—林地区Ⅰ—」本庄市埋蔵文化財調査報告第3集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之 2007 「旭・小島古墳群—林地区Ⅱ—」本庄市埋蔵文化財調査報告第6集 本庄市教育委員会 本庄.
- 大谷 徹 1998 「新屋敷遺跡D区」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里.
- 坂本和俊 1986 「埼玉における前期古墳の形成」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室 浦和 pp.204-207.
- 埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」浦和.
- 菅谷浩之 1984 「北武蔵における古式古墳の成立—見玉地方からみた北武蔵の古式古墳—」見玉町史料調査報告書 古代第1集 見玉町教育委員会・見玉町史編纂委員会 見玉.
- 杉山晋作・太田博之 2005 「関東における古墳時代中期群集墓の墓制変容」『考古学ジャーナル』4月号 (No528) ニューサイエンス社 東京 pp.3・4.
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第五巻近畿Ⅰ pp.325-350, 角川書店 東京.

# 写 真



杉ノ根2号墳A地点・杉ノ根3号墳A地点  
周堀検出状況 [北東から]



杉ノ根4号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]



杉ノ根5号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]



杉ノ根5号墳B地点 周堀検出状況 [北東から]



杉ノ根6号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]



杉ノ根7号墳A地点 周堀検出状況 [東から]



杉ノ根8号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]



杉ノ根9号墳A地点 石室根石検出状況 [南から]

## 写真2



屋敷内1号墳A地点 調査区全景 [南西から]



屋敷内2号墳A地点 周堀検出状況 [北から]



屋敷内3号墳B地点 周堀検出状況 [南東から]



三ヶ山9号墳A地点 周堀検出状況 [南西から]



三ヶ山14号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]



森西1号墳A地点 周堀検出状況 [北東から]



森西2号墳B地点 周堀検出状況 [東から]



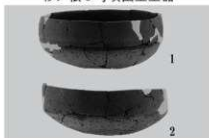
森西2号墳C地点 周堀検出状況 [北東から]



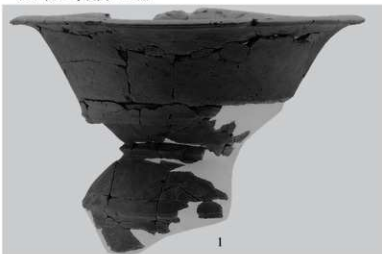
杉ノ根2号墳出土土器



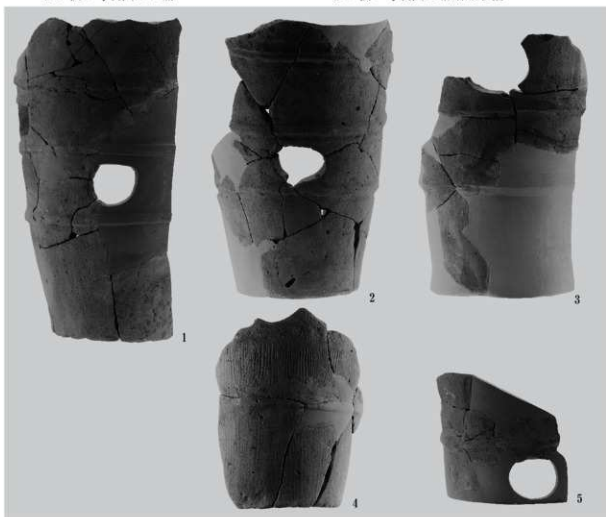
杉ノ根5号墳出土土器



杉ノ根7号墳出土土器



杉ノ根7号墳出土朝顔形埴輪



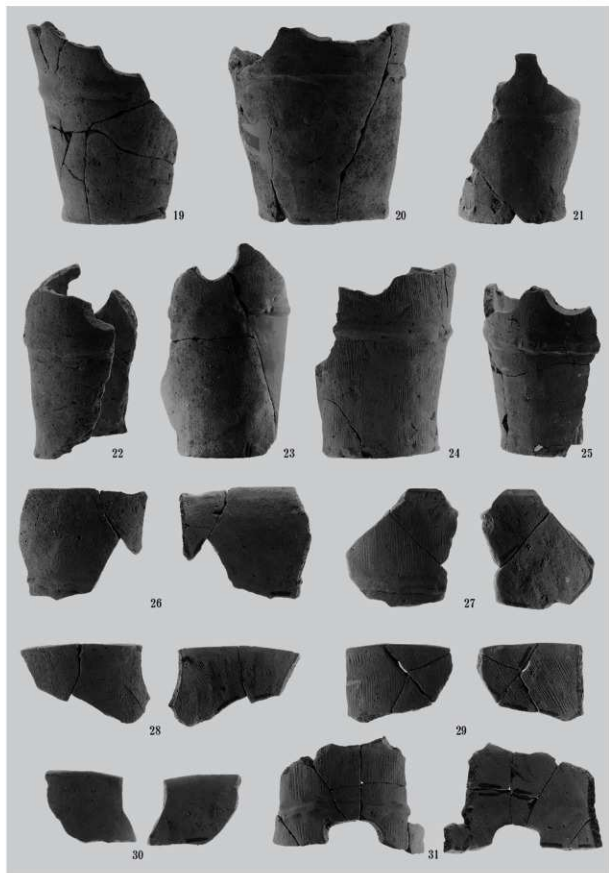
三奈山8号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)



写真4



三空山8号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)

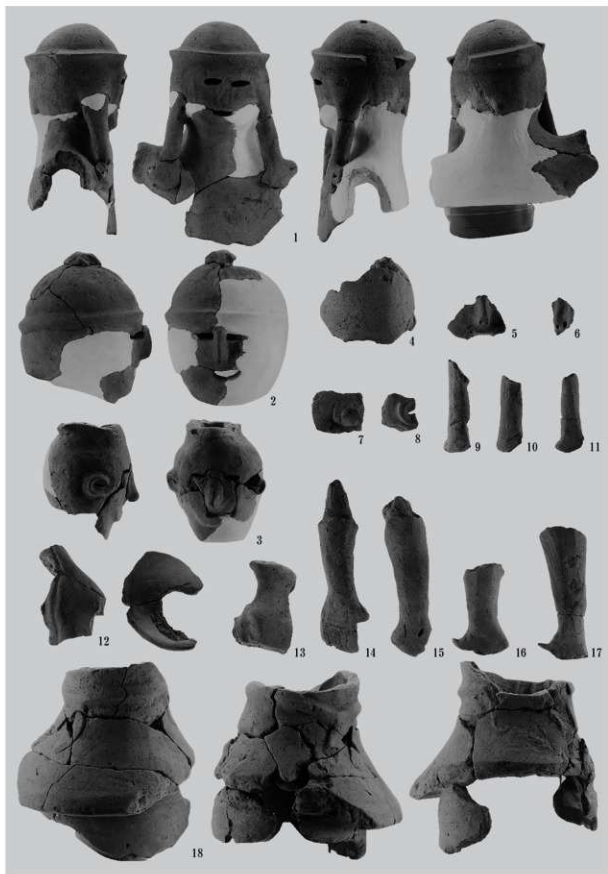


三空山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)

写真6

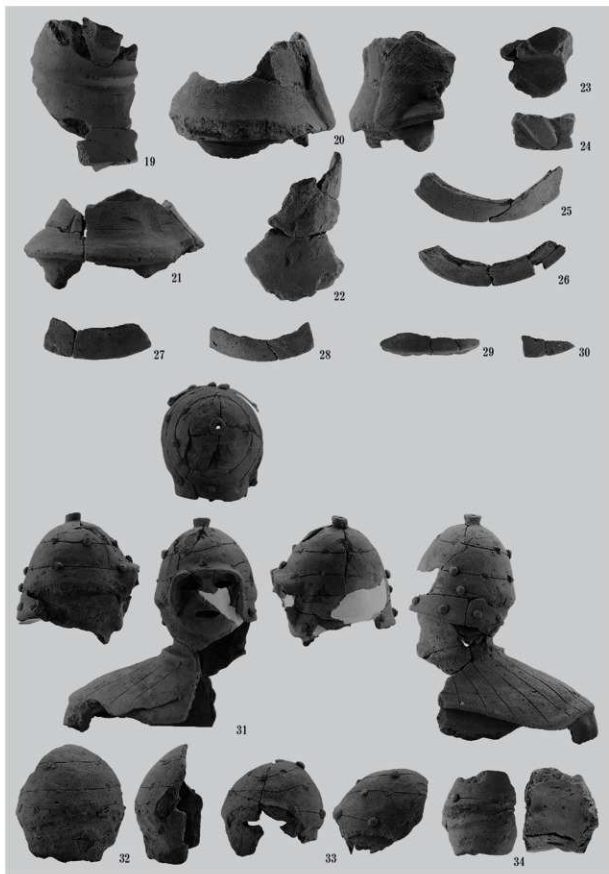


三空山8号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (4)



三李山8号墳出土形象埴輪(1)

写真8

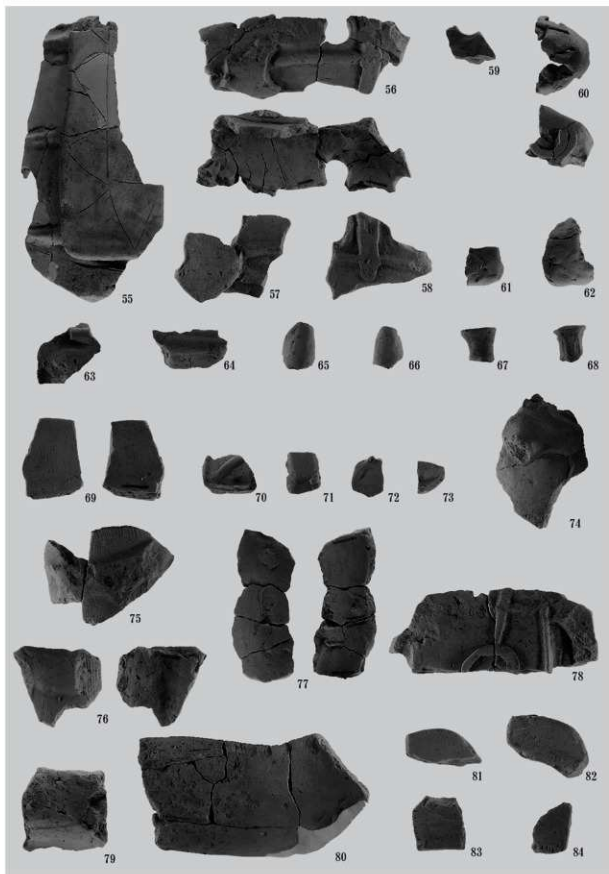


三空山8号墳出土形象埴輪(2)

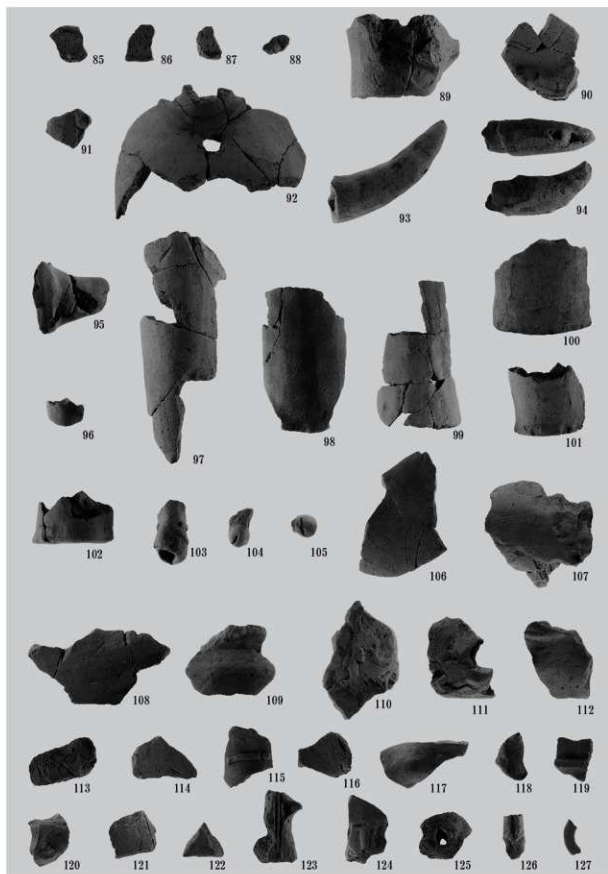


三李山8号填出土形象埴輪(3)

写真 10



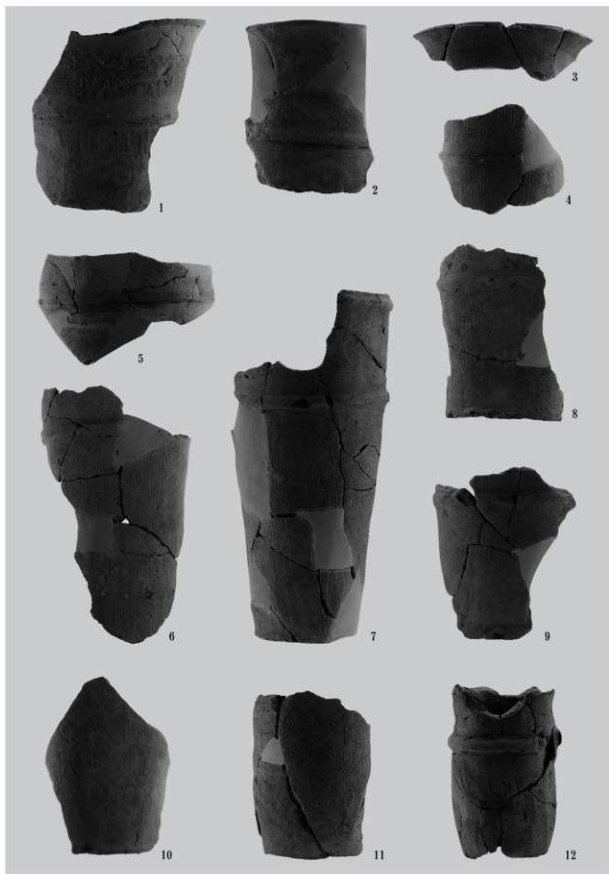
三空山8号墳出土土形象埴輪(4)



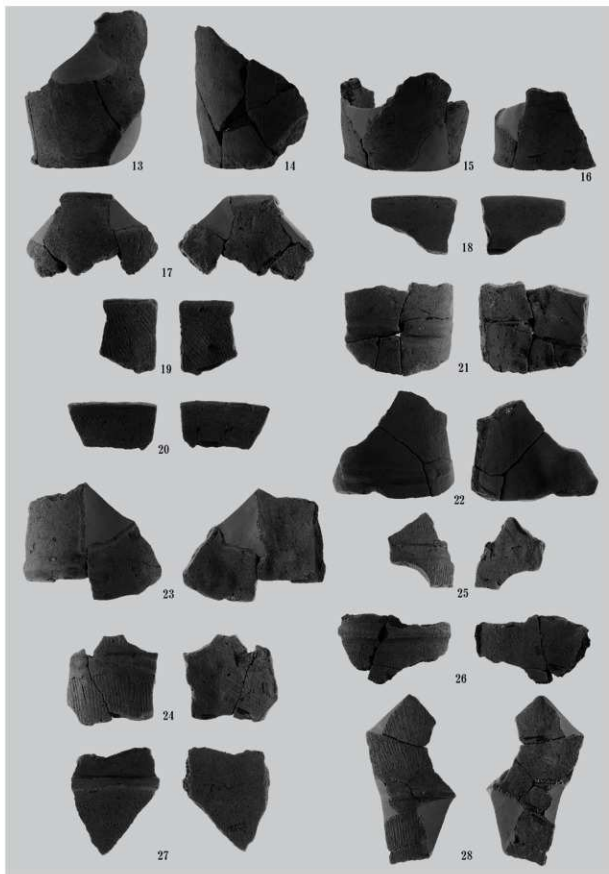
三空山 8 号填出土形象埴輪 (5)



写真 12

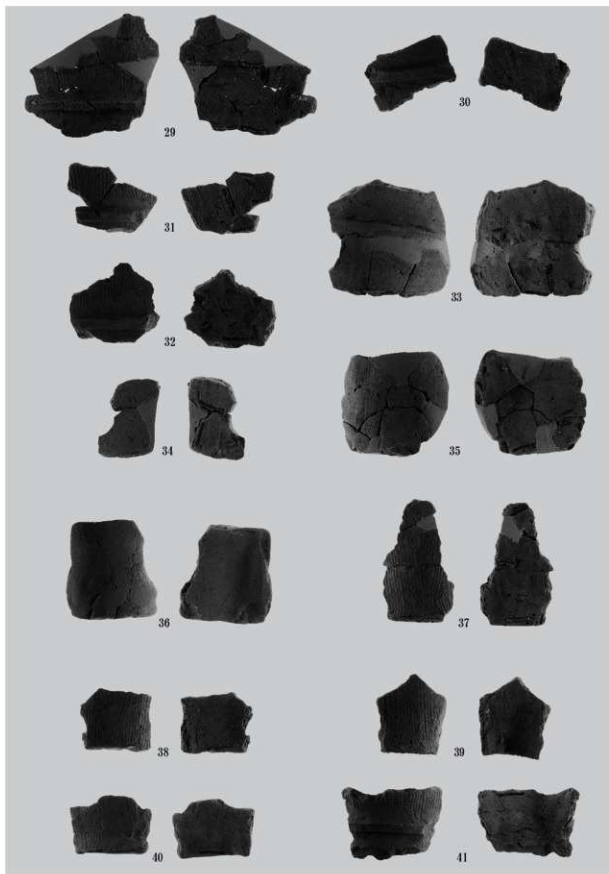


三奈山9号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (1)

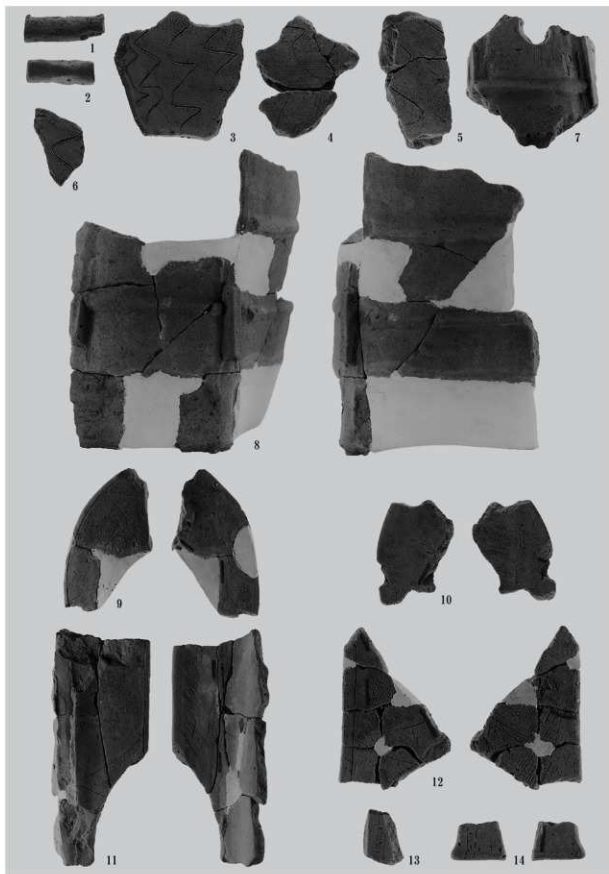


三空山9号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)

写真 14

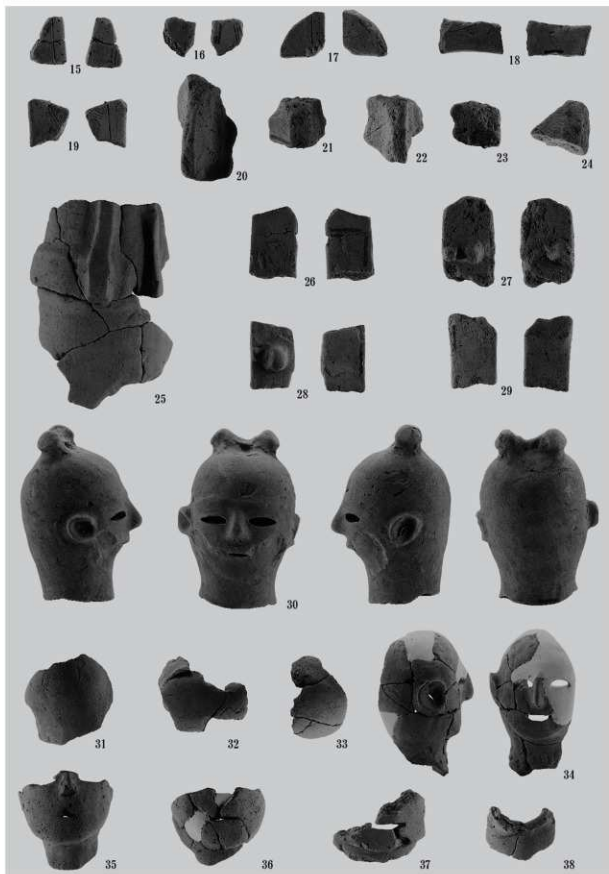


三空山9号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(3)

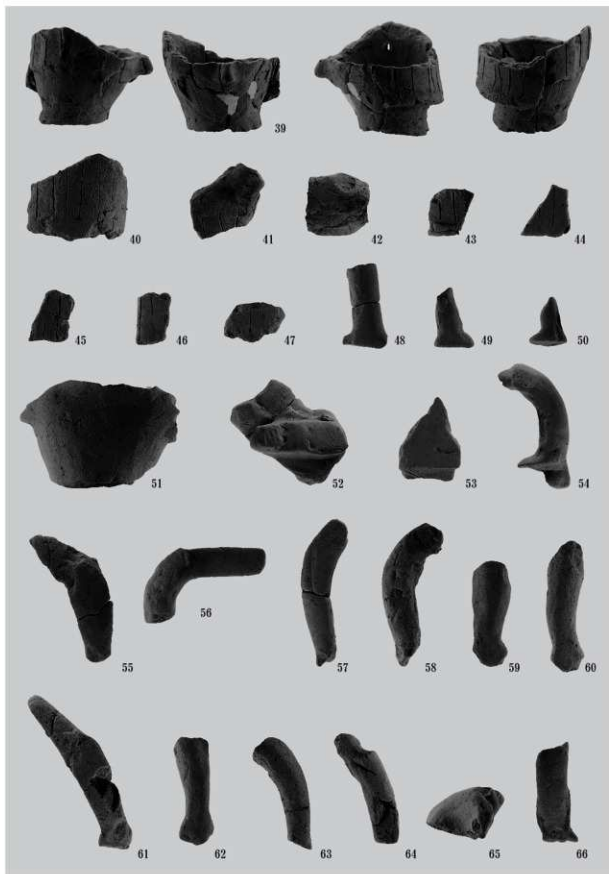


三空山9号墳出土形象埴輪 (1)

写真 16

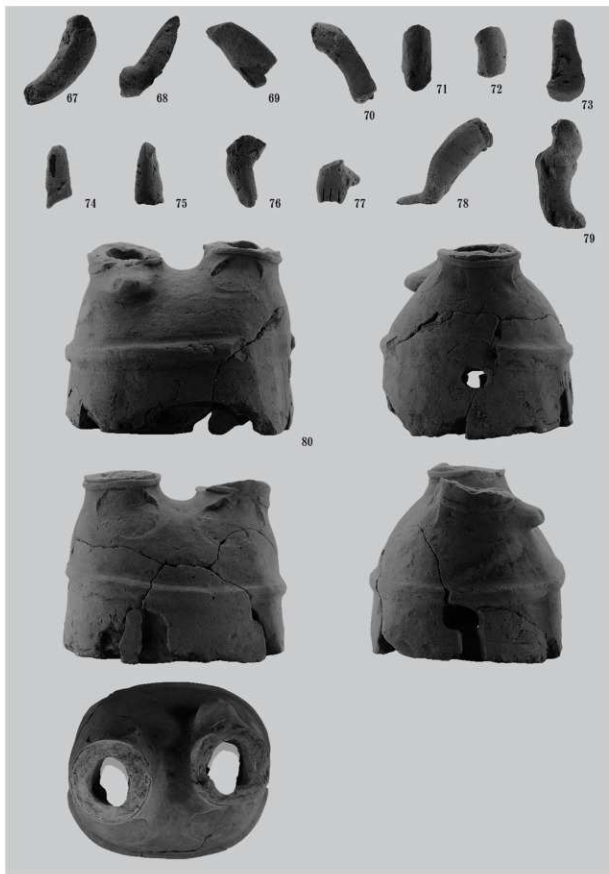


三空山9号墳出土形象埴輪(2)

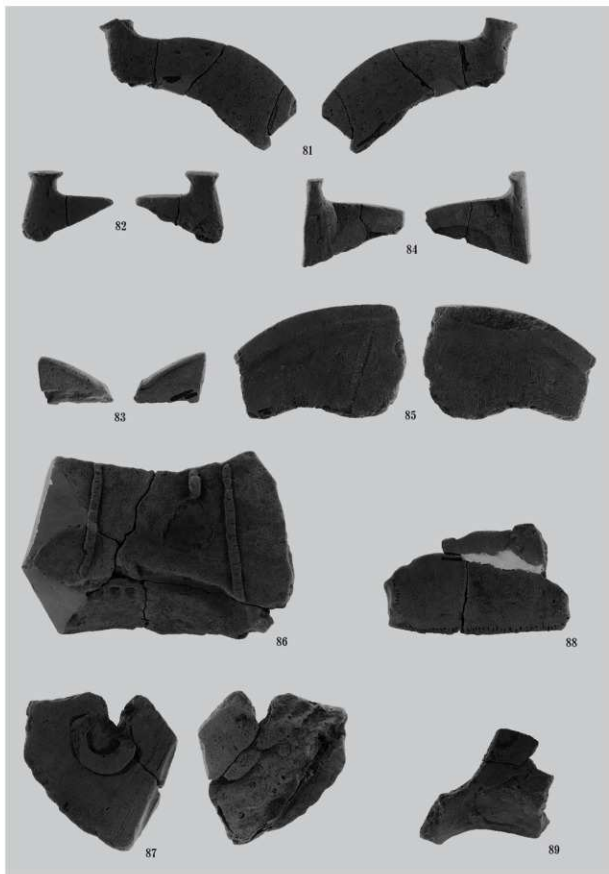


三空山9号墳出土土形象埴輪 (3)

写真 18

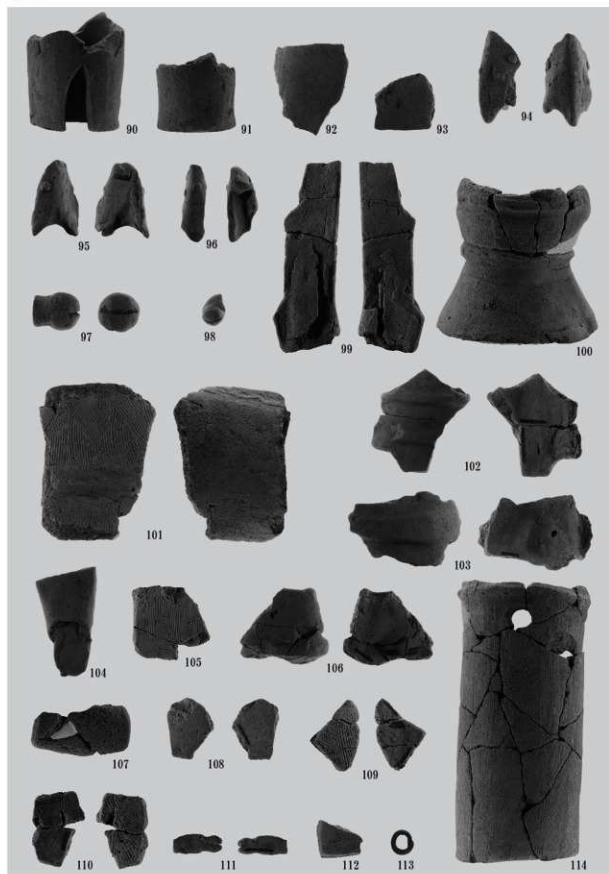


三空山9号墳出土土形象埴輪(4)



三空山9号墳出土形象埴輪(5)





三空山9号墳出土形象埴輪 (6)

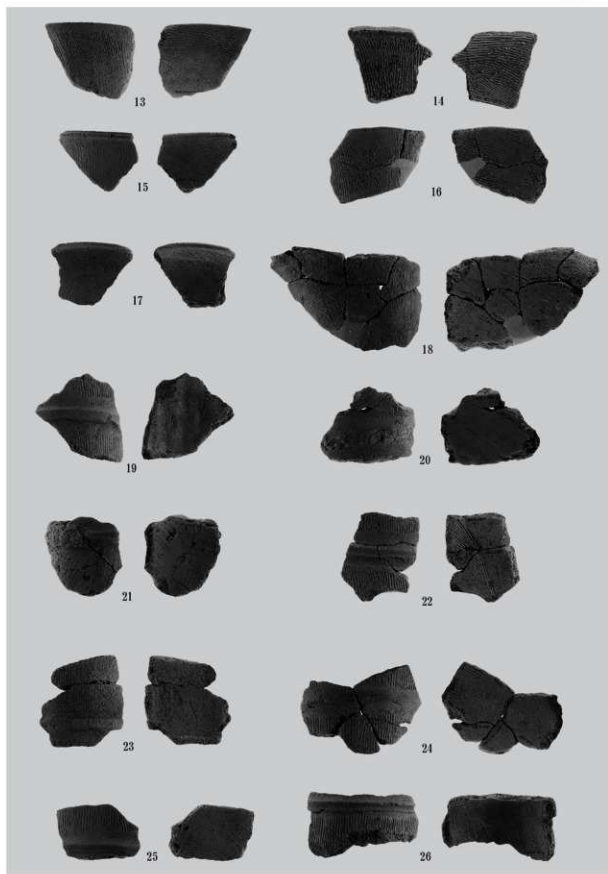


三空山 9 号墳出土土器

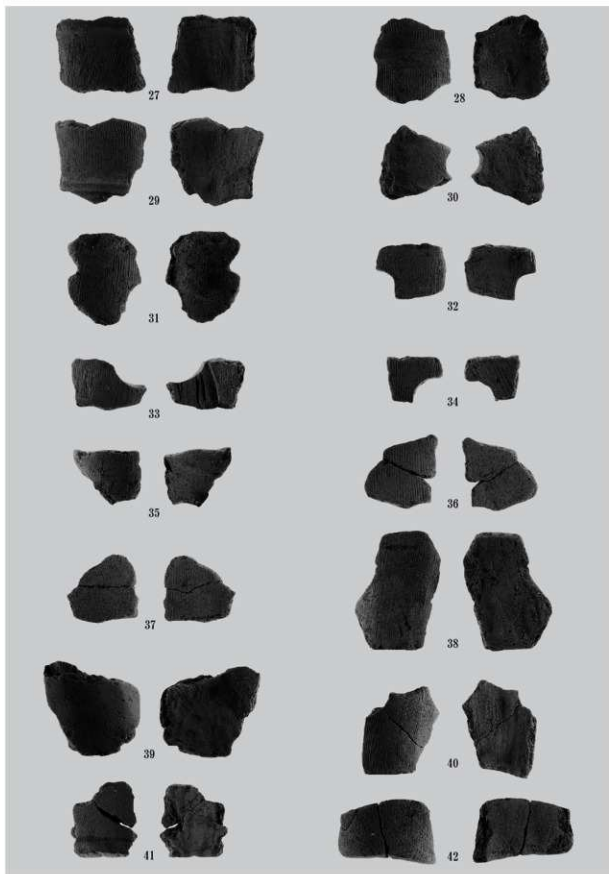
三空山 14 号墳出土土円筒埴輪



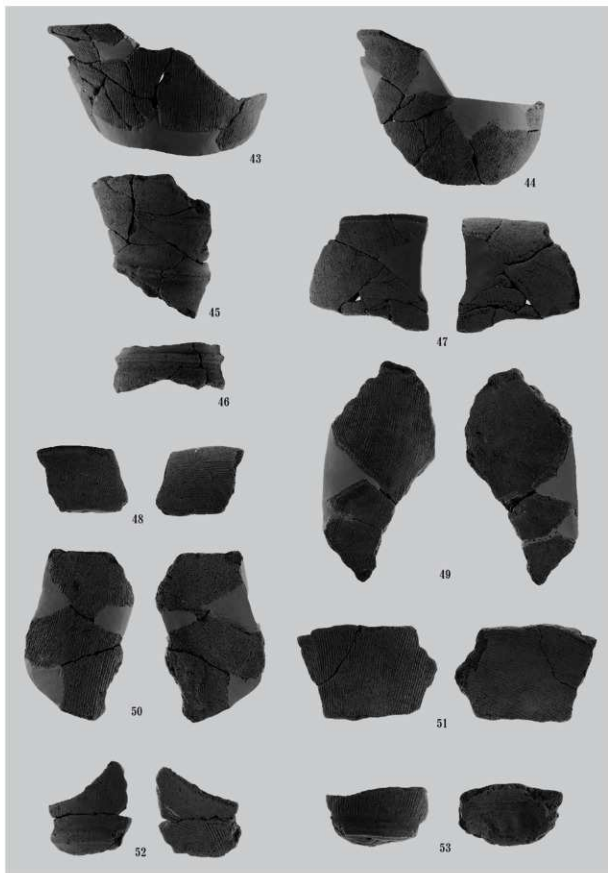
森西1号墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)



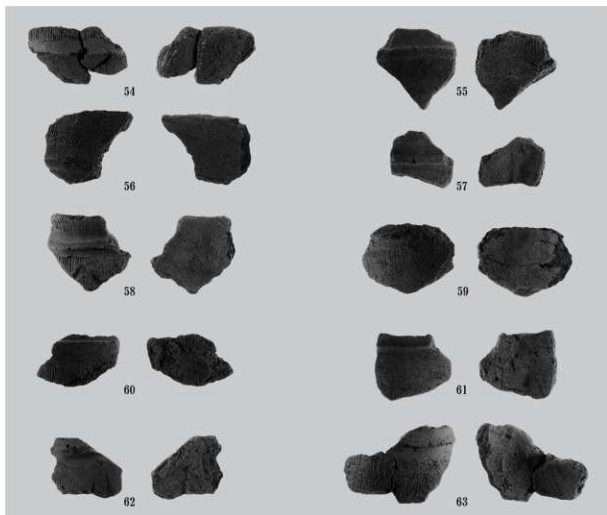
森西 1 号墳出土土円筒・朝顔形埴輪 (2)



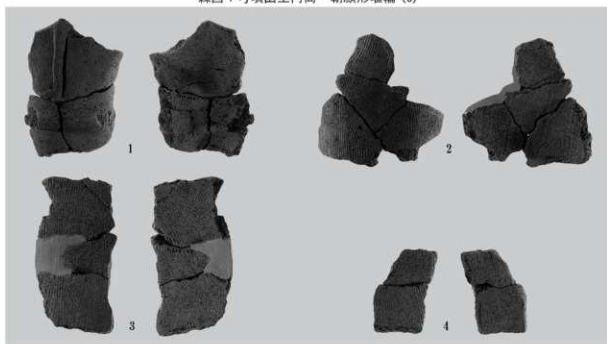
森西1号墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)



森西 1 号墳出土土円筒・朝顔形埴輪 (4)



森西 1 号墳出土円筒・朝顔形埴輪 (5)



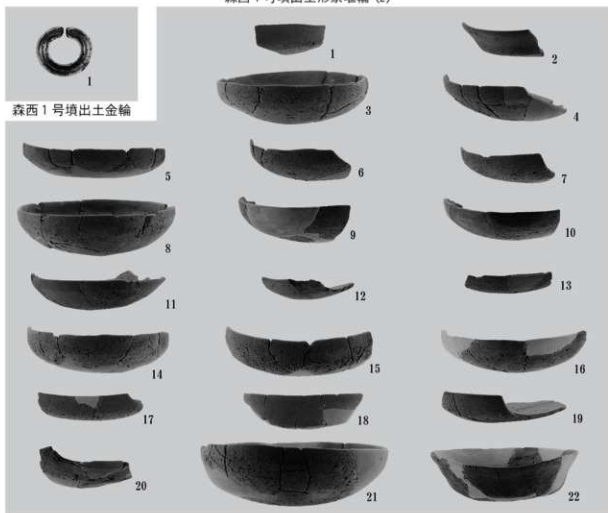
森西 1 号墳出土土形象埴輪 (1)



森西 1 号墳出土形象埴輪 (2)



森西 1 号墳出土金輪



森西 2 号墳出土土器



## 報告書抄録

ふりがな	あきび・おじまこふんぐん すぎのね やしきうち きんもくやま もりにし もりのしたちく							
書名	旭・小島古墳群杉ノ根・屋敷内・三壺山・森西・森ノ下地区							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書VI							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (m)	調査面積	
		市町村	遺跡番号					
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市小島2丁目・小島3丁目・小島及び下野堂地内	112119	171	36°14'48"	139°10'19"	19890911 \n20070515	7,848m <sup>2</sup>	区画整理
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群	古墳	古墳時代前期～終末期		古墳		埴輪、土師器		

---

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第11集

**旭・小島古墳群**

一杉ノ根・屋敷内・三笠山・森西・森ノ下地区一

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書VI

---

平成20年3月25日 印刷

平成20年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷 朝日印刷工業株式会社